第20回一般社団法人

日本ガンマナイフ学会学術総会

The 20th Meeting of the Japanese Leksell Gamma Knife Society

The 8th Meeting of the Asian Leksell Gamma Knife Society

Resilience

～強さとしなやかさ～

プログラム・抄録集 / Program & Abstracts

第20回一般社団法人 The 20th Meeting of the Japanese Leksell Gamma Knife Society

日本ガンマナイフ学会学術総会

会長 森木 章人 Akihito Moriki, M. D.

医療法人治久会 もみのき病院 President, Mominoki Hospital

The 8th Meeting of the Asian Leksell Gamma Knife Society

President Takashi Shuto, M. D.

Vice President, Yokohama Rosai Hospital

会期 Dates

2023年 2 月10日(金)～12日(日)

February 10 [Fri] - 12 [Sun], 2023

会場 Venue

高知県立県民文化ホール

(オレンジホール・グリーンホール)

Kochi Prefectural Culture Hall

(Orange Hall&Green Hall) Japan

https://www.ajlgks2023.com

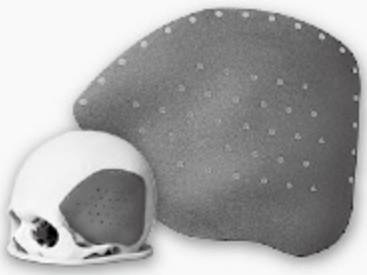
GUNZE

Atsurae

あつらえ

患者様一人ひとりの容態・形状に合わせた頭蓋骨用カスタムメイド人工骨

WEBでの簡易オーダー対応 + 3Dアプリケーションソフト「Mimics Viewer」で立体構造を把握し様々な角度から設計確認が可能

	Atsurae HA	Atsurae PE	Atsurae Ti
			
材　質	ハイドロキシアパタイト	超高分子量ポリエチレン	チタン合金
	・高い生体親和性 ・術中加工が可能	・衝撃に強い超軽量素材 ・材料特性を生かした様々なレイアウト	・プレート厚0.5㎜ ・軽量 ・高強度
納　期	5営業日～(仕様確定後・滅菌済)	9営業日～(仕様確定後・滅菌済)	7営業日～(仕様確定後・未滅菌)

頭蓋プレート製品一覧　医療用品4.整形用品　高度管理医療機器(クラスⅢ)

製品名		サイズ	材質	医療機器承認番号	諸称
Atsurae-HA	カスタム頭蓋骨S	S	ハイドロキシアパタイト	20100BZZ00259A01	カスタム人工骨　CP-2S
Atsurae-HA	カスタム顎・顔面骨S				
Atsurae-HA	カスタム頭蓋骨M	M			カスタム人工骨　CP-2M
Atsurae-HA	カスタム顎・顔面骨M				
Atsurae-PE	カスタム頭蓋骨S	S	超高分子量ポリエチレン	22800BZX00388000	カスタム人工骨　CP-2S
Atsurae-PE	カスタム顎・顔面骨S				
Atsurae-PE	カスタム頭蓋骨M	M			カスタム人工骨　CP-2M
Atsurae-PE	カスタム顎・顔面骨M				
Atsurae-Ti	カスタム頭蓋骨	–	チタン合金	22700BZX00291A01	カスタムメイドプレート　CQ
Atsurae-Ti	カスタム顎・顔面骨				

販売業者

グンゼメディカル株式会社

本　社　〒530-0003 大阪府大阪市北区堂島2丁目4番27号 JRE堂島タワー5F
PHONE (06)4796-3151　FAX (06)4796-3150

東京支店　PHONE (03)4485-0020　FAX (03)4485-0050
札幌営業所　PHONE (011)868-3055　FAX (011)868-3056
仙台営業所　PHONE (022)739-8786　FAX (022)739-8796
名古屋営業所　PHONE (052)218-2820　FAX (052)201-0320
岡山営業所　PHONE (086)212-0556　FAX (086)227-3060
福岡営業所　PHONE (092)415-4861　FAX (092)415-4870

製造販売業者

HOYA Technosurgical株式会社

〒160-0004 東京都新宿区四谷4-28-4
PHONE (03)5369-1710　FAX (03)5369-1711
www.hoyatechnosurgical.co.jp

販売名	承認番号
クラニオフィット-HA	20100BZZ00259A01
クラニオフィット-TI	22700BZX00291A01
クラニオフィット-PE	22800BZX00388000
クラニオフィット頭蓋プレート固定システム	22700BZX00292000

文書管理 No.P000247-1

第20回一般社団法人
日本ガンマナイフ学会学術総会
The 20th Meeting of the Japanese Leksell Gamma Knife Society

Resilience　～強さとしなやかさ～

The 8th Meeting of the
Asian Leksell Gamma Knife Society

Resilience

第20回一般社団法人
日本ガンマナイフ学会学術総会
The 20th Meeting of the
Japanese Leksell Gamma Knife Society

会長：　森木　章人
（医療法人治久会　もみのき病院）

会期：　2023年2月10日（金）-12日（日）
会場：　高知県立県民文化ホール

The 8th Meeting of the
Asian Leksell Gamma Knife Society

President：Takashi Shuto, M.D.
（Yokohama Rosai Hospital）

Date：　February 10(Fri)－12(Sun), 2023
Venue：　Kochi Prefectural Culture Hall

目　次

第20回一般社団法人 日本ガンマナイフ学会学術総会

The 8th Meeting of the Asian Leksell Gamma Knife Society

第20回一般社団法人
日本ガンマナイフ学会学術総会

The 20th Meeting of the Japanese Leksell Gamma Knife Society

Resilience　～強さとしなやかさ～

プログラム・抄録集

ご 挨 拶

第20回一般社団法人　日本ガンマナイフ学会学術総会
会長　**森木　章人**
医療法人治久会　もみのき病院院長

このたび、2023年２月10日（金）～ 12日（日）に第20回日本ガンマナイフ学会学術総会を高知県立県民文化ホールで開催させていただくこととなりました。2020年１月15日に日本で第一例が報告されて以来あっという間に広がり、日本中を恐怖と不安に陥れた新型コロナウイルス感染症によって、私たちの生活は一変しました。コロナウイルスとの闘いが続いていますが、第８波が最後の山場となり、収束に向かうことを期待したいと思います。

今回の学術総会は、横浜労災病院副院長 周藤　高先生が大会長を務められる The 8th Meeting of the Asian Leksell Gamma Knife Society との共同開催となります。その会を高知の地で開催させていただけることを大変誇りに感じております。同じアジア人の仲間同士で最新の知見を持ち寄り、お互い切磋琢磨しながら、治療成績の向上を目指していきたいと思います。そして、この会が親交を深めるいい機会となれば幸いです。

今回の学術総会のテーマを「Resilience ～強さとしなやかさ～」としました。Resilience（レジリエンス）とは「回復力」「弾性（しなやかさ）」を意味する単語ですが、外的な衝撃にも折れることなく、自立的に立ち直ることのできるしなやかさを指します。1968年レクセル教授が開発され、その後50年余りの歳月を経て、ハード面やソフト面において進化を遂げてきたガンマナイフ、これまでのすばらしい実績に加えて、時代の変化に順応していけるしなやかさも備えていけるようにと期待を込めました。また、このたびの新型コロナウイルスという世界的な脅威に対し、個々のレジリエンスを強め組織の強化を図るという意味も含んでいます。

高知県は、輝く太陽のもと、黒潮が打ち寄せる変化に富んだ海岸線をはじめ、四万十川や仁淀川に代表される清流や緑深い山々など、美しく豊かな自然に恵まれています。また、高知の自由で豪快な気風は、「いごっそう」や「はちきん」と呼ばれる、おおらかな中にも芯の通った県民性を生み、アイディア豊かな土佐人の知恵と行動力は、こだわりのある園芸作物や産業技術を生み出しました。そして、「よさこい祭り」に代表される個性豊かな地域の文化を発展させてきました。高知の自然や歴史、食などにも親しんでいただけましたら幸いです。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

役員一覧

幹事	齊藤　延人	東京大学
	樋口　佳則	千葉大学
理事長	城倉　英史	古川星陵病院
副理事長	周藤　　高	横浜労災病院
	芹澤　　徹	築地神経科クリニック
理事	青柳　京子	千葉県循環器病センター
	赤羽　敦也	NTT東日本関東病院
	岩井　謙育	富永病院
	長谷川俊典	小牧市民病院
	長谷川正俊	日高病院
	平井　達夫	藤枝平成記念病院
	森　　久恵	国立循環器病研究センター
	森木　章人	もみのき病院
	八代　一孝	藤元総合病院
	山中　一浩	大阪市立総合医療センター
	山本　昌昭	南東北病院

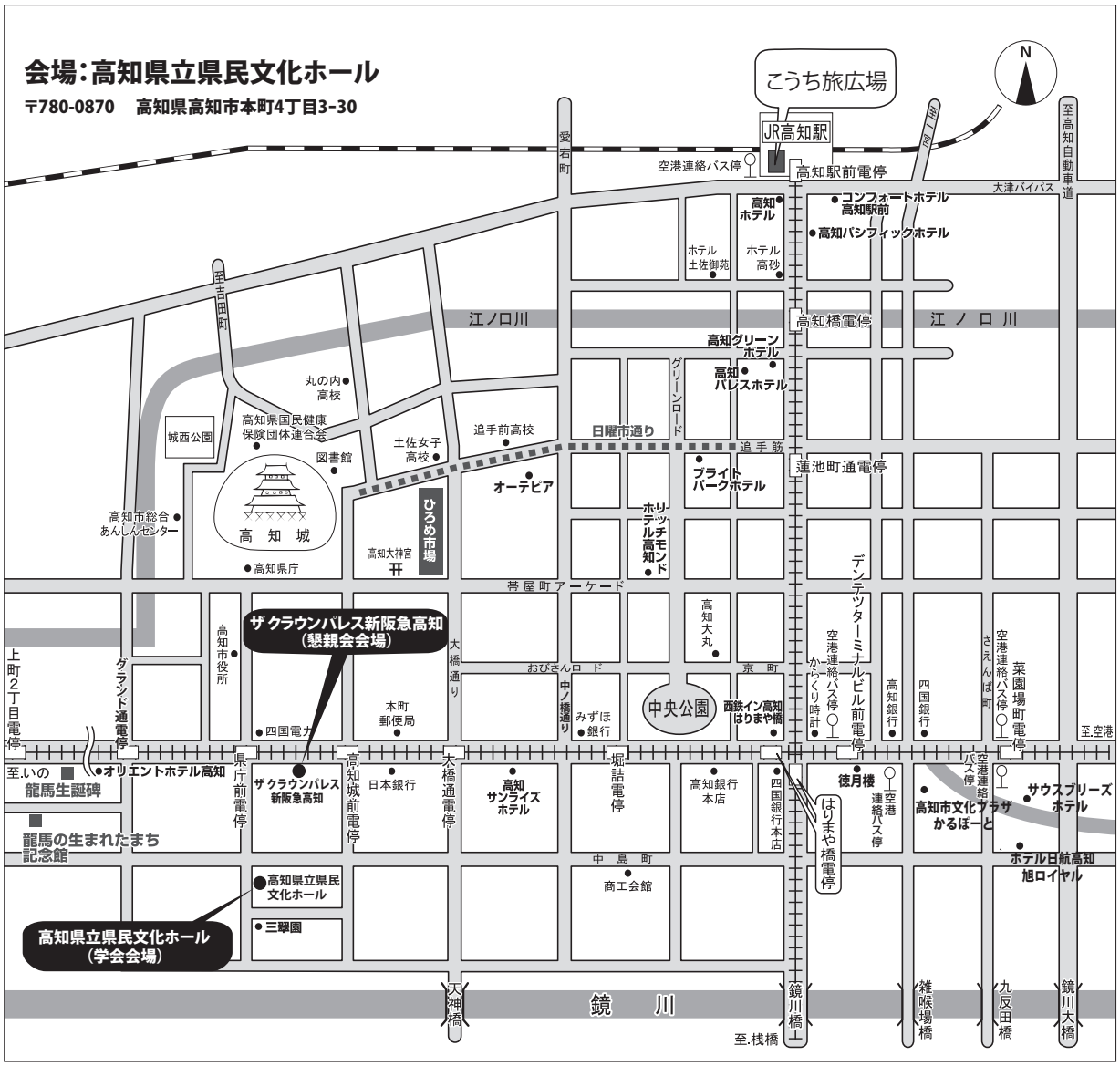
50音順

※任期：2024年２月に予定される次期役員就任までの期間

一般社団法人 日本ガンマナイフ学会（旧ガンマナイフ研究会）歴代会長と開催地

	開催年	会　　長	開催地
第１回	1995年	髙倉　公朋	越後湯沢
第２回	1996年	髙倉　公朋	札　　幌
第３回	1997年	髙倉　公朋	草　　津
第４回	1998年	髙倉　公朋	東　　京
第５回	1999年	小林　達也	岐　　阜
第６回	2000年	細田　浩道	箱　　根
第７回	2002年	福岡　誠二	札　　幌
第８回	2003年	朝倉　哲彦	東　　京
第９回	2004年	掘　　智勝	東　　京
第10回	2005年	城倉　英史	仙　　台
第11回	2006年	平井　達夫	東　　京
第12回	2007年	岩井　謙育	大　　阪
第13回	2009年	山本　昌昭	水　　戸
第14回	2010年	木田　義久	名 古 屋
第15回	2013年	芹澤　　徹	東　　京
第16回	2015年	周藤　　高	横　　浜
第17回	2017年	赤羽　敦也	東　　京
第18回	2019年	赤羽　敦也	仙　　台
第19回	2022年	八代　一孝	鹿 児 島
第20回	2023年	森木　章人	高　　知

交通のご案内



高知龍馬空港からのルート

空港連絡バス

※交通系電子マネー（Suica等）は使用できません。

高知県庁前行

※1番乗場　空港連絡バス

約30分
740円

県庁前（けんちょうまえ）バス停

徒歩3分

タクシー

約30分
約4,000円

JR高知駅からのルート

路面電車

※交通系電子マネー（Suica等）は使用できません。

約10分
200円

※乗換券を受け取り下車

はりまや橋電停

西方面（伊野／朝倉／鏡川橋行）
電車に乗り換え

約10分

県庁前（けんちょうまえ）電停

徒歩3分

高速道路からのルート

高知ＩＣ

県庁方面標識に従ってください

はりまや橋方面標識に従ってください

約20分

会場に駐車場はございません。

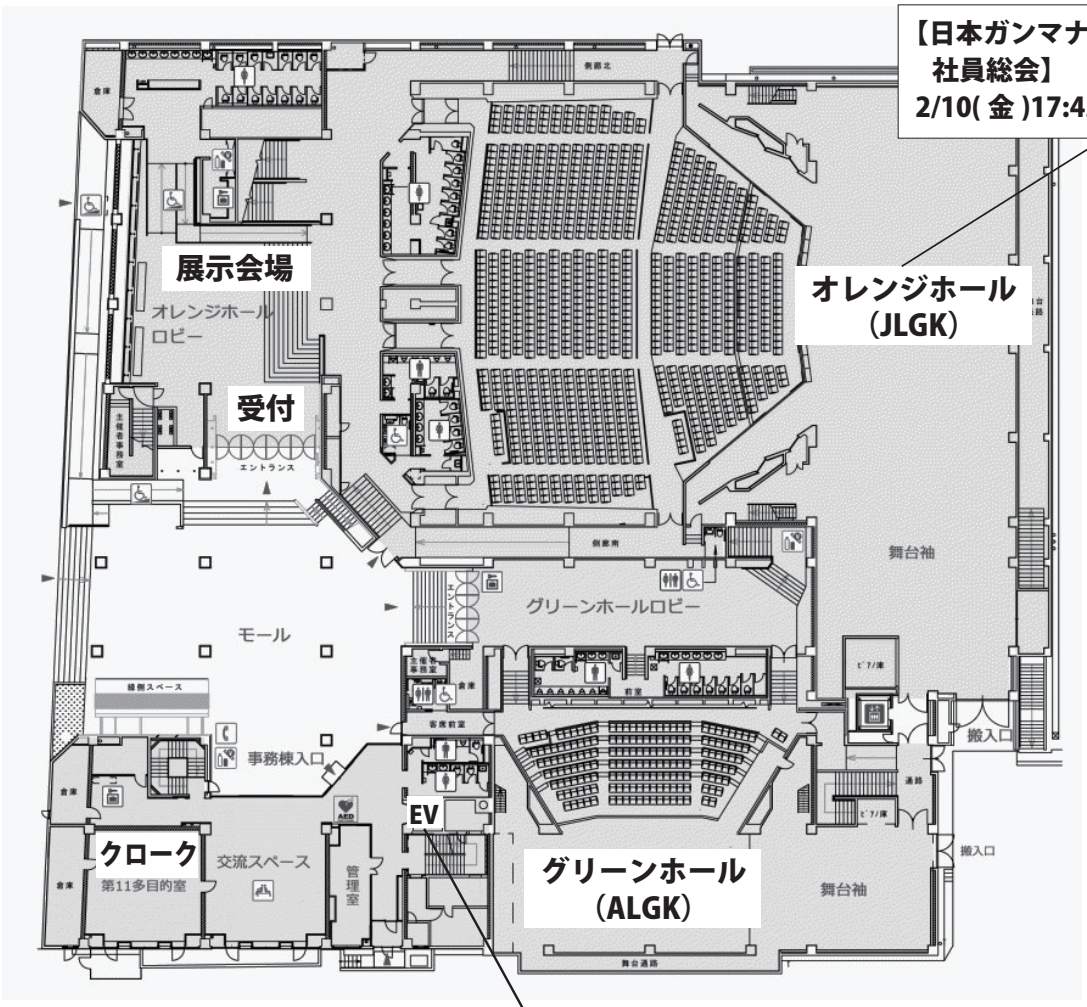
※車でお越しの方は、会場周辺の有料駐車場をご利用ください。

高知県立県民文化ホール

会場案内

◆高知県立県民文化ホール（１Ｆ・４Ｆ）◆

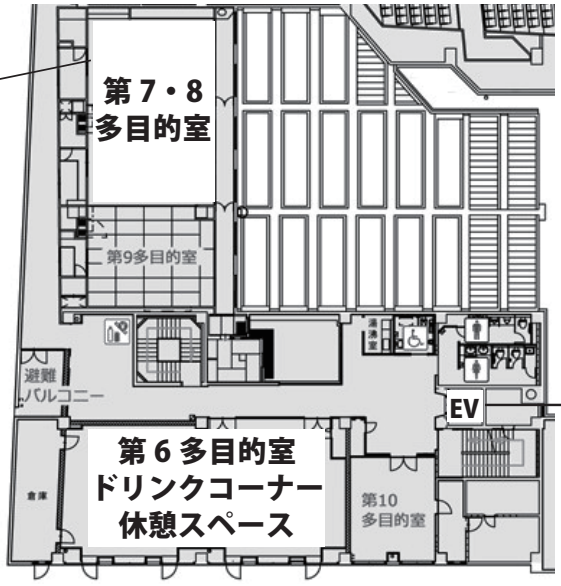
1F



エレベーターで 4F へ

事務棟 4F

【日本ガンマナイフ学会 理事会】
2/10(金)16:40 ～ 17:40



※別会場
（ザ クラウンパレス新阪急高知）
◇【会員懇親会　3F 宴会場】
2/10(金)19:00 ～ 21:00
◇【ALGK 世話人会　3F 薔薇の間】
2/11(土)8:00 ～ 9:00

参加者へのご案内

◆会　期

2023年２月10日（金）～ 12日（日）

◆会　場

高知県立県民文化ホール　オレンジホール・グリーンホール
〒780-0870 高知県高知市本町4丁目3－30
TEL：088-824-5321（代表）
https://kkb-hall.jp/index.html

◆参加受付

・受付時間　２月10日（金）　12：00 ～ 18：00
　　２月11日（土祝）９：15 ～ 18：40
　　２月12日（日）　９：15 ～ 10：40
・場所　　オレンジホール　１階ロビーで行います。

◆名　札

JLGK事前参加登録の方は、事前にご郵送します。
ALGK及び当日参加の方は、参加受付で名札をお渡しいたします。
学会場内ではご着用ください。

◆プログラム・抄録集

JLGK事前参加登録の方は、事前にご郵送します。
ALGK及び当日参加の方は、学会当日、受付で参加者に各１冊配付いたします。
２冊目以降については、１冊2,000円にて販売いたします。
部数に限りがあり、ご購入いただけない場合もございますのでご了承ください。

◆参加費（当日登録）

医師・医薬メーカー　　22,000円
看護師・技師・事務職　　8,000円
※学会参加者はランチョンセミナーを含むすべての学術セッションならびに展示会場への入場可、会員懇親会無料（事前参加登録の方のみ）です。

◆お支払方法

参加費のお支払いは、クレジットカード（VISA、Master、AMEX、JCB）にて受け付けます。現金でのお支払いはできませんので、クレジットカード情報をご準備の上、受付にてご自身でWEBにて参加登録及び決済をしていただきます。
「（一社）日本脳神経外科学会会員カード」を用いたお支払いは受け付けません。

◆日本脳神経外科学会員の方へ

・専門医クレジット
　日本脳神経外科学会専門医の方は、本会参加が専門医クレジット対象（５点）となります。参加受付は最初の入場時にオレンジホールロビーに設置しています参加登録受付端末にカードをかざしてください。
・領域講習
　本会においては、３日間を通じて最大３単位までの取得が可能であり、次頁セッションが対象となります。（一社）日本脳神経外科学会会員カードをご持参ください。

（一社）日本脳神経外科学会会員カード

■領域講習対象セッションと単位数

【対象のセッションを追記　/　日時 会場 セッション 単位数の項目を表にする】

日　　時	会　　場	セッション	単位数
2月11日（土祝）　12：05～13：05	グリーンホール	ランチョンセミナー	1単位
2月11日（土祝）　15：20～16：20	オレンジホール	教育講演2	1単位
2月12日（日）　　9 ：30～10：30	オレンジホール	教育講演3	1単位

認定単位数

・入退場時刻（カードリーダー受付時刻）から単位を算出します。日本脳神経外科学会専門医の先生は、参会受付だけではなく、オレンジホールロビーの【単位受付】にもお立ち寄りいただき「(一社）日本脳神経外科学会会員カード」をカードリーダーにかざして受付を行ってください。入退場時の受付を失念された場合、後日の対応は一切できません。

◆発表内容の写真撮影、録音・録画について

各会場内での撮影（写真・映像)、ならびに録音を固くお断りいたします。

◆Wi-Fi利用場所

会場内は、以下の指定エリアのみWi-Fiの使用が可能です。当日エリアごとに掲示される看板にあるID・パスワードにて接続してご利用いただけます。

・オレンジホール ロビー　・グリーンホール ロビー　・第6多目的室 ※ドリンクコーナー

◆ランチョンセミナー

2月11日（土祝）にランチョンセミナーをグリーンホールで行います。
お弁当をご用意しておりますが、数に限りがありますので予めご了承ください。

◆ドリンクコーナー

期間中、事務棟4階「第6多目的室」に設けております。

◆クローク

事務棟1階「第11多目的室」に設けております。

◆会員懇親会：参加無料　※感染症対策の観点から、着席形式で開催するため
事前申し込みの方が対象となります。予めご了承願います。

2月10日（金）19：00より、「ザ クラウンパレス新阪急高知 3階花の間」にて
行います。なお、受付で名札の確認をさせていただきます。

◆一般社団法人日本ガンマナイフ学会理事会

２月10日（金）16：40 ～ 17：40予定で、高知県立県民文化ホール 事務棟 4 階
「第７・８多目的室」にて行います。

◆学会事務局

第20回一般社団法人日本ガンマナイフ学会学術総会　学会事務局
〒780-0952 高知県高知市塚ノ原6-1
医療法人治久会　もみのき病院
E-mail : japan@algks2023.com

◆運営事務局 株式会社 歳時記屋

〒780-0072 高知県高知市杉井流19番2号
TEL：088-882-0333　　FAX：088-882-0322
E-mail：info@ajlgks2023.com（Japanese Only）

座長・演者へのご案内

《座長の方へ》

担当セッション開始予定時刻の15分前までに担当会場へお越しいただき、次座長席（会場右手前方）にてお待ちください。

各セッションの進行は座長に一任いたしますが、終了時刻は厳守いただきますようお願いいたします。

《演者の方へ》

1．発表時間 一般演題　口演：８分／質疑：２分
プログラムの円滑な進行のため、時間厳守でお願いいたします。口演終了１分前に黄ランプ、終了時は赤ランプにてお知らせいたします。質疑応答は座長の指示に従ってください。

2．すべてPCによる発表のみです。※やむをえず不参加の場合は動画データでのご発表となります。

3．PC受付はオレンジホール１階 ロビーにございます。ご発表の30分前までに必ず受付をお済ませください。
PC受付時間
２月10日（金）　12：00 ～ 17：30
２月11日（土祝）　9：15 ～ 17：30
２月12日（日）　9：15 ～ 10：40

4．ご発表セッションの開始15分前までには会場内の次演者席（会場左手前方）にて待機してください。

5．ご発表時は、演台上のマウス・キーボードにて、ご自身で操作を行ってください。

6．画像の解像度はフルHD（1920×1080ピクセル）です。このサイズより大きい場合、スライドの周囲が切れてしまいますので、スライドショーの設定をフルHDに合わせてください。スライドサイズは16：９でご用意ください。JLGKのご発表は現地発表のみでWEB配信はございません。

7．音声は使用できません。

8．発表者ツールは使用できません。

9．動画を使用する場合、Macintoshをご利用の場合はご自身のPCをお持ちください。

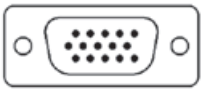
【データを持参される場合（Windowsのみ）】

・データは、USBメモリーでお持ちください。
・上記メディア以外はご使用になれませんのでご注意ください。
・会場ではWindows 10を搭載したPCをご用意いたします。アプリケーションソフトは、Windows版PowerPoint 2019（最新のMedia Playerの初期コーデックで再生可能なもの、WMV形式推奨）のみとします。
・発表データにリンクファイル（静止画・グラフ等）がある場合は、PowerPointファイルとリンクファイルを１つのフォルダにまとめて保存してください。
・発表データは以下のフォントを推奨します。
日本語：MSゴシック、MSPゴシック、MS明朝、MSP明朝
英　語：Century、Times New Roman
・発表データ作成後、事前に必ずウイルスチェックと、作成に使用されたパソコン以外での動作確認をお願いいたします。
・ご提出いただいた発表データは、運営事務局にて責任を持って消去いたします。

【PCを持参される場合（Windows、Macintoshとも可）】

・バックアップ用データとしてメディアもお持ちください。
・必ずパソコン付属の電源アダプターをお持ちください。
・会場にて接続するケーブルのコネクター形状はMini D-sub 15pin又はHDMIです。
この形状に合ったパソコンをご用意いただくか、もしくはこの形状に変換するコネクターをご持参ください。

Mini D-sub 15pin　　HDMI



・パスワード設定、スクリーンセーバー、省電力設定はあらかじめ解除してください。
・ご発表後、会場内のオペレーター席でパソコンを返却いたします。

10. 利益相反（COI）の開示について
当学術総会における演題発表時には、所属学会の規定に沿って、利益相反（COI）の有無を開示してください。 以下のサンプルを参考に、開示スライドを発表スライドに含めてください。

■COIなしの場合

（演題名）

（筆頭演者氏名）
（所属）

本演題の発表に際して開示すべきCOIは
ありません。

■COIありの場合

（演題名）
（筆頭演者氏名）
（所属）
本演題の発表に際して開示すべきCOIは
以下の通りです。

1. 役員，顧問職なし
2. 株の保有なし
3. 特許権使用料なし
4. 講演料あり（○○製薬）
5. 原稿料なし
6. 研究費あり（○○製薬）
7. その他なし

金額は開示不要

日程表

第1日　2月10日（金）

	グリーンホール ＜ ALGK ＞	オレンジホール ＜ JLGK ＞	4F 第6多目的室 Multipurpose room
09:00			
10:00			
11:00			
12:00	12：00 **Reception**	12：00 **受付**	
13:00	12：55 **Opening Ceremony**	12：55 **オープニングセレモニー**	
	13：10 **General Session 1** Benign tumors Moderators：Motohiro Hayashi Hung Chuan Pan 14：30	13：00 **教育講演 1** 座長：森木 章人 演者：原子力規制庁 青山 勝信	
14:00		14：00 **一般演題 1** 看護・チーム医療 座長：蓮井 光一、戸田 かお里 14：40	
	14：40 **ALGK/JLGK Symposium 1** SRT for metastatic brain tumors －optimal number of fraction and dose Moderators：Yoshiyasu Iwai Se-Hyuk Kim 16：00		ドリンクコーナー
15:00			
16:00	**ALGK/JLGK joint announcement**		
	16：15 **General Session 2** Vascular disorders 1 Moderator：Chain-Fa-Su 17：05	16：15 **General Session 3 (ALGK)** Functional disorders and others ※ALGK On-site Only Moderator：Jung-Il Lee 17：25	
17:00	17：10 **General Session 4** Imaging, Dose planning, and Physics Moderator：Hyun-Tai Chung 18：00	17：45 **（一社）日本ガンマナイフ学会** **第5回定例社員総会** 18：15	
18:00			
19:00	19：00 **ALGK/JLGK Get-together Party** (The Crown Palace New Hankyu Kochi)	19：00 **ALGK /JLGK 懇親会** （ザ クラウンパレス 新阪急高知）	
20:00			
21:00	21：00	21：00	

日程表

第2日 2月11日（土祝）

	グリーンホール ＜ALGK＞	オレンジホール ＜JLGK＞	4F 第6多目的室 Multipurpose room
08:00			
09:00			
	9：15 **Reception**	9：15 **受付**	
10:00	9：45 **Elekta Seminar** Moderator：Bengt Karlsson Speaker：James McInerney Sponsored by Elekta K.K. 10：45	9：45 **文化講演** 座長：山本 昌昭 演者：有光 誠人（Current Topics） 森 惟明 10：45	共催：ノバルティスファーマ株式会社 **ドリンクコーナー**
11:00	10：55 **Educational Lecture 1** Moderator：Hidefumi Jokura Speaker：Bengt Karlsson 11：55	10：55 **一般演題 2** **転移性脳腫瘍 1** 座長：四方 聖二、平井 達夫 11：55	
12:00	12：05 **ALGK/JLGK Luncheon Seminar** Moderator：Takashi Shuto Speaker：Motohiro Hayashi Sponsored by Brainlab K.K.		
13:00	13：05 13：15 **ALGK/JLGK Symposium 2** Gamma Knife radiosurgery for large AVM Moderators：Hisae Mori Wan-Yuo Guo 14：20		
14:00		Moderators：Atsuya Akabane Maheep Singh Gaur	
	14：30 **General Session 5** Vascular disorders 2 15：10	14：30 **一般演題 3** **転移性脳腫瘍2** 座長：岩井 謙育 15：10	**高知名産品の軽食提供** (Light meals of Kochi)
15:00	15：20 **General Session 6** Metastatic brain tumors 1 Moderators：Masatoshi Hasegawa Young Seok Park 16：20	15：20 **教育講演 2** 座長：森木 章人 演者：杉本 健樹 16：20	
16:00	16：30 **General Session 7** Metastatic brain tumors 2 Moderators：Shoji Yomo Theodor S. Vesagas 17：30	16：30 **一般演題 4** **良性腫瘍・その他の悪性腫瘍** 座長：樋口 佳則、青柳 京子 17：30	
17:00	17：40 **Educational Lecture 2** Moderator：Nobuhito Saito Speaker：Wan-Yuo Guo 18：40	17：40 **一般演題 5** **脳動静脈奇形・その他** 座長：長谷川 俊典、赤羽 敦也 18：40	
18:00			
19:00			
20:00			
21:00			

日程表

第3日　2月12日（日）

	グリーンホール ＜ ALGK ＞	オレンジホール ＜ JLGK ＞	4F 第6多目的室 Multipurpose room
09:00			
	9：15 **Reception**	9：15 **受付**	
	9：30 **General Session 8** Metastatic brain tumors 3 Moderators：Yoshinori Higuchi Huai-che Yang 10：30	9：30 **教育講演 3** 座長：森本 雅徳 演者：平野 透 共催：アミン株式会社 10：30	**ドリンクコーナー**
10:00			
	10：35 **ALGK/JLGK Symposium 3** Long term results of Gamma Knife radiosurgery for benign lesions －efficacy and complication Moderators：Toshinori Hasegawa Wen-Yuh Chung 12：20	10：35 **一般演題 6** Icon・技術 座長：山中 一浩、水口 紀代美 11：45	**高知名産品の軽食提供** (Light meals of Kochi)
11:00			
12:00		Moderators：Kazutaka Yatsushiro Szu-Hao Andrew Liu	
	12：25 **General Session 9** Vascular disorders 3 13：05	12：25 **日本ガンマナイフ学会特別企画** 「震災から学ぶ、そしてこれから」 座長：城倉 英史、森木 章人 13：05	
13:00	13：10 **Closing Ceremony**	13：10 **クロージングセレモニー**	
14:00			
15:00			
16:00			
17:00			
18:00			
19:00			
20:00			

第1日　2月10日（金）オレンジホール

12：55 ～ 13：00　オープニングセレモニー

13：00 ～ 14：00　教育講演1

座長：森木　章人（もみのき病院　脳神経外科）

特定放射性同位元素の防護及び管理上の注意点・その後

演者：青山　勝信（原子力規制庁　長官官房　放射線防護グループ　放射線規制部門　安全管理調査官）

14：00 ～ 14：40　一般演題1：看護・チーム医療

座長：蓮井　光一（岡村一心堂病院　脳神経外科）
戸田　かお里（もみのき病院　看護部）

JG1-1　ガンマナイフ治療時鎮痛・鎮静持続時間の評価

脳神経センター大田記念病院　看護部　名田　睦子

JG1-2　ガンマナイフ治療患者への支援の実際 ～入院前から退院まで～

もみのき病院　看護部　岡本　三穂

JG1-3　GAMMAチームの中の放射線技師としての役割

もみのき病院　放射線技術科　藤田　明世

JG1-4　定位放射線治療（ガンマナイフ）における臨床工学技士の役割と必要性

東京女子医科大学　臨床工学部　早坂　啓佑

第2日　2月11日（土祝）オレンジホール

9：45 ～ 10：45　文化講演　　**【共催：ノバルティスファーマ株式会社】**

座長：山本　昌昭（南東北病院　脳神経外科）

<Current Topics>　夜間高血圧に関する最新の話題

演者：有光　誠人（もみのき病院　脳神経外科）

長寿時代に老・病の壁を乗り越えWell-Beingに生きるには

演者：森　惟明（高知大学名誉教授）

10：55 ～ 11：55　一般演題2：転移性脳腫瘍1

座長：四方　聖二（相澤病院　脳神経外科）

平井　達夫（藤枝平成記念病院　脳神経外科）

JG2-1　肺腺癌および乳癌脳転移患者に対するガンマナイフ治療後の全身死発生リスク評価：DS-GPAの有用性

築地神経科クリニック　東京ガンマユニットセンター　芹澤　　徹

JG2-2　肺腺癌および乳癌脳転移患者に対するガンマナイフ治療後の神経死発生リスク評価

築地神経科クリニック　東京ガンマユニットセンター　芹澤　　徹

JG2-3　転移性脳腫瘍に対する定位放射線による再治療の最近の傾向：単施設における22年1144例の経験から

南東北病院　脳神経外科　山本　昌昭

JG2-4　卵巣癌脳転移に対するガンマナイフの治療効果の検討（JLGK1801）

横浜労災病院　脳神経外科　松永　成生

JG2-5　腎細胞癌からの脳転移に対するガンマナイフ治療後に生じる難治性脳浮腫に対するVEGFR-TKIの有用性

NTT東日本関東病院ガンマナイフセンター　野田　龍一

JG2-6　免疫チェックポイント阻害薬を併用した定位放射線治療は肺癌脳転移の予後を有意に改善する（傾向スコア分析）

相澤病院　がん集学治療センター　ガンマナイフセンター　四方　聖二

12：05 ～ 13：05　ランチョンセミナー（ALGK・JLGK合同）※グリーンホール【共催：ブレインラボ株式会社】

座長：周藤　高（横浜労災病院　脳神経外科）

Treatment strategy and clinical results of Gamma Knife stereotactic radiosurgery for high grade pediatric arteriovenous malformation: Utility and the role of Brainlab “Vascular ELEMENTS” software associated with modern Gamma knife system (Icon).

演者：林　基弘（東京女子医科大学　脳神経外科）

14：30 ～ 15：10　一般演題 3 ：転移性脳腫瘍 2

座長：岩井　謙育（富永病院　脳神経外科）

JG3-1　比較的大きな転移性脳腫瘍に対するガンマナイフIconによる分割照射の治療成績
中村記念病院　脳神経外科　ガンマナイフセンター　佐藤　憲市

JG3-2　大型のう胞性転移性脳腫瘍に対するのう胞吸引術を併用した分割ガンマナイフ治療
NTT東日本関東病院ガンマナイフセンター　野田　龍一

JG3-3　転移性脳腫瘍ののう胞が大きくても、必ずしもドレナージ術は必要ではない
新須磨病院　脳神経外科　近藤　　威

JG3-4　局所再発と断端再発を繰り返し、治療に難渋した乳がん小脳転移の 3 例
秋田県立循環器・脳脊髄センター　脳神経外科　河合　秀哉

15：20 ～ 16：20　教育講演 2

座長：森木　章人（もみのき病院　脳神経外科）
ゲノム情報を利用した最新の乳癌治療　―遺伝性腫瘍とがんゲノム医療を中心に―
演者：杉本　健樹（高知大学医学部附属病院　乳腺センター長　臨床遺伝診療部長
がんゲノム医療センター長）

16：30 ～ 17：30　一般演題 4 ：良性腫瘍・その他の悪性腫瘍

座長：樋口　佳則（千葉大学大学院医学研究院　脳神経外科）
青柳　京子（千葉県循環器病センター　ガンマナイフ治療部）

JG4-1　前庭神経鞘腫へのガンマナイフ治療後早期の形状変化と聴力低下の関係調査
脳神経センター大田記念病院　脳神経外科　中崎　清之

JG4-2　75歳以上の高齢者の聴神経腫瘍に対するガンマナイフ治療の成績：非高齢者との比較
千葉県循環器病センター　ガンマナイフ治療部　青柳　京子

JG4-3　拡散テンソルトラクトグラフィを用いたガンマナイフ治療計画への応用
もみのき病院　脳神経外科　道上　怜奈

JG4-4　孤立性線維性腫瘍/血管周皮腫の術後局所再発に対するガンマナイフ治療の成績
東京女子医科大学　脳神経外科　横山　貴大

JG4-5　脈絡膜悪性黒色腫に対するガンマナイフ治療の長期治療成績
大阪市立総合医療センター　脳神経外科　岡田由実子

JG4-6　当施設における再発中枢神経系原発悪性リンパ腫に対するガンマナイフの治療成績
関西ろうさい病院　脳神経外科　阿知波孝宗

17：40 ～ 18：40　一般演題 5 ：脳動静脈奇形・その他

座長：長谷川　俊典（小牧市民病院　脳神経外科）
赤羽　敦也（NTT東日本関東病院　ガンマナイフセンター）

JG5-1　小児と成人における脳動静脈奇形に対するガンマナイフの治療成績の比較 ― ケースコントロール研究による検討

古川星陵病院　鈴木二郎記念ガンマハウス　川岸　　潤

JG5-2　脳動静脈奇形に対する治療後の閉塞確認におけるZero TE-MRAの有用性の検討

国立研究開発法人　国立循環器病研究センター病院　脳神経外科　福森　惇司

JG5-3　プロテインS活性低下を呈し自然閉塞した未破裂中型脳動静脈奇形の一例

NTT東日本関東病院　ガンマナイフセンター　赤羽　敦也

JG5-4　脳動静脈奇形に対する塞栓術先行のガンマナイフ治療の有用性

千葉大学　脳神経外科　久保田沙織

JG5-5　脳動静脈奇形に対するガンマナイフ後に放射線誘発性悪性脳腫瘍を発生した 3 例

小牧市民病院　脳神経外科　長谷川俊典

JG5-6　未破裂脳動脈瘤による症候性三叉神経痛：ガンマナイフによる疼痛制御とコイル塞栓術の併用

東千葉メディカルセンター　脳神経内科　松田　信二

第３日　２月12日（日）オレンジホール

9：30 ～ 10：30　教育講演３　【共催：アミン株式会社】

座長：森本　雅徳（もみのき病院　脳神経外科）

ガンマナイフならびに脳神経外科手術に用いる三次元画像の活用について

演者：平野　透（社会医療法人柏葉会　柏葉脳神経外科病院　先端医療研究センター）

10：35 ～ 11：45　一般演題６：Icon、技術

座長：山中　一浩（大阪市立総合医療センター　脳神経外科）
水口　紀代美（もみのき病院　放射線技術科）

JG6-1　ガンマナイフ治療最適化ソフトウェアLightningの使用経験

洛西シミズ病院　脳神経外科　川邊　拓也

JG6-2　転移性脳腫瘍の新規病変出現頻度と時期の検討 ―ICON用マスクの保存期間の考察 ―

藤元総合病院　脳神経外科　八代　一孝

JG6-3　マスク治療時の頭部位置の再現性

もみのき病院　放射線技術科　前田　知則

JG6-4　Gamma Knife ICONとTomotherapyにおける線量分布の比較

大阪市立総合医療センター　医療技術部　山口　英雄

JG6-5　ガンマナイフIconにおけるトラブルシュート

洛西シミズ病院　放射線科　神内　　満

JG6-6　Vantage頭蓋フレーム用いた際のCT・MRI・CBCT画像間の位置座標比較

社会医療法人大真会　大隈病院　ガンマナイフセンター　加藤　夕典

JG6-7　治療後再発と放射線壊死の鑑別における11C-methionine PETとASLの比較検討

秋田県立循環器・脳脊髄センター　放射線科診療部　高橋　一広

12：25 ～ 13：05　日本ガンマナイフ学会特別企画「震災から学ぶ、そしてこれから ～南海トラフに備えちょこ～」

座長：城倉　英史（古川星陵病院　鈴木二郎記念ガンマハウス）
森木　章人（もみのき病院　脳神経外科）

JS-1　（Keynote Lecture）病院が大震災から学んだこと

新須磨病院　脳神経外科　近藤　　威

JS-2　（Keynote Lecture）南海トラフ巨大地震はいつかかならず来る　東日本大震災の経験から

古川星陵病院　鈴木二郎記念ガンマハウス　城倉　英史

JS-3　南海トラフ地震時における患者救出までの危険性について

もみのき病院　放射線技術科　水口紀代美

JS-4　ガンマナイフ治療中の地震発生を想定した当院での防災訓練

もみのき病院　脳神経外科　木田　波斗

13：10 ～ 13：15　クロージングセレモニー

教育講演

略　歴

抄　録

教育講演１　演者略歴

青山　勝信（あおやま　かつのぶ）

【略　歴】

1989年４月　旧通商産業省入省
2001年１月　旧原子力安全・保安院に配属
2012年９月　原子力規制庁に配属
2022年４月　原子力規制庁　長官官房　放射線防護グループ　放射線規制部門
2022年７月　同部門　安全管理調査官（セキュリティ・制度担当）に着任

特定放射性同位元素の防護及び管理上の注意点・その後

青山　勝信
原子力規制庁　長官官房　放射線防護グループ　放射線規制部門　安全管理調査官

原子力規制庁放射線規制部門では、令和元年９月１日に施行された放射性同位元素等の規制に関する法律に基づき、各事業所における特定放射性同位元素の防護措置の状況について、立入検査を通じて確認してきている。

法施行後、各事業所とも適切な防護措置について苦慮されていると推察されるので、今回の講演では、当庁によるこれまでの立入検査において確認された指摘事項等を紹介する。

紹介に当たっては、ガンマナイフに限らず、区分１～３相当の線源を保有する事業所の防護措置等についても触れるので、これらを各院の防護措置の参考としていただくと共に、改めて特定放射性同位元素の防護の必要性及び管理上の注意点についても再認識いただき、よりよい防護体制の確立に生かしてもらいたいと考えている。

教育講演 2　演者略歴

杉本　健樹（すぎもと　たけき）

【略　歴】

1985年　　高知医科大学（現 高知大学医学部）　卒業
1989年　　高知医科大学大学院修了（医学博士）
1989年　　高知医科大学附属病院　助手（第１外科）
1990–95年 高知県立安芸病院　外科勤務
1995年　　高知医科大学医学部　助手
2006年　　同　講師
2007年　　同　准教授
2007年　　高知大学医学部附属病院　病院教授
2011年　　同　臨床遺伝診療部　副部長
2015年　　同　乳腺センター　センター長
2016年　　同　臨床遺伝診療部　部長（併任）
2019年　　同　がんゲノム医療センター　センター長（併任）　現在に至る

【資格等】

日本外科学会 外科専門医･指導医、日本乳癌学会 乳腺専門医･指導医、日本人類遺伝学会 臨床遺伝専門医、日本遺伝性腫瘍学会 遺伝性腫瘍専門医･指導医、がん治療認定医、マンモグラフィ検診認定読影医（AS）、遺伝性腫瘍カウンセラー

2023年６月16日・17日　第29回日本遺伝性腫瘍学会学術集会　会長
高知市文化プラザ「かるぽーと」で開催予定

ゲノム情報を利用した最新の乳癌治療　― 遺伝性腫瘍とがんゲノム医療を中心に ―

杉本　健樹
高知大学医学部附属病院　乳腺センター長
臨床遺伝診療部長　がんゲノム医療センター長

近年、ゲノム解析技術の急速な進歩により検査費用・時間が著しく低減・短縮され、臨床に実装可能な時代となった。がん診療でも生殖細胞・体細胞双方の遺伝子解析が行われRNA解析のtranscriptomicsや蛋白解析のproteomicsなどmulti-omicsで薬物の適応を決定する時代が到来している。

乳癌の薬物療法が他癌腫との大きく異なるのは、化学療法（細胞障害性抗がん剤）に加えエストロゲン受容体（ER）（乳癌の約2/3）を標的としたホルモン療法とHuman Epidermal Growth Factor Receptor 2（HER2）の過剰発現（15–20％）を標的とした分子標的薬が非常に効果的なことである。そのため、過去の薬物療法の開発はホルモン療法・抗HER療法の耐性克服の歴史と言っても過言ではない。

しかし、ゲノム医療の普及により、新たな分子標的の探索も始まっている。中でも生殖細胞系列の*BRCA1/2*病的バリアントを標的とし、DNA修復機構の２重破綻により癌の細胞死（合成致死）を誘導するPARP阻害剤の登場やトリプルネガティブ（ER, PgR, HER陰性）乳癌のPD-L1や腫瘍変異量を標的に免疫チェックポイント阻害剤の適応が拡大されたことは特筆すべきである。また、Anthracycline, Taxane系抗がん剤を超える化学療法剤の開発はなく、増量も限界に達しG-CSFの進化を背景に投与間隔を縮め用量強度を高めるdose dense療法が普及する一方、ER陽性HER2陰性乳癌への過剰な化学療法を回避するためにRT-PCRで遺伝子発現解析を行い化学療法の効果を予測するOncotype DX®も普及した。効果が期待できる適正な対象を選び出し、支持療法を充実してより効果の高い化学療法を提供する時代になったのである。

これらの最新の医療を普及させてすべての乳癌患者に適正に提供するためにはがん医療と同様に遺伝（子）医療の均霑化が必要となる。高知県でわれわれが10年に渡り取り組んできた遺伝性腫瘍診療ネットワークの構築を紹介し、各地域でのがんゲノムや遺伝性腫瘍診療の均霑化の参考になれば幸いである。

教育講演３　演者略歴　　共催：アミン株式会社

平野　透（ひらの　とおる）

【学　歴】

昭和58年３月　京都放射線技術専門学校（現　京都医療科学大学卒業）
平成22年３月　金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻　博士前期課程　卒業
令和１年９月　金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻より学位（博士）授与
専門分野　CT（三次元画像処理、頭頸部領域）

【職　歴】

昭和58年９月　札幌医科大学附属病院　中央放射線部　入職
令和４年３月　札幌医科大学附属病院　放射線部　退職
令和４年４月　柏葉脳神経外科病院　先端医療研究センター　入職

【認定等】

診療放射線技師、Ｘ線CT認定技師・Ｘ線CT専門技師、救急撮影認定技師
画像等手術支援認定診療放射線技師

ガンマナイフならびに脳神経外科手術に用いる三次元画像の活用について

平野　透
社会医療法人柏葉会　柏葉脳神経外科病院　先端医療研究センター

脳神経外科領域の画像診断においては様々なコントラストの画像が取得できるMRIが有用であり、疾患に応じた撮像シーケンスが使用されている。一方、外科的手術やガンマナイフ治療などにおいては病変部のみならず病変周辺の詳細な構造情報が必要となり、骨構造や微細血管描出が良好なCTも用いられている。特にヨード造影剤を急速に注入する3D-CT Angiography（3D-CTA）は脳動脈瘤や脳動静脈奇形などの脳血管障害、髄膜腫や聴神経腫瘍などの腫瘍性病変、更に顔面痙攣や三叉神経痛などへの微小血管減圧術への開頭手術を含む手術支援画像として利用価値が高い。近年、3Tesla MRIの普及により、薄いスライス厚を用いた高精細画像が取得可能になり、更に三次元画像処理ワークステーション（3DWS）の機能向上によりCT, MRIを用いたFusion Imageを用いることでCT又はMRI単独では確認が困難であった病変部周辺の構造の確認などが可能になっている。CT/MRIのFusion Imageの位置ずれについては自験例ではあるが頭蓋内では最大でも１ボクセル程度しか位置ずれはなく、多くの症例でFusion Imageを使用する事が可能と考えている。

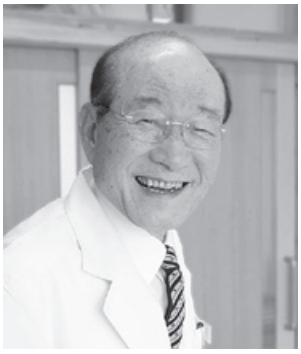
手術支援画像作成には最適なCTやMRIの撮影や造影法が必要である。また臨床医が求めている画像を理解し、手術中に既視感を感じるような画像作成を心がける必要がある。そのため医師とのカンファレンスを含めた情報共有を常に行う必要があると思っており、前職の札幌医科大学附属病院、そして現在柏葉脳神経外科病院で行っている脳外科医との情報共有について報告させていただく。

文化講演

略　歴

抄　録

森　惟明（もり　これあき）



【略　歴】

1961年	京都大学医学部卒、大阪北野病院でインターン修了
1961年	アメリカ合衆国臨床医学留学資格ECFMG試験合格
1967年	京都大学大学院修了（脳神経外科学）医学博士
1969年	京都大学脳神経外科助手
1971年	シカゴノースウエスタン大学脳神経外科レジデント
1975年	京都大学脳神経外科講師
1979年	京都大学脳神経外科助教授
1981年	高知医科大学（現高知大学医学部）脳神経外科初代教授
1992～1999年	厚生省特定疾患「難治性水頭症」調査研究班班長
1992年	第２回高知出版学術賞受賞
1996～2000年	高知県医師会理事
1999～2001年	国際小児神経外科学会倫理委員会委員長
2000～2001年	国際小児神経外科機関誌Child's Nervous System編集委員
2000年	高知大学名誉教授
2000～2013年	もみのき病院附属高知ガンマナイフセンター長

著書多数

長寿時代に老・病の壁を乗り越えWell-Beingに生きるには

森　惟明
高知大学名誉教授

長寿時代に人生の終わり近くまで生きてきた先輩として、皆さんが今後幸せな人生を送られるために、これまでに経験し、学んできた事をお話させていただきます。講演の骨子を次にお示し致します。

◎人生の使命とは

人生の意味・役割・使命がはっきりと分かった人は案外少ないと思います。
人生における使命や目的は人ごとに異なりますが、与えられた命を使い、自分が選択した使命や目的を達成し、自分に課せられた尊い任務を果たし、人のため社会のために役立つために生まれてきたことに間違いはありません。

◎人生100年時代を迎えて

最近、高齢の方から、「これほど長生きするとは考えてもみなかった」「老後の準備をしてこなかった」「今後どのように過ごせばよいか」などという言葉をよく耳にします。

人生100年時代には定年が退職を意味するのではなく、あらたな仕事への開始になるのかもしれません。定年後の高齢期をよく生きるには、上手く老いることです。

◎人生を全うするために「３つの健康」をバランス良く維持しなくてはなりません。

「四苦」（生・老・病・死）は人類誕生から繰り返されてきた自然の摂理で、誰もが直面し、乗り越えなければならない壁です。四苦は一見すると不幸そのものです。しかし、その不幸こそが、私たちの魂に学びを与え、成長を促してくれるのです。

四苦を乗り越え、ただ一度の人生を全うするには「３つの健康」を最適化し健康寿命を延伸しなければなりません。「３つの健康」とは、①身体的健康、②精神的健康、③社会的健康です。それを維持するには「健康の危険因子」である①「フレイル」（虚弱）、②「サルコペニア」（筋肉減少症）、③「ロコモ」（運動器症候群）に陥らないように努力しなければなりません。

◎「健康リテラシー」を身に付けよう

最近は医師でなく一般人でも望みさえすれば、インターネットや書物などで比較的容易に多くの健康情報を入手できる時代です。医学の進歩に関する情報を知っているかどうかが健康に大きく関わってきました。すなわち、「健康リテラシー」を身につけて、健康情報を知り自分の健康管理に活かすことが重要になってきました。情報格差が健康格差につながる時代になりました。

◎過度の健康至上主義に縛られることなく上手に老いを受容する

年齢を重ねると完全な健康状態をたもてなくなるのは当然のことです。だれもが老化による衰えを経験する時代となれば、過度の健康至上主義に縛られることなく、「多病息災」で生きることが大切です。そのためには、老化と上手く付き合い老化を先送りし、長く現役でいること、そして前向きな姿勢で良好な人間関係を維持することが大切です。

◎人生をより良く生きるには

人生をよりよく生きるには、①「老い」は避けられないので上手に受容する、②「感謝」と「利他」に生きる、③過去や未来ではなく、「今を生きる」、④死は生の延長線上にあり、「死を意識する」と、どのように生きるかを考えるようになる（生死一如）、⑤健康であるときから死を意識して生きると「生の質」が高まる。

ランチョンセミナー

略　歴
抄　録

林　基弘（はやし　もとひろ）

【現　職】

東京女子医科大学 脳神経外科学講座 教授・定位放射線治療部門長、中央放射線部門ガンマナイフ治療室長、先端生命医科学研究所兼務、国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構（QST）客員研究員、群馬大学腫瘍放射線科・重粒子医学研究センター非常勤講師、防衛医科大学校脳神経外科非常勤講師。医学博士（乙類）。

【職　歴】

1991年群馬大学医学部卒業。同年、東京女子医科大学脳神経外科講座入局。94年ガンマナイフユニットへ従事。99年フランス･マルセイユ･ティモンヌ大学臨床留学。**フランス国脳神経外科専門医師資格（Diplome d'AFSA de Neurochirurgie）を取得**し、1014症例の治療経験を積む。02年本学ガンマナイフ室治療責任者。エレクタ社公認アップグレードトレーナー（国内外26施設を担当）。07年本学脳神経外科講師、東京大学病院放射線治療部届出診療医。11年本学中央放射線部門ガンマナイフ治療室長、先端生命医科学研究所MIL部門長。14年群馬大学重粒子医学研究センター非常勤講師。**15年第12回国際定位放射線治療学会学術大会長（12th International Stereotactic Radiosurgery Society Congress Chairman, Yokohama, June 7-11th 2015）を歴任**。18年防衛医科大学校脳神経外科非常勤講師。19年本学脳神経外科学講座准教授。20年QST客員研究員。21年宇都宮脳脊髄センター･シンフォニー病院定位放射線外科治療顧問。22年現職、現在に至る。

【役　職】

日本脳神経外科学会 認定専門医・評議員・代議員、日本定位放射線治療学会世話人、日仏医学会理事、世界脳神経外科学会連合（WFNS）・定位放射線治療部門役員兼副会長（2010-2017）、国際定位放射線治療学会（ISRS）役員（2014-2017）。**米国「NEUROSURGERY」誌 EDIOTRIAL REVIEW BOARD（2022.9-2024.8：日本人脳神経外科医では唯一人の公職）**。

【学術業績】

定位放射線治療に関する学術論文 総計257編（Total IF：327.386）。学術講演・発表（共同演者含まず）総計410演題（国際学会201演題、うち101演題がinvited presentation）。個人ガンマナイフ治療症例数12,000症例。ガンマナイフ公式トレーニングコース主催36回。学術研究会主催５回。

【広報・活動】

テレビ（NHK World「Medical Frontiers」、テレビ朝日「名医の極み」、テレビ朝日「たけしの家庭の医学」、TBS「夢の扉」、BS-TBS「ヒポクラテスの誓い」、日本テレビ「世界一受けたい授業」、TBS「ぴったんこカンカン」、テレビ東京「主治医が見つかる診療所」ほか）、ラジオ、雑誌、新聞（読売新聞「論点」執筆ほか）など。著書「頭を切らずに治すガンマナイフ最新治療（講談社）」、「Gamma Knife Neurosurgery in the Management of Intracranial Disorders vol.1-2（Springer社）」、「Radiosurgery（Karger社）」など。

Treatment strategy and clinical results of Gamma Knife stereotactic radiosurgery for high grade pediatric arteriovenous malformation: Utility and the role of Brainlab "Vascular ELEMENTS" software associated with modern Gamma knife system (Icon).

Motohiro Hayashi, Ayako Horiba, and Mieko Oka

Section of Stereotactic Radiosurgery, Department of Neurosurgery, Tokyo Women's Medical University, Japan

The management of high grade pediatric arteriovenous malformation (AVM) with Gamma knife surgery had been very complicated, and complete disappearance without any complication, such as radiation necrosis and delayed cyst formation, was very rare. Therefore, we have been tried to sophisticate the treatment system itself for pediatric cases to cause in favorable clinical results, morphology and complication point of view. In recent cases, we have tried to apply MAC anesthesia, which was no intubation in general anesthesia not to give fear emotion to all infant patients. And then, we installed Gamma knife ICON system (ELEKTA Instruments AB), which has no need for frame application, with association of the dedicated software of "Vascular ELEMNTS" delivered by Brainlab. There is advantage to use this system that the previous angiography could be used with preoperative 3DCTA and MRI/A in the unique platform, and we can contour the target as 4D (3D + flow) before dose planning in Gamma Plan (ELEKTA Instruments AB). In practice, we don't need both angiography with frame application and oral intubation under general anesthesia at the day of Gamma knife surgery. Some pediatric patients didn't need hospitalization. In this lecture presentation, we would like to demonstrate our institutional experience, treatment policy, strategy, and clinical results for pediatric AVM cases, especially high grade AVM.

日本ガンマナイフ学会特別企画
「震災から学ぶ、そしてこれから
～南海トラフに備えちょこ～」

抄　録

JS-1

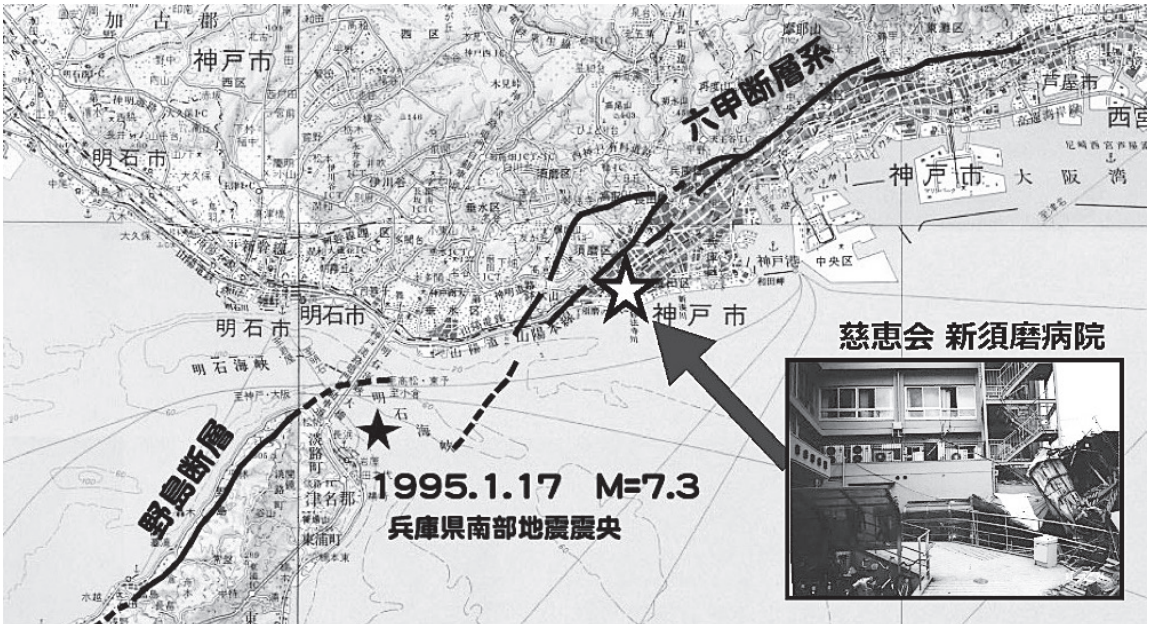
病院が大震災から学んだこと
What we have learned from a big earthquake

近藤　威 Takeshi Kondoh[1)]，澤田　勝寛[1)]，河合　雅彦[2)]

[1)] 新須磨病院　Shinsuma General Hospital，[2)] エレクタ株式会社

1995年１月17日に発生した阪神・淡路大震災は、マグニチュード7.3の直下型地震で、犠牲者は6,434人、戦後に発生した自然災害全体で、東日本大震災が発生するまでは最悪のものであった。日本海溝や南海トラフのプレートの跳ね返りによって発生する地震（海溝型地震）にくらべて、内陸の活断層のずれによる直下型地震の発生はさほど注目されていなかったが、都市部を直撃したため被害は甚大であった。新須磨病院は活断層から１km以内に位置し、病院自体の倒壊は免れたものの、近隣の住居は全壊し、被災者を受け入れつつ病院機能の復帰にそれまで経験したことの無かった数多くの問題に直面した。ガンマナイフユニットは地階にあり防護壁の破損は免れた。地震対策としてアンカーボルトによりユニットが床に固定されていたとのことであるが、地震の揺れによりボルトは曲がりユニットは２cm移動した。治療を再開できたのは６週間後であった。地震発生が早朝であり治療中ではなかったこと、病院家屋の火災が生じなかったこと（震災による全半壊焼失は13件）、津波が生じなかったこと、などが幸いであったが、その後の耐震対策を考えるに当たって多くのことを学んだ。大地震と無縁と思われる地域でも直下型地震のリスクは潜在的にあり、最悪の事態を想定した日頃からの対策が必要である。

活断層・震源と新須磨病院の位置



Keynote Lecture

JS-2

南海トラフ巨大地震はいつかかならず来る　東日本大震災の経験から

Nankai Megathrust earthquake will definitely come. From the experience of Great East Japan Earthquake

城倉　英史 Hidefumi Jokura，川岸　順

古川星陵病院，鈴木二郎記念ガンマハウス　Jiro Suzuki Memorial Gamma House, Furukawa Seiryo Hospital

2011年３月11日午後２時46分に発生した北日本太平洋側を震源とする日本の観測史上最大のマグニチュード９の地震により当院は震度６強の揺れに襲われた。地震とそれに引き続く津波、原子力発電所事故はその影響範囲も考慮に入れると高度に発達したコンピュータ技術、通信、交通等に依存する社会となってからは、日本で最大の災害と位置づけられるであろう。内陸部にある我々の病院は幸い津波の災害は免れたが、発生可能性が高いと言われている南海トラフ地震では高知県全域で震度６強から７、津波は高知市で15mを超え、県内で最大34mを超えると想定されており高知県の太平洋側は東日本大震災と同様の被害が予想される。人間は自分の目で見たもの、経験したものしか切迫感を持って想像することは困難であり南海トラフ地震の想定を現実としてとらえるのはなかなか難しいことと思われる。また忘却は人間の性であり経験したことでさえ歳月ともに薄れていく。今回発生後まもなく12年となる東日本大震災当時を改めて振り返り、当時我々が何を見て、何を考えたかを改めて確認することで我々も認識を新たにするとともに、少しでも今後の減災につながるヒントを提示できればと考えている。

JS-3

南海トラフ地震時における患者救出までの危険性について
Hazard of patient rescue during Nankai megathrust earthquake

水口　紀代美 Kiyomi　Minakuchi[1)]，藤田　明世[1)]，前田　知則[1)]，蒲原　知恵[2)]，東　泰功[2)]，岡本　三穂[3)]，
浜田　かおり[3)]，木田　波斗[4)]，道上　怜奈[4)]，森木　章人[4)]

[1)] もみのき病院　放射線技術科　Department of Radiology, Mominoki Hospital,
[2)] もみのき病院　臨床工学科，[3)] もみのき病院　看護部，[4)] もみのき病院　脳神経外科

【目的】今回我々は、ガンマナイフ治療の最中に南海トラフ地震が起こったと仮定して訓練を行い、緊急速報発報から患者の元にたどり着くまでには、様々な危険性があることを認識した。ガンマ患者が高齢で、体重の軽い女性であるとすると、地震時に頭部を固定していることで体幹部のみが揺さぶられ頚髄損傷を引き起こす可能性が否定できず、遮蔽扉が完全に閉まらないうちに救助に向かわなければならない場合も想定される。
災害時においては、３S（Self、Scene、Survivor）の概念で救出を考えなければならない。今回我々は“Scene”から、救出時の環境の危険性について検討を行ったので報告する。
【方法】緊急地震速報発報後、ｘ秒後に120秒間揺れると仮定し、患者救出が緊急に必要であると判断された場合において、技師は“Scene”の確認として、何をするべきか次にあげる２項目について検討を行った。①発報から本震までの時間の違いにより、どのような手順が必要か？②救出時の動線における漏洩線量はどの程度あるのか？②においては、実際にガンマナイフ治療時を再現し、サーベーメーターを用いて測定した。
【結果】通常時に「PAUSE」を押してから完全に遮蔽扉が閉まり、患者の元にたどり着くには約36秒必要であった。速報発報から本震が来るまでの時間が短いほど “Scene” の危険性があった。また、セクターが戻ってから遮蔽扉が完全に閉まらないうちの救出ゾーンの線量率は22μSv/hであった。
【考察】今回我々は地震時の患者の元にたどり着くまでの現場の安全性について検討を行った。災害対応時の安全管理には、「３S」という原則があり①Self（自身の身の安全）②Scene（現場の安全性）③Survivor（生存者の安全）を確認しながら、救出を行う必要がある。放射線障害防止を念頭におきながら、いかに行動をするべきか関係機関とも相談を行い、南海トラフ地震に備えていこうと考えている。

JS-4

ガンマナイフ治療中の地震発生を想定した当院での防災訓練
Earthquake drill during Gamma Knife treatment

木田　波斗 Namito Kida[1)]，森木　章人[1)]，道上　怜奈[1)]，岡本　三穂[1)]，浜田　かおり[2)]，水口　紀代美[3)]，前田　知則[3)]，
藤田　明世[3)]，蒲原　知恵[4)]，東　泰功[4)]，上羽　哲也[5)]

[1)] もみのき病院　脳神経外科　Department of Neurosurgery, Mominoki Hospital，[2)] もみのき病院　看護部，
[3)] もみのき病院　放射線技術科，[4)] もみのき病院　臨床工学部，[5)] 高知大学医学部　脳神経外科

【目的】南海トラフ地震は、おおむね100～150年の間隔で発生しており、最近の報告では、今後30年以内に70～80％と高い発生確率が見込まれていることから、災害に対する備えの重要性が年々増してきている。今回我々は、ガンマナイフ治療の最中に南海トラフ地震が起こったと仮定して訓練を行い、ガンマナイフ室の危険性を洗い出し、どのような改善が必要であるか検討を行ったので報告する。
【方法】緊急地震速報発報後、10秒後・20秒後・30秒後・50秒後に120秒間揺れると仮定を行い、ガンマナイフ室にいるスタッフ（医師・看護師・放射線技師・臨床工学技士）の考えられる行動と危惧される現象などの検証を行った。
【結果】緊急地震速報からコンソールの「PAUSE」を押し、ガンマナイフ治療室へ入るまでに38秒程度必要であった。緊急地震速報から40秒後については、ギリギリ患者のもとへ駆けつけることはできたが、120秒間患者の身体や頭部を固定しておくのは難しいと思われた。また､揺れが収まってから患者を搬送するときの動線に危険性があることが分かった。
【考察】今回我々は治療中に南海トラフ地震が起こると想定して検証を行った。緊急地震速報から本震の波が到達するまでの時間が短いほど、患者・スタッフの危険性を伴うことが分かり、事前の備えや災害訓練が必要であると考えられた。

一般演題

抄　録

JG1-1

ガンマナイフ治療時鎮痛・鎮静持続時間の評価

Evaluation of analgesia and sedation duration during gamma knife therapy

名田　睦子 Mutsuko Nada[1)]，酒井　恵[1)]，藤代　亜由美[1)]，村上　葵[1)]，中崎　清之[2)]

[1)] 脳神経センター大田記念病院　看護部　Department of Nursing, Brain Attack Center Ota Memorial Hospital,
[2)] 脳神経センター大田記念病院　脳神経外科

【はじめに】ガンマナイフ治療（GKS）ではフレーム固定が負担であり、当院では鎮静下で実施している。鎮静の持続時間及び鎮痛に着目し調査及び報告をする。
【方法】2021年１月から2021年６月までにGKS行った201名（252回）が対象。鎮静の程度（RASS）・持続時間、翌日のアンケートによる治療の記憶・痛みを調査し解析を行った。
【結果】男性134名（53.2％）女性67名（46.8％）平均年齢70歳。最初の鎮静では全員が昏睡から鎮静。固定から覚醒（RASS 0）確認時間は平均２時間28分MRI待機時間（平均47分）では多くが深い鎮静状態が保たれていた。治療翌日のアンケートでは覚えていない・痛くなかったが60％、我慢ができる痛みが34％、痛かったが６％であった。単変量解析では80歳未満で有意に覚醒（RASS 0）が早かった（80歳未満は平均170分、80歳以上は平均224分）。多変量解析ではより重たい体重が早い覚醒の有意な予後因子であった。
【考察】アンケートから現状の鎮静実施で痛みの負担感は軽減できていると考える。体重が軽いと鎮静時間が長いことに加え、高齢者であることも重要な要素と考えた。鎮静持続時間をある程度予測して治療順番を設定することで、より負担感の少ない治療としえると思われる。

JG1-2

ガンマナイフ治療患者への支援の実際 ～入院前から退院まで～

Actual support for Gamma Knife patients ―Before hospitalization until discharge―

岡本　三穂 Miho Okamoto[1)]，浜田　かおり[1)]，北村　小織[1)]，戸田　かお里[1)]，森木　章人[2)]，内田　泰史[2)]

[1)] もみのき病院　看護部　Department of Nursing, Mominoki Hospital, [2)] もみのき病院　脳神経外科

【目的】当院では患者家族が不安なく治療が行えるよう担当看護師による入院前から支援を行っている。その取り組みについて報告する。
【方法】ガンマナイフ治療患者に対して、ガンマナイフ担当看護師が①入院前、②入院後術前訪問、③術後訪問、④退院後外来定期受診の４つのタイミングで支援を行った。
【結果】①入院前：治療が決定した時点で患者家族に治療の流れについて説明を実施した。疼痛がある場合は、苦痛なく治療が行えるように患者と共に安楽な姿勢について相談でき、不安の軽減につながった。分割照射や治療歴のある患者に対しては、マスク使用時の違和感、前回治療時の苦痛の有無などを確認した。説明内容や患者家族の反応は、テンプレートに入力し電子カルテ上で、多職種で情報共有できる仕組みにした。
②術前訪問：治療前日に病室を訪問し、当日の治療開始時間から治療の流れについて説明を行った。説明用紙と記録用紙を統一し、看護師によって説明内容に差が生じないようにした。
③術後訪問：前処置から治療までの流れについて説明内容との相違や疼痛・苦痛の有無などの確認、退院後の生活上の留意点などついて説明を実施した。
④外来定期受診時：退院後、定期受診日には患者・家族に治療後の症状や経過などを聴取した。ガンマナイフ治療の適応疾患では再発を認め、再治療を行うこともある。退院後の外来での関わりは、患者の安心感につながっていると考える。
【結語】入院前から退院後も同じガンマナイフ担当看護師が対応することで、患者から「心強かった」などの声が聞かれるようになり、外来に再診で来院された際には患者家族から声をかけてもらうことも増えた。これは、外来に所属する看護師２名がガンマナイフ治療を担当することのメリットであると言える。今後も、患者家族の病気や治療に対する思いをしっかり可視化することにより、多職種による入院前から治療後も継続した支援（看護）に繋げていく。

JG1-3

GAMMAチームの中の放射線技師としての役割
Responsibility of radiological technologist in the GAMMA team

藤田　明世 Akise Fujita[1)]，水口　紀代美[1)]，前田　知則[1)]，蒲原　知恵[2)]，東　泰功[2)]，岡本　三穂[3)]，浜田　かおり[3)]，木田　波斗[4)]，道上　怜奈[4)]，森木　章人[4)]

[1)] もみのき病院　放射線技術科　Department of Radiology, Mominoki Hospital,
[2)] もみのき病院　臨床工学科，[3)] もみのき病院　看護部，[4)] もみのき病院　脳神経外科

【目的】もみのき病院はガンマナイフを四国で最初に導入し、1998年５月からガンマナイフ治療を行ってきた。当初は、医師２名と看護師２名にて治療を開始したが、看護業務の軽減を図るために臨床工学技士が投入され、生体モニターの管理とフレーム装着時の介助を臨床工学士が行うようになった。我々放射線技師とガンマナイフ治療との関わりは、治療計画のための画像検査と放射線管理業務の一端を担うだけのものであった。ICON導入時に、院長よりCBCTの操作を含めた治療業務に入ってほしいとの依頼を受け、2020年10月からGAMMAチームに加わることとなった。20年以上も確立されてきたチームの中で、私たち放射線技師はどのような役割を担ったらよいのかと試行錯誤をしながら、業務手順作成やデータベース作成を行ってきたので報告を行う。
【方法】フレーム時・マスク時の手順を作成し、技師の業務の明確化を行う。ガンマナイフ治療を行う患者の情報をデータベース化する。などといったガンマナイフ業務手順の作成を行った。
【結果】業務手順やエラー時の手順を文書化することで、エレクタサービスをCallせずにエラーを解除することができた事案があった。放射線技師の業務改善に必要な患者情報と医師の欲しい情報を共有するデータベースを作成することで、医師や看護師からの要望されたデータがその場で提出できるようになり、GAMMAチームに貢献できる結果となった。
【結論】20年以上も確立されてきたチームに入ることで、当初は何をすべきか、何ができるかと悩んだこともあったが、技師が得意な分野である手順書作成やデータベース作成を行うことで、チームに貢献できているという自信となった。

JG1-4

定位放射線治療（ガンマナイフ）における臨床工学技士の役割と必要性
Role and necessity of clinical engineers in stereotactic radiotherapy（gamma knife）

早坂　啓佑 Keisuke Hayasaka[1)]，林　基弘[2)]，清水　幹夫[1)]，相馬　泉[1)]，高倉　祥平[1)]，佐々木　健志[1)]，加藤　篤志[1)]

[1)] 東京女子医科大学　臨床工学部　Tokyo Women's Medical University Faculty of Clinical Engineering,
[2)] 東京女子医科大学　脳神経外科

【背景と目的】臨床工学技士（以下CE）の制度は1987年に制定され、医療機器のスペシャリストとして様々な業務に従事している。当院では定位放射線治療（ガンマナイフ（以下GK））においてもCEが携わっている。
今回、ある小児重症症例に対して術前、術中、術後、慢性期と「点」ではなく「線」とした関りを持つ経験を得、脳外科医師（以下主治医）との連携のもと、CEがどのように介入することができたか報告する。
【対象と経過】2017年、10女児Wyburn-Maison Syndrome（頭蓋内外多発AVM）にて治療目的に当院入院。その後約５年間に亘り下記事項に関してCEとして業務を行った。
・GK治療：術前カンファレンスと人工呼吸器（以下呼吸器）、生体情報モニタ準備、麻酔科医と呼吸器の設定、院内の患者搬送補助
・病棟管理：呼吸器ラウンド、主治医と自発呼吸トライアル実施および理学療法士補助
・リハビリテーション病院転院：呼吸器装着による転院搬送および、転院先にて呼吸器勉強会実施。
・急変時ICU管理：主治医と集中治療科医師、看護師、PTとカンファレンス、RTX実施
・病棟管理：ICU退室、主治医と呼吸器の設定変更など実施
・在宅管理：主治医と往診し呼吸器の設定変更など協議し実施
【結果と考察】CEが長期に関わる中で治療および安全管理への技術提供のみならず、多くの医療スタッフ連携や患児と患児家族との良好なコミュニケーションが取れたことによる患児QOLの向上が図れ、安全な在宅治療へ移行できた。長期にわたり多部署での管理が必要となる今回のようなケースでは、主治医と多くの診療科、医療スタッフの間にCEが介在し、チームとしての強い信頼関係を築いて患児の治療に臨むことが可能であったと考えられる。
【結語】今回、主治医がCEの専門性を理解し、様々な指示や相談などをしていただいたことで長期治療に介入することが可能となり、CEとして患児の安全な在宅移行へ貢献できたと考える。

JG2-1

肺腺癌および乳癌脳転移患者に対するガンマナイフ治療後の全身死発生リスク評価：DS-GPAの有用性

Risk assessment of systemic death after Gamma Knife radiosurgery for patients with brain metastasis from lung adenocarcinoma and breast cancer: Is the DS-GPA applicable?

芹澤　徹 Toru Serizawa[1)]，青柳　京子[2)]，樋口　佳則[3)]，村上　幸三[4)]

[1)] 築地神経科クリニック　東京ガンマユニットセンター　Tokyo Gamma Unit Center, Tsukiji Neurological Clinic,
[2)] 千葉県循環器病センター　ガンマナイフ治療部, [3)] 千葉大学大学院　医学研究院　脳神経外科学,
[4)] 昭和大学医学部　放射線医学講座　放射線治療部門

【目的】脳転移（BM）患者に対するガンマナイフ治療（GKS）の強度決定には生命予後予測、なかでも全身死（SD）の発生リスクの正確な評価を行うことが重要である。生命予後予測に有用なLung-molecularおよびBreast DS-GPA（Diagnosis Specific Graded Prognostic Assessment, JCO2020）を用いて、SD発生リスクを予測可能か検討した。
【方法】2008年から14年間に築地神経科クリニックで筆頭演者が第一術者としてGKSを施行した肺腺癌および乳癌BM連続1564例（肺腺癌1154、乳癌410）を対象とした。GKS後の累積SD発生頻度をDS-GPAクラス別に算出した。
【結果】１）肺腺癌：年齢中央値68歳、女性462例。EGFR変異448、ALK41例。BM個数は中央値３、BM最大径中央値は1.5 cm。MSTは16か月。３年累積SD発生頻度は64％（DS-GPA I: 84％、II: 73％、III: 56％、IV: 43％、stratified p＜0.0001）。２）乳癌：年齢中央値57歳、１例男性。Tumor SubtypeはBasal 105、Luminal A 118、HER2 98、Liminal B 89例。BM個数は中央値４、BM最大径中央値は2.5cm。MSTは16か月。３年累積SD発生頻度は58.5％（DS-GPA I: 84.5％、II: 66.6％、III: 44.5％、IV: 22.7％、stratified p＜0.0001）。SDの有意な予後影響因子は、肺腺癌では年齢、KPS、頭蓋外転移、原病巣制御、遺伝子変異など、乳癌では年齢、KPS、頭蓋外転移、HER2受容体で、両癌腫ともDS-GPAの評価項目と重複していた。
【結語】GKSを施行した肺腺癌および乳癌BM患者において、DS-GPAによりSD発生リスク評価が可能である。

JG2-2

肺腺癌および乳癌脳転移患者に対するガンマナイフ治療後の神経死発生リスク評価

Risk assessment of neurologic death after Gamma Knife radiosurgery for patients with brain metastasis from lung adenocarcinoma and breast cancer

芹澤　徹 Toru Serizawa[1)]，青柳　京子[2)]，樋口　佳則[3)]，村上　幸三[4)]

[1)] 築地神経科クリニック　東京ガンマユニットセンター　Tokyo Gamma Unit Center, Tsukiji Neurological Clinic,
[2)] 千葉県循環器病センター　ガンマナイフ治療部, [3)] 千葉大学大学院　医学研究院　脳神経外科学,
[4)] 昭和大学医学部　放射線医学講座　放射線治療部門

【目的】脳転移（BM）患者に対するガンマナイフ治療（GKS）の強度決定には、全身死発生リスクに加え、これと独立して神経死（ND）発生リスク評価をGKS時に行うことが重要である。これを行うためのツール・NDリスクアセスメントを考案したので提案する。
【方法】2008年から14年間に築地神経科クリニックで筆頭演者が第一術者としてGKSを施行した肺腺癌および乳癌BM連続1564例（肺腺癌1154、乳癌410）を対象とした。GKS後の累積ND発生に対する有意な予後影響因子を抽出、NDリスク評価システムを構築、検証した。
【結果】肺腺癌と乳癌のNDに有意に影響を与える頭蓋内因子は、ともにBM最大径と造影MRIにおける結節性髄液播種所見であった。BM最大径＞2.5㎝を０点、2.5㎝以下を１点、結節性髄液播種所見ありを０点、無を１点とし、その合計が０－１点をND高リスク群、２点を低リスク群とした。３年での累積ND発生頻度は、肺腺癌の高リスク群で17.9％、低リスク群で8.4％（HR 2.16［95％CI: 1.39–3.34］, p<0.001）、乳癌の高リスク群で25.4％、低リスク群で（12.0％HR 2.21［1.33–3.68］, p＝0.002）であった。
【結語】GKSを施行した肺腺癌および乳癌BM患者において、NDリスクアセスメントによりND発生リスク予測が可能である。これをDS-GPAによる全身死（SD）発生リスク評価を組み合わせて使用することで、GKS治療強度決定に有用な情報を提供する。たとえばSDリスクが低くNDリスクが高い患者群には、段階的・分割GKS、開頭腫瘍摘出術、全脳照射併用など頭蓋内に対する治療強度を上げる必要がある。これに対して、SDリスクが高くNDリスクが低い患者群においては姑息的照射が適切である。

JG2-3

転移性脳腫瘍に対する定位放射線による再治療の最近の傾向：単施設における22年1144例の経験から
Recent trend of brain metastasis re-SRS: Based on a single institute experiences of 1144 patients for 22-year period

山本　昌昭 Masaaki Yamamoto[1)]，佐藤　泰憲[2)]

[1)] 南東北病院　脳神経外科　Department of Neurosurgery, Southern Tohoku Hospital,
[2)] 慶応義塾大学医学部　衛生学公衆衛生学教室

【目的】脳転移に対して定位放射線治療（SRS）を行った20年間の経験から、再SRS例を検討した。
【方法】本研究は倫理委員会の承認を得て行われた回顧的研究で、1998年７月から2020年６月までにガンマナイフ治療がおこなわれた脳転移3746例中、再SRSを行った1144例（31％、平均年齢64歳、範囲19-87歳、男性620例、女性542例）を対象とした。この1144例を前後半の各11年に分けて（618例/early-group［E-G］vs 526例/recent-group［R-G］）年代的変化を検討した。
【結果】２期間で再SRSの割合は同等であった（31％/E-G vs 30％/R-G、p＝0.78）。患者背景では65歳以上の症例増加が顕著であった(42％/E-G vs 56％/R-G, p＜0.0001)。原発巣の制御良好例の割合はR-GでE-Gより有意に多かったが（54％ vs 45％, p＝0.0025)、脳以外の転移を有した症例はむしろR-Gで多かった（42％ vs 40％, p＜0.0001)。初回治療から再治療までの期間中央値（月）はR-Gで7.6とE-G（6.3）より延長していたが有意差はなかったが（p＝0.071)、乳癌では R-Gで7.7とE-G（5.5）より有意に延長していた（p＝0.0058)。SRS再治療後の生存期間中央値（月）はR-Gで10.1とE-G（7.4）より有意に延長していた（p＝0.0002)。
【結論】R-Gでは高齢化が顕著であった。またR-Gでは原発巣制御良好、脳以外の転移が多い症例の治療機会が増加していた。SRS後の生存期間中央値はR-Gで有意に延長していた。

JG2-4

卵巣癌脳転移に対するガンマナイフの治療効果の検討（JLGK1801）
Gamma knife radiosurgery for metastatic brain tumors from ovarian cancer (JLGK1801)

松永　成生 Shigeo Matsunaga[1), 2)]，周藤　高[1), 2)]，芹澤　徹[3)]，青柳　京子[4)]，長谷川　俊典[5)]，川岸　潤[6)]，四方　聖二[7)]，祁内　博行[8)]，中﨑　清之[9)]，森木　章人[10)]，岩井　謙育[11)]，山中　一浩[12)]

[1)] 横浜労災病院　脳神経外科,
[2)] 脳定位放射線治療センター
Department of Neurosurgery and Stereotactic Radiotherapy Center, Yokohama Rosai Hospital,
[3)] 築地神経科クリニック　東京ガンマユニットセンター，[4)] 千葉県循環器病センター　ガンマナイフ治療部,
[5)] 小牧市民病院　ガンマナイフセンター，[6)] 古川星陵病院　鈴木二郎記念ガンマハウス,
[7)] 相澤病院　がん集学治療センター　ガンマナイフセンター，[8)] 永冨脳神経外科病院　ガンマナイフセンター,
[9)] 脳神経センター大田記念病院　脳神経外科，[10)] もみのき病院　高知ガンマナイフセンター,
[11)] 富永病院　脳神経外科，[12)] 大阪市立総合医療センター　脳神経外科

【目的】卵巣癌は脳転移の頻度が約２％と低く、また脳転移後の生命予後は極めて不良とされている。しかし近年の画像診断技術の向上や分子標的薬導入などによる生命予後の延長により脳転移の頻度は増加傾向にあると言える。本研究は日本ガンマナイフ学会が統一形式の調査票を用いて全国ガンマナイフ（GKRS）施設を対象とした調査を行い、本邦における卵巣癌脳転移に対するGKRSの治療効果を明確にすることを目的とする。
【方法】国内10施設でGKRSが施行された卵巣癌脳転移118症例566病変を検証した。
【結果】GKRS後生存期間中央値は18.1か月、生存率は６か月78.2％、12ヶ月65.6％であった。生存期間に有意に影響を及ぼす因子は、原発巣の制御と脳転移数であった。神経死は髄膜癌腫症10例で神経死率は６か月3.2％、12か月4.6％であった。神経機能障害発生率は６か月7.2％、12か月13.5％、頭蓋内新規病変発生率は６か月20.6％、12か月40.2％であった。GKRSは腫瘍体積中央値1.6cm^{3}に対して辺縁線量中央値20Gyで照射が行われていた。局所制御率は６か月97.6％、12か月95.2％、GKRSに伴う合併症は８症例に認められた。局所制御に有意に影響を及ぼす因子は、照射時の腫瘍周囲浮腫、腫瘍体積、辺縁線量であった。卵巣癌の病理組織診断が確認できた69症例313病変について漿液性腺癌37症例161病変と他の組織型32症例152病変の２群で比較すると、漿液性腺癌症例は有意にGKRS後の生存期間が長く、局所制御率が高い結果であった。
【結語】卵巣癌脳転移に対するGKRSは照射後の生存、局所制御に関して比較的安全で良好な結果を示していた。また漿液性腺癌は他の組織型と比較して、有意に生存、局所制御に関して良好な結果であった。

JG2-5

腎細胞癌からの脳転移に対するガンマナイフ治療後に生じる難治性脳浮腫に対するVEGFR-TKIの有用性

Effectiveness of VEGFR-TKI for radiation-induced brain edema after Gamma Knife radiosurgery for brain metastases from renal cell carcinomas.

野田　龍一 Ryuichi Noda[1),2)]，河島　真理子[1)]，赤羽　敦也[1)]

[1)] NTT東日本関東病院ガンマナイフセンター　Gamma Knife Center, NTT Medical Center Tokyo,
[2)] NTT東日本関東病院　脳神経外科

【背景】放射線治療後の脳壊死に対し血管内皮細胞増殖因子（VEGF）阻害作用をもつベバシズマブの効果が知られる一方、様々なVEGF受容体チロシンキナーゼ阻害剤（VEGFR-TKI）が開発され多くの癌腫に使用される。我々は腎細胞癌の脳転移に対するガンマナイフ（GKS）後に広範脳浮腫が生じた症例に、全身化学療法の一環としたVEGFR-TKIが脳浮腫を改善するのではと疑問を持った。自験例でその有用性を後方視的に検討した。
【方法】2012年11月から2021年12月に腎細胞癌の脳転移に対してGKSを行い、治療後に脳浮腫が生じた後にVEGFR-TKIが導入された5症例が対象。全て4週以上のステロイド加療で改善が乏しい難治性脳浮腫。年齢44-78（中央値：62）才、男女比4：1、体積計算はLeksell Gamma Planを使用。
【結果】GKSから脳浮腫までの期間は1-21（中央値：5）週。発症時の体積は22.5-188.2（中央値：41.8）mLと治療時1.6-157.5（中央値31.3）mLより高かった。薬剤はAxitinib 3例、Sunitinib、Pazopanibが各々1例。開始後12-63（中央値：34）日で浮腫は2.6-48.1（中央値：13.8）％まで縮小。造影領域は治療時から増大はなし。2例で薬剤関連有害事象あり。
【考察】難治性脳浮腫の治療として抗VEGF作用の分子標的薬が挙がる。ベバシツマブは本邦で腎細胞癌に対する保険適応が無い一方で、VEGFR-TKIの頭蓋内病変に対する効果は分かっていない。本研究でVEGFR-TKIの抗浮腫効果が示唆され、今後の集学的治療の選択肢となりうる。

JG2-6

免疫チェックポイント阻害薬を併用した定位放射線治療は肺癌脳転移の予後を有意に改善する（傾向スコア分析）

Effectiveness of immune checkpoint inhibitors in combination with stereotactic radiosurgery for patients with brain metastases from lung cancer: a propensity score-matched analysis

四方　聖二 Shoji Yomo

相澤病院　がん集学治療センター　ガンマナイフセンター
Division of Radiation Oncology, Aizawa Comprehensive Cancer Center, Aizawa Hospital

【目的】肺癌脳転移に対して定位放射線治療（SRS）は重要な治療手段の一つである。近年免疫チェックポイント阻害薬（ICI）が様々な癌腫に適応され予後の改善に大きく寄与している。肺癌脳転移に対してSRSにICIを同時併用することで頭蓋内病変の制御、生存期間が延長するか、安全性に問題が生じないかを調査した。
【方法】2015年1月から2021年12月まで組織診断が確定した肺癌からの脳転移に対してガンマナイフSRSを行った症例を対象とした。ICI併用はSRS前後3ヶ月以内のICI使用と定義した。治療選択・結果に影響を及ぼしうると考えられる12個の共変量を基に傾向スコアを算出し、ICI+SRS群とSRS群との間でマッチングを行った。患者生存、頭蓋内病変の制御について競合イベントを加味した生存時間解析による群間比較を行った。
【成績】適格基準を満たした症例は585例（NSCLC494例、SCLC91例）あり、そのうち91例（16％）でICIが併用されていた。マッチングにより両群から87例が抽出された。初回治療からの1年生存率はICI+SRS群とSRS群でそれぞれ65％、46％で、生存期間中央値はそれぞれ16.9ヶ月、10.0ヶ月であった（HR: 0.62 95％ CI: 0.43–0.90, P＝0.012）。1年累積神経死率はそれぞれ9％、15％（HR: 0.40 95％ CI: 0.18–0.87, P＝0.021）であった。1年累積局所再発率はそれぞれ10％、13％（HR: 0.68 95％ CI: 0.29–1.6, P＝0.38）、1年累積遠隔再発率は両群とも44％であった（HR: 0.99 95％ CI: 0.64–1.5, P＝0.95）。CTCAEグレード4の有害事象はSRS群で1例が経験され、CTCAEグレード2/3はICI+SRS群で3例、SRS群で5例が経験された。
【結論】肺癌脳転移に対してSRSにICIを併用することで全生存期間の延長と神経死発生率の低下が得られること、頭蓋内病変の制御率には差がないことが示された。また、治療毒性はICI併用により増加しないことも示された。

JG3-1

比較的大きな転移性脳腫瘍に対するガンマナイフIconによる分割照射の治療成績

Treatment results of fractionated stereotactic radiosurgery using Gamma Knife Icon for relatively large brain metastases

佐藤　憲市 Kenichi Sato[1)]，高梨　正美[1)]，浅野目　卓[1)]，中村　博彦[1)]

[1)] 中村記念病院　脳神経外科　ガンマナイフセンター
Depaertment of Neurosuegery, Gamma knife Center, Nakamura Memorial Hospital

【目的】ガンマナイフIconの導入により比較的大きな転移性脳腫瘍に対するSRSでの分割照射が可能となった。 しかし、SRSでの適切な分割数と治療線量は明らかではない。当院での分割照射の治療成績を報告し、SRSでの最適な分割数と治療線量について考察する。
【対象と方法】2018年８月から2022年６月まで、ガンマナイフIconでの分割照射が行われ、腫瘍体積が４mlを越える病変を有する転移性脳腫瘍患者57例（68病変）を対象とした。２分割照射は21例（24Gy/2fr: 13例、26Gy/2fx: 7 例）、３分割照射は25例（24Gy/3fr: 21例、27Gy/3fr: 4 例）、５分割照射は12例（30Gy/5fx: 7 例、35Gy/5fr: 5 例）であった。 腫瘍体積の中央値は、２分割照射で８ml、３分割照射で13ml、５分割照射で18mlであった。各病変の局所制御率と症候性放射線壊死の出現率を検討した。
【結果】各病変の局所制御率は、２分割照射で96％（24Gy/2fr: 93％、26Gy/2fx: 100％）、３分割照射で97％（24Gy/3fr: 96％、27Gy/3fr: 100％）、５分割照射では77％（30Gy/5fx: 88％、35Gy/5fr: 60％）であった。症候性放射線壊死は、２分割照射で４％（24Gy/2fr: 7 ％、26Gy/2fx: 0 ％）、３分割照射で３％（24Gy/3fr: 4 ％、27Gy/3fr: 0 ％）、５分割照射では23％（30Gy/5fx: 13％、35Gy/5fr: 40％）であった。
【結論】比較的大きな転移性脳腫瘍に対するSRSとして、２分割照射の24Gy/2fr、26Gy/2fx、３分割照射の24Gy/3fr、27Gy/3fr、５分割照射の30Gy/5fxは適切な治療線量と考えられた。５分割照射の35Gy/5frは症候性放射線壊死の割合が高く慎重に治療すべきと考えられた。

JG3-2

大型のう胞性転移性脳腫瘍に対するのう胞吸引術を併用した分割ガンマナイフ治療

Fractionated Gamma Knife radiosurgery after cyst aspiration for large cystic brain metastases

野田　龍一 Ryuichi Noda[1), 2)]，河島　真理子[1)]，赤羽　敦也[1)]

[1)] NTT東日本関東病院ガンマナイフセンター　Gamma Knife Center, NTT Medical Center Tokyo,
[2)] NTT東日本関東病院　脳神経外科

【背景】大型のう胞性転移性脳腫瘍に対して、のう胞吸引術により腫瘍体積を縮小させた後にガンマナイフ治療（GKS）を行う方法の有用性はこれまでも報告されている。しかし、のう胞吸引術を行ってもなお、単回照射によるGKSの対象としては腫瘍体積が大きく、かつその形状も不整であるため、治療に苦慮することも少なくない。そこで当施設では、Iconの導入後、のう胞吸引術と同時にOmmaya reservoirを留置し、必要に応じてリザーバーから内容液を吸引しつつ、分割GKSを行ったので、その結果を報告する。
【方法】2018年４月から2022年３月の間に治療を施行された８症例、９病変を後方視的に検討した。年齢は64–70（中央値：68）才、男女比は６：２、原発巣は非小細胞肺癌６例（肺腺癌４例、肺 扁平上皮癌２例）、膵癌１例、尿管癌１例であり、全症例で症候性であった。術前の腫瘍体積は13.0–145.6（中央値：30.6）mlであり、のう胞内容液とOmmaya reservoir留置術とGKS開始までの期間は、２–８（中央値：６）日であった。分割GKSにおける辺縁線量は、35Gy/10fr ２例、32.5Gy/5fr ３例、30Gy/5fr ３例、フォローアップ期間は２–26（中央値：５）ヶ月であった。
【結果】のう胞吸引術後の腫瘍体積は5.0–55.8（中央値：10.1）ml、体積の減少率は13.2–90.9（中央値：54.6）％であり、全症例において術後すみやかに神経症状が改善した。GKS後の生存期間中央値は５ヶ月であったが、88.9％においてGKS施行後病変の局所制御が得られていた。治療関連有害事象として１例で脳膿瘍が生じた一方、放射線関連有害事象は認められなかった。局所制御が得られなかった１例は腫瘍摘出術を施行した。
【考察】定位照射を前提としたのう胞吸引術においては、内容液を十分に吸引できたとしてもなお、単回照射によるGKSの対象としては腫瘍体積が大き過ぎる場合もある。このような症例に対しては、より大型の腫瘍に対する治療が可能である分割GKSが有効な治療選択肢となり得る。

JG3-3

転移性脳腫瘍ののう胞が大きくても、必ずしもドレナージ術は必要ではない
Drainage surgery is not always necessary for large cystic brain metastases

近藤　威 Takeshi Kondoh，田中　隆浩，榎波　はる霞，溝脇　隆，田中　宏知，高石　吉将

新須磨病院　脳神経外科　Department of Neurosurgery, Shinsuma General Hospital

【目的】大きなのう胞性転移性脳腫瘍の治療には、早期の症状緩和と総線量の低減を目的に放射線治療前にドレナージ術を行うことが有効であるが、創部感染と髄膜播種のリスクが伴う。今回、最大径３cm以上ののう胞性転移のガンマナイフ治療効果について後方視的にまとめた。
【対象】2019-2021年の３年間に当施設で治療した14例の最大径30mm以上ののう胞性転移性脳腫瘍を対象とした。平均年齢71.1歳（42-92歳；中間値72歳）、KPS: 60-100％、原発巣は肺がん８例、乳癌４例、その他２例。11例では意図的にドレナージ術を行わなかった。３例は他院にてドレナージ術が行われていたが十分なのう胞の縮小が得られなかった紹介例であった。最大径の平均37mm（30-44mm）、３例で５-10寡分割照射、11例で２－３段階照射を行った。線量は24-35Gyであった。
【結果】無症候性（７例）では治療後の症状増悪は無く、症候性（７例）では治療後に運動麻痺、小脳失調において改善を認めた。観察期間中（平均10.6か月）で局所再発はなく、腫瘍容積は平均で31.2％まで縮小しており、周囲脳浮腫の増悪や髄膜播種は認められなかった。
【考察】ドレナージ術により大きさを３cm以下にして照射治療を行う考えは、SRSを前提としたものであり、SRT（分割/段階照射）が行われるようになってからは、必ずしも腫瘍サイズを３cm以下にする必要はないと考えられる。のう胞性腫瘍は充実性腫瘍に比べて照射後浮腫増大のリスクは少なく、治療後の腫瘍サイズの縮小は良好な印象である。出血・感染・髄膜播種のリスクを避ける観点より、ドレナージ術を回避しても長期的には問題は少ないと思われる。
【結論】大きなのう胞性転移性脳腫瘍のガンマナイフ治療で、のう胞ドレナージ術を避けて分割/段階照射を行うことも可能で、必ずしも全例にドレナージ術を行う必要はない。

JG3-4

局所再発と断端再発を繰り返し、治療に難渋した乳がん小脳転移の３例
Three cases of cerebellar metastasis from breast cancer which made treatment difficult, due to repeated local recurrence and marginal recurrence

河合　秀哉　Hideya Kawai

秋田県立循環器・脳脊髄センター　脳神経外科
Department of Surgical Neurology Akita Cerebrospinal and Cardiovascular Center

【目的】乳がんに対してのガンマナイフ治療の有効性は確立されたものとなっているが、今回我々は、乳がん小脳転移で局所再発、断端再発を繰り返し、治療に難渋した３症例を経験したので報告する。
【方法】初回治療時の年：57歳～69歳　観察期間：36～108ヵ月
１例はluminal B、２例はluminal HER2であった。１例はガンマナイフ治療前に小脳に局所放射線治療を受けていた。
【結果】ガンマナイフ治療回数は、１例は５回　１例は３回　１例は４回で、１例は手術摘出を行った。初回治療時の治療線量は、局所放射線治療を受けた症例は９Gy×３回の分割療法としたが、その他の２症例では20Gyでの照射を行った。放射線壊死は全例に見られたものの、ガンマナイフ治療を繰り返すことで大きくADLを低下することはなかった。
【結語】乳がんにおいては、近年の化学療法の改善によって、より長い余命が期待できるようになっていることから、一旦局所制御が得られても、MRIのみならず、多角的な検査を定期的に行う事で、より早く再発を捕えることが、合併症を最小限に抑えることにつながると思われる。また、ICON時代となったガンマナイフ治療も、より副作用を抑えつつ、効果を高めていく方法を模索していくことが求められる。

JG4-1

前庭神経鞘腫へのガンマナイフ治療後早期の形状変化と聴力低下の関係調査

Evaluation of early transient expansion and hearing deterioration after Gamma Knife surgery for vestibular schwannoma

中崎　清之 Kiyoshi Nakazaki

脳神経センター大田記念病院　脳神経外科　Department of Neurosurgery, Brain Attack Center Ota Memorial Hospital

【目的】前庭神経鞘腫に対する単回照射のガンマナイフ治療（GKS）後の聴力低下速度は初期２年が速いと報告されている。一過性増大の時期と一致するため、GKS後の同時期の一過性増大と聴力低下との関係性に着目し、この明確化を主な目的とした。
【方法】2009年１月～2021年９月まで患側50dB以下の前庭神経鞘腫でGKSを行った例が対象。聴力が１年未満の評価の例は除外した。GKS後のいずれかの方向での増大を長さで測定し、1.2倍以上を拡大と定義した。２年までの純音聴力検査で10dB低下との関係を統計学的に評価した。
【結果】対象は36例。年齢は58歳、GKS前聴力は25dB、体積は0.63ml、辺縁線量は12.45Gy（%isodose 53%）（いずれも中央値）であった。いずれかの方向で1.2倍以上の拡大は16例（44.4%）で認められ、12例が半年までの増大であり、15例が一過性であった。24例（66.7%）が２年以内に10dB以上の聴力悪化を一度でも経験した。20例（55.6%）がステロイド内服を行い、３例が内服前後で10dB以上の改善が得られた。２年までの最終評価の段階でGKS前より10dB上悪化は18例（50.0%）であった。10dB以上の悪化の出現について1.2倍以上の拡大は単変量解析では有意差がなかったが（P値0.098）、多変量解析では1.2倍以上の拡大（ハザード比 2.947、P 値 0.028）と治療前体積（ハザード比 1.463、P 値 0.043）であり、1.2倍以上の拡大が有意な危険因子であった。
【結論】自験例において、1.2倍以上の長さの変化をもたらす体積変化が聴力低下の危険因子であった。聴力保護を目的にステロイドを使用しているが、一過性増大に対する効果は不明であり、処方の意義については今後の研究の課題である。

JG4-2

75歳以上の高齢者の聴神経腫瘍に対するガンマナイフ治療の成績：非高齢者との比較

Comparison of Gamma Knife radiosurgery treatment results for vestibular schwannoma patients with age of ≥75 versus <75 years old

青柳　京子 Kyoko Aoyagi[1)]，芹澤　徹[2)]，樋口　佳則[3)]，岩立　康男[3)]

[1)] 千葉県循環器病センター　ガンマナイフ治療部　Gamma Knife House, Chiba Cerebral and Cardiovascular Center,
[2)] 築地神経科クリニック　東京ガンマユニットセンター，[3)] 千葉大学大学院医学研究院　脳神経外科学

【目的】75歳以上の高齢者の聴神経腫瘍（AT）に対するガンマナイフ治療（GKS）成績を75歳以下の症例群と比較する。
【方法】対象は1998年から23年間に２施設においてGKSを施行した一側性AT連続723例。高齢群80例と非高齢群643例において、腫瘍制御、生存率、一過性膨大、水頭症発生率、顔面神経機能不全発生率を比較した。
【結果】患者背景の比較では高齢群で女性が多く、腫瘍体積が大きく、処方線量が低かった。高齢群でGKS施行後の生存期間が有意に短かった（10年生存率：高齢群69.4%、非高齢群89.4%、p<0.0001）。５年後、10年後の腫瘍制御不良は、高齢群で7.2%、9.5%、非高齢群で3.8%、5.9%と高齢群で制御不良である傾向にあった（P＝0.06）。水頭症の発生はGKS後５年で高齢群16.4%、非高齢群5.0%と高齢群で有意に発生率が高かった（P＝0.0001）。一過性膨大のピークや終了までの期間、顔面神経機能維持には有意差を認めなかった。
【結語】高齢者ATに対するGKS適応決定に際しては、平均余命が短く、一過性膨大が１－２年継続すること、一過性膨大が顕著である場合救済手術が困難であること、本研究の結果（腫瘍制御が不良、水頭症が多い）などを、充分にインフォームドコンセントを行い慎重に決定すべきである。

JG4-3

拡散テンソルトラクトグラフィを用いたガンマナイフ治療計画への応用

Application of diffusion tensor tractography to Gamma Knife therapy planning

道上　怜奈 Reina Michiue[1)]，森木　章人[1)]，木田　波斗[1)]，福岡　正晃[1)]，三宅　博久[1)]，有光　誠人[1)]，森本　雅徳[1)]，内田　泰史[1)]，上羽　哲也[2)]

[1)] もみのき病院　脳神経外科　Department of Neurosurgery, Mominoki Hospital,
[2)] 高知大学医学部　脳神経外科

【目的】拡散テンソルトラクトグラフィ（DTT）を用いた脳神経の描出能、および前庭神経鞘腫や三叉神経痛のガンマナイフ治療への臨床応用について検討を行った。
【方法】当院では2020年10月にガンマナイフIconに更新した。Icon導入後はガンマナイフ前日に施行した3.0テスラMRI画像（シーメンス社skyra）を用いて治療計画を行い、治療当日の定位CT画像とのCo-registrationを行うことにより治療を行っている。顔面神経などの脳神経の描出にはHeavy T2画像（TR1300, TE 17, FOV 16cm, Average 1.4）を主として用いているが、脳神経の同定が難しい場合には拡散テンソルトラクトグラフィ（DTT）も撮影し、参考としている。DTTのシークエンスは従来のSingle Shot EPI（SS-EPI）と比べて神経の描出が良好で歪みを低減させるとされているReadout Segmented EPI（RS-EPI）を用いた。
【結果】当院でDTTを施行した前庭神経鞘腫46例のうち、顔面神経の走行が腫瘍の前方にあるものが37例と最も多くみられたが、上方（1例）や下方（6例）に圧迫されている例もあり（不明2例）、治療計画を行ううえで注意が必要と思われた。椎骨脳底動脈の圧排により三叉神経が大きく変位した三叉神経痛の症例においても、三叉神経の走行をみる上でDTTが有用であった。また、SS-EPIと比べて、RS-EPIは歪みが少なく、脳神経の描出能に優れていることがわかった。腫瘍によっては神経の位置関係がわかりにくいものもあった。
【結語】3.0テスラMRIを用いても、腫瘍が大きくなるにつれてHeavy T2画像のみでは顔面神経などの脳神経との位置関係がわかりにくくなるが、DTTを併用することによって神経走行の同定が可能となり、より安全にガンマナイフ治療を行うことが可能となると思われた。

JG4-4

孤立性線維性腫瘍/血管周皮腫の術後局所再発に対するガンマナイフ治療の成績

Gamma Knife radiosurgery outcome for postoperative local recurrence of solitary fibrous tumor/hemangiopericytoma

横山　貴大 Takahiro Yokoyama[1)]，堀場　綾子[1)]，岡　美栄子[1)]，林　基弘[1)]，川俣　貴一[1)]

[1)] 東京女子医科大学　脳神経外科　Department of Neurosurgery, Tokyo Women's Medical University

【はじめに】孤立性線維性腫瘍/血管周皮腫（SFT/HPC）は比較的稀な頭蓋内良性腫瘍の一つであるが、術後の再発率が高いことや頭蓋外転移を伴いやすいことが特徴である。術後の局所再発に対する定位放射線治療は一定の効果があると報告されており、辺縁線量の重要性は既に周知されているが、治療成績は様々でいまだ確立された治療方針は示されていない。今回改めて当施設の成績をまとめ、ガンマナイフ治療（GKR）の役割を述べる。
【方法】2003年から2019年の期間で、開頭摘出術後の病理診断において血管周皮腫（現在のSFT/HPC gradeⅡ,Ⅲ相当）と診断、その後局所再発に対して当院でGKR施行した10症例について後方視的に治療成績を検討した。
【結果】平均年齢48歳、男性7例、女性3例。GKR後の平均観察期間は93ヶ月（38～180ヶ月）であった。平均標的腫瘍体積は6.3ml、頭蓋外転移を認めた症例は8例（80%）、うち2例が転移臓器不全で死亡した。GKR後の局所制御率と照射体積には有意な相関関係を認めた。無増悪生存期間中央値（PFS）は37.5ヶ月で、全生存期間中央値（OS）は78.5ヶ月であった。GKRによる有害事象として、CTCEA v4.0 Grade2以上のものは認めなかった。
【考察】標的体積と治療線量には相関関係にあるため、大きな病変に対してのGKRは慎重に検討されるべきと考える。腫瘍摘出率がPFSやOSに影響を及ぼすことは知られているが、初回治療線量が良好な局所制御に繋がった本研究の結果が、今後症例数の積み重ねによってPFSやOSに影響を与える可能性を示唆するものであると考えた。これら当院の治療成績と既存の報告を比較しながら、今後の治療指針を検討する。
【結語】再発率の高いSFT/HPCの局所制御に対してGKRが有用であった。今後更なる症例数の経験と治療指針の検討が必要である。

JG4-5

脈絡膜悪性黒色腫に対するガンマナイフ治療の長期治療成績

Long-term results of Gamma Knife radiosurgery for choroidal melanoma

岡田　由実子 Yumiko Okada[1)]，山中　一浩[1)]，石橋　謙一[1)]，宮保　浩子[2)]，岩井　謙育[3)]

[1)] 大阪市立総合医療センター　脳神経外科 Department of Neurosurgery, Osaka City General Hospital,
[2)] 同　眼科，[3)] 富永病院　脳神経外科

【目的】脈絡膜悪性黒色腫に対するガンマナイフ治療（以下GKSと略す）の長期の治療成績について検討を加える。
【方法】2005年６月から2020年２月まで脈絡膜悪性黒色腫に対してGKSを行い、少なくとも６カ月以上の経過観察が可能であった13例について検討した。内訳は、年齢が中央値68歳（50～84歳）、男性６、女性７例であり、全例でGKSがこの疾患に対する初期治療であった。治療法として事前に眼科医による眼球固定の処置後、頭部フレーム固定、MRI撮像、治療計画と進めた後、照射を行った。治療病変の体積は中央値0.28ml（0.07-1.1ml）であり、辺縁に照射した線量は中央値25Gy（18-30Gy）であった。治療後症状の変化、腫瘍制御や合併症などについて検討した。経過観察期間は中央値70カ月（14～132カ月）であった。
【結果】２例は全身転移のため治療14、110カ月後に死亡した。７例は再発し、うち６例は治療後８-90カ月後に再度のGKSを、１例は眼球摘出となった。最終的な腫瘍の局所制御は消失１、縮小７、不変４、増大１例であった。視力については不変が４例、悪化が９例であった。合併症は硝子体出血、白内障、緑内障、網膜症を各１例ずつ認めた。
【結論】脈絡膜悪性黒色腫に対するガンマナイフ治療は有用である。長期的には視力低下をきたす症例も少なくなく、繰り返しの治療を要する症例もあるが、眼球摘出を行うことなく長期の制御効果が得られる可能性がある。

JG4-6

当施設における再発中枢神経系原発悪性リンパ腫に対するガンマナイフの治療成績

Treatment results of gamma knife stereotactic radiosurgery for recurrent primary central nervous system malignant lymphoma at Kansai Rosai Hospital

阿知波　孝宗 Takamune Achiha，高原　在英，東原　一浩，萩岡　起也，星隈　悠平，清水　豪士，村上　知義，小林　真紀，豊田　真吾

関西ろうさい病院　脳神経外科　Department of Neurosurgery, Kansai Rosai Hospital

【目的】中枢神経系原発悪性リンパ腫（primary central nervous system lymphoma: PCNSL）の再発時にガンマナイフ（gamma knife stereotactic radiosurgery: GK）は集学的治療のひとつとして一定の有用性が示されている。当施設での再発PCNSLに対するGK治療について報告し、現状におけるその役割を考察する。
【対象・方法】2010年４月から2022年９月までに再発PCNSLに対してGKを行なった18症例を対象とし、患者背景や治療方法・成績について後方視的解析を行なった。
【結果】患者背景は男性11例・女性７例で年齢は中央値67歳（33-87歳）、初期治療として16例（89%）が大量methotrexate療法、11例（61%）が全脳照射、６例（33%）がGKを行われていた。治療回数は中央値３回（１-９回）、標的病変数の中央値は２病変（１-21病変）、標的病変総体積は中央値6.52cm^3（0.12-45.04cm^3）であり、辺縁線量は中央値16Gy（14-16Gy）であった。効果判定が可能であった16例105標的病変全てでPR以上の効果が得られ、局所制御期間は中央値14.5ヶ月（１-62ヶ月）であった。局所制御が12ヶ月以上得られた10症例のうち９症例（90%）はGKの治療回数が３回以上であった。有害事象として無症候性放射線壊死を４例（25%）６標的病変に、症候性放射線壊死を１例（6.2%）１標的病変に認めた。重度の白質脳症を２例（13%）に認め、いずれもWBRT治療歴がありGK後局所制御が12ヶ月以上得られた症例であった。
【考察・結語】当施設のGK治療成績は諸家の報告と比較しても良好であった。一方、WBRTを含め複数回の放射線治療による有害事象も生じていた。最近のPCNSLの初期治療として多剤併用化学療法によりWBRTを回避する試みが盛んになりつつあり、放射線治療による有害事象を軽減するためGKの役割がより重要になってくる可能性がある。またブルトン型チロシンキナーゼ阻害剤といった再発時の治療選択肢が従来よりも増えていることからGKの位置付けを更に検討していく必要がある。

JG5-1

小児と成人における脳動静脈奇形に対するガンマナイフの治療成績の比較 ― ケースコントロール研究による検討

Comparison of the outcome after Gamma Knife radiosurgery for arteriovenous malformations in pediatric and adult patients

川岸　潤 Jun Kawagishi，城倉　英史

古川星陵病院　鈴木二郎記念ガンマハウス　Jiro Suzuki Memorial Gamma House, Furukawa Seiryo Hospital

【目的】小児脳動静脈奇形（AVM）に対するガンマナイフ（GKRS）の治療成績に関する報告は散見されるが、成人例の成績と厳密に比較した報告は少なく、その違いは明らかではない。今回ケースコントロール研究にて両者を比較したので報告する。
【方法】1991年以降当施設でGKRSを行いその後追跡可能であったAVM848例を18歳未満（小児群、163例）、18歳以上（成人群、685例）の２群に分け、１：１の傾向スコアマッチングを用いて、それぞれのコホートから158例ずつ抽出した。両群におけるGKRS後の完全閉塞率と症候性出血を含めた有害事象発生率を比較解析した。
【結果】平均ナイダス体積は小児群5.1cc、成人群5.3cc（p＝0.777）、平均処方線量は20.8Gy、20.9Gy（p＝0.870）、平均観察期間は13.7年、14.1年（p＝0.591）。GKRS後3/5/10/15/20年の累積完全閉塞率は、小児群では57.1/67.4/78.5/79.8/81.3％、成人群では44.8/63.4/75.9/78.2/78.2％で、両者に有意差は認めなかった（p＝0.136）。GKRS後3/5/10/15/20年の累積有害事象発生率は、小児群3.8/4.6/11.4/19.3/19.3％（年間発生率1.2％）、成人群5.1/7.2/11.9/16.6/17.8％（年間発生率1.0％）であったが、統計学的有意差は認められなかった（p＝0.466）。
【結論】長期における完全閉塞率、有害事象発生率は小児群でそれぞれやや高い傾向があるものの、両群間での明らかな有意差は認められなかった。成人患者と同様に小児患者にとってもGKRSは有用な治療選択と考えられた。

JG5-2

脳動静脈奇形に対する治療後の閉塞確認におけるZero TE-MRAの有用性の検討

Evaluation of the Zero TE-MRA in confirming occlusion after treatment for cerebral AVM

福森　惇司 Junji Fukumori，森　久恵，山本　悦子，丹羽　章浩，櫛　裕史，下永　皓司，池堂　太一，濱野　栄佳，山田　清文，今村　博敏，飯原　弘二，片岡　大治

国立研究開発法人　国立循環器病研究センター病院　脳神経外科
Department of Neurosurgery, National Cerebral and Cardiovascular Center Hospital

【背景】脳動静脈奇形（以下AVM）に対する治療後の単純MRA（3D-TOF）での評価は非侵襲的な方法であるが、クリップやコイル、塞栓物質などによるアーチファクトが閉塞評価の妨げとなっている。近年、Zero TE MRA（以下Zero TE）と呼ばれる高周波励起終了からデータ収集までの間隔をほぼゼロ秒にする方法は単純MRAの欠点を克服する可能性が報告されている。
【目的】AVM治療後閉塞確認におけるZero TEの有用性を明らかにする。
【対象・方法】2019年７月から2022年10月に3.0テスラMRIで閉塞を確認したAVM治療後患者40例を対象とした。検討項目は単純MRI閉塞確認後の脳血管撮影（以下DSA）の有無、DSAでの閉塞確認の有無、Zero TEでの閉塞確認の有無である。
【結果】単純MRI閉塞確認後のDSA実施が16例、今後実施予定が17例、拒否例が６例、施行不可例が１例であった。
DSAでAVMの描出があったものが３例（約19％）であり、そのうちZero TEを行なった２例ではAVMの描出があり、同時撮像された単純MRAでは描出はなかった。これら２症例への治療介入は外科的摘出術後ガンマナイフ照射術、並びに流入動脈塞栓術後ガンマナイフ照射術であった。
DSAとZero TEが行われた症例は計３症例であり、残りの１症例では単純MRA、Zero TE、DSAの全てで閉塞が確認された。
【考察】約２割の症例で単純MRIでの閉塞確認にも関わらずDSAではAVM残存が確認された。今回の検討では症例数は２例と少ないが、Zero TEは脳血管撮影と同等の描出率を実現しており、今後の更なる検討が望まれた。
【結語】単純MRIに加えてZero TEでAVMの治療後閉塞確認を行うことは非侵襲的により正確に閉塞確認を行うことができる可能性が示唆された。今後、DSA前の全症例を対象としてZero TE評価を行うことを予定している。

JG5-3

プロテインS活性低下を呈し自然閉塞した未破裂中型脳動静脈奇形の一例

A case of spontaneous obliteration of medium-sized unruptured cerebral arteriovenous malformation accompanied by reduced activity of protein S

赤羽　敦也 Atsuya Akabane[1)]，野田　龍一[1)]，河島　真理子[1)]，角田　翔[2)]，瀬川　将史[2)]，井上　智弘[2)]

[1)] NTT東日本関東病院　ガンマナイフセンター　Gamma Knife Center, NTT Medical Center Tokyo,
[2)] NTT東日本関東病院　脳神経外科

【背景】脳動静脈奇形（AVM）の自然閉塞例は稀ながら報告されているが、その多くはAVMからの出血を契機としている。一方、プロテインSは凝固阻害作用を示すプロテインCの補酵素であり、その活性低下は静脈洞血栓症などの原因となることが知られている。今回我々は、経過観察中に頭蓋内出血を生じていないにも関わらず自然閉塞が得られ、精査の結果、プロテインS活性が低下していた中型AVM症例を経験したので、文献的考察を加えて報告する。
【症例】32才、女性。17才時より意識消失発作と頭痛があった。精査の結果、右前頭頭頂葉AVM（Spetzler-Martin Grade IV/2+1+1）および前大脳動脈のflow-related aneurysmの診断を受け、ガンマナイフ治療を目的として紹介受診となった。患者の希望によりひとまず経過観察の方針となったが、7ヶ月後のfollow-up MRIで、deep drainerの狭窄とnidus周囲にfluid-attenuated inversion recovery（FLAIR）での高信号域出現が認められた。さらに画像評価を継続したところ、3年8ヶ月後にはMR angiography上、nidusが描出されなくなり、7年3ヶ月後の脳血管撮影ではAVMの閉塞と前大脳動脈瘤の縮小が確認された。またFLAIR上での高信号域も縮小に転じた。原因精査のために血液検査を行ったところ、プロテインS活性が低下（51.9%：基準値 63.5–149.0%）していた。
【結語】AVMが出血に伴わずに自然閉塞を来すことはきわめて稀であり、本症例ではプロテインSの活性低下が血栓化を誘発した可能性が考えられた。またAVMのMRI follow-up中にFLAIRでの高信号域拡大がみられた場合には、血行動態の急激な変化を反映している場合があるため、より一層慎重な画像評価を継続することが望ましい。

JG5-4

脳動静脈奇形に対する塞栓術先行のガンマナイフ治療の有用性

Efficacy of embolization before stereotactic radiosurgery for brain arteriovenous malformations

久保田　沙織 Saori Kubota[1)]，青柳　京子[2)]，久保田　真彰[1)]，田島　洋佑[1)]，樋口　佳則[1)]，芹澤　徹[3)]

[1)] 千葉大学　脳神経外科　Department of Neurological Surgery, Chiba Unversity,
[2)] 千葉県循環器病センター　ガンマナイフ治療部, [3)] 築地神経科クリニック　東京ガンマユニットセンター

【目的】脳動静脈奇形（AVM）に対するガンマナイフ治療（GKS）前の塞栓術は、不完全閉塞や再出血のリスクとなるという報告があり、その有用性は確立されていない。塞栓術の併用を要する患者群はガンマナイフ単独治療群とは患者背景が異なることが想定されるため、今回傾向スコアマッチング（PSM）を用いて、塞栓術の併用がGKS後の治療成績に与える影響を再検証した。
【対象・方法】1998年1月から2021年12月に2施設でGKSを施行した症例を対象とした。GK単独群（GK）261例、塞栓術併用群（GK+E）159例のうち、PSMにより抽出を行った上で閉塞率、出血率、晩発性放射線障害について評価した。
【結果】患者背景の比較では、塞栓術併用群でnidus体積が大きく、処方線量が低く、Spetzler-Martin Gradeが高かった。PSMにより各群136例が抽出された。追跡期間中央値はGK 120ヶ月、GK+E 122ヶ月であった。5年間での閉塞率は、GK 67.9%、GK+E 75.4%と有意差を認めなかった（p＝0.54）。出血率においては、10年間の観察でGK 10.1%、GK+E 3.8%であり塞栓術併用群で低い傾向を認めた（p＝0.04）。10年後の放射線障害はGK 5.2%に対し、GK+E 7.3%であり、有意差は認めなかった（p＝0.20）。
【結語】塞栓術併用群はnidus体積がGKS単独群より大きく、晩期放射線障害の発生に配慮した治療計画が必要となるが、今回対象とした症例群では、塞栓術併用は完全閉塞率や放射線障害に影響を与えず、出血率は低い傾向にあった。

JG5-5

脳動静脈奇形に対するガンマナイフ後に放射線誘発性悪性脳腫瘍を発生した３例

Three cases of radiation-induced malignant brain tumors after gamma knife radiosurgery for patients with arteriovenous malformations

長谷川　俊典 Toshinori Hasegawa[1)]，加藤　丈典[1)]

[1)] 小牧市民病院　脳神経外科　Department of Neurosurgery, Komaki City Hospital

【目的】1991年当院にガンマナイフが導入されて30年が経過し、2021年12月までに1500例の脳動静脈奇形の照射が行われてきた。脳動静脈奇形は主に脳内に存在し、高線量照射を要するため、放射線による晩期障害のリスクを常に念頭に置く必要がある。特に最も大きな問題である放射線誘発性悪性脳腫瘍の発生を３例経験したので、文献的考察を含めて報告する。
【症例１】14歳時に右側脳室後角近傍の脳動静脈奇形に対し、40/20Gyにてガンマナイフ施行。ナイダス体積は8.8cm^3、約２年後に完全閉塞を認めたが、ガンマナイフ後81ヶ月で照射部に一致して造影病変が出現。開頭摘出術にてglioblastoma multiformeの診断、ガンマナイフ後99ヶ月で死亡した。
【症例２】12歳時に右小脳脳動静脈奇形に対し、45/24.8Gyにてガンマナイフ施行。ナイダス体積は2.2cm^{3}であった。ガンマナイフ後88ヶ月に照射部位に被包化血腫様の造影病変が出現、脳血管撮影上は完全閉塞していた。症状増悪したため、開頭摘出術施行したが、病理診断はanaplastic oligodendrogliomaであり、92ヶ月で死亡した。
【症例３】28歳時に右後頭葉脳動静脈奇形に対し、40/18Gyにてガンマナイフ施行。ナイダス体積は14.1cm^{3}であった。145ヶ月で２回目のガンマナイフを施行。増大する造影病変に対しガンマナイフ後160ヶ月で開頭術施行し、病理診断はangiosarcomaであった。
【結語】当院でガンマナイフ施行した脳動静脈奇形患者の放射線誘発性悪性脳腫瘍の頻度は0.2％であった。最近のLancet Oncologyの報告によれば、定位放射線治療後５年以上経過した患者における放射線誘発性悪性脳腫瘍の累積発生率は10年以上で0.045％とされている。発生頻度は稀であるとはいえ、ひとたび発生すれば致死的であり、常にそのリスクを念頭に置く必要がある。

JG5-6

未破裂脳動脈瘤による症候性三叉神経痛：ガンマナイフによる疼痛制御とコイル塞栓術の併用

Secondary trigeminal neuralgia due to unruptured cerebral aneurysm treated by coil embolization after gamma knife surgery for pain control: a case report

松田　信二 Shinji Matsuda[1)]，樋口　佳則[2)]，青柳　京子[3)]，芹澤　徹[4)]

[1)] 東千葉メディカルセンター　脳神経内科　Department of Neurology, Eastern Chiba Medical Center,
[2)] 千葉大学大学院医学研究院　脳神経外科学，[3)] 千葉県循環器病センター　ガンマナイフ治療部,
[4)] 築地神経科クリニック　東京ガンマユニットセンター

未破裂脳動脈瘤が原因と思われる症候性三叉神経痛に対してガンマナイフによる疼痛制御を行なった症例を提示する。
【症例】74才女性。経過３年の左下顎部痛のため近医を受診し三叉神経痛と診断された。頭部MRIで左椎骨動脈後下小脳動脈（VA-PICA）動脈瘤を認めた。動脈瘤は三叉神経根を内側より圧排、脳幹を偏倚させており減圧には頭蓋底手術を加えた高侵襲の治療が必要と思われた。一方、コイル塞栓術は可能であるものの、術後動脈瘤血栓化に伴う疼痛増強が懸念された。高齢であり生活に支障をきたす疼痛であったため、ガンマナイフによる疼痛制御を行なった後に動脈瘤塞栓術を行うという治療戦略を選択した。
【経過】発症から3.5年で、Retrogassserian portionを標的に４mm collimator下に最大線量90Gyを照射することでガンマナイフを実施した。術後４ヶ月から疼痛は改善したが疼痛消失は得られなかった。初回ガンマナイフ後10ヶ月でガンマナイフ再治療を実施。標的部位は初回治療時より近位部とし４mm collimator下に最大線量85Gyで照射した。再治療２ヶ月後からあきらかな疼痛改善を認め、４ヶ月で疼痛消失しカルバマゼピンおよびプレガバリンは減量可能となった。再治療後４ヶ月頃から三叉神経障害が出現し、12ヶ月時点で気になる程度となった。再治療後18ヶ月でコイル塞栓術を施行した。コイル塞栓術後２ヶ月の最終経過観察時点では疼痛消失状態が維持されており、気になる程度の三叉神経障害が確認されたものの、治療効果への満足度は高かった。
【まとめ】頭蓋底病変による症候性三叉神経痛は手術侵襲も大きく、手術適応が困難になる場合がある。動脈瘤による症候性三叉神経痛は稀ではあるが、ガンマナイフとコイル塞栓術の併用は高齢者の治療オプションとして有用な可能性がある。ガンマナイフ再治療により中等度の三叉神経障害をきたしたものの、本人および家族の疼痛制御への満足度は良好であった。

JG6-1

ガンマナイフ治療最適化ソフトウェアLightningの使用経験
Inverse planning with Leksell Gamma Knife Lightning

川邊　拓也 Takuya Kawabe, 佐藤　学

洛西シミズ病院　脳神経外科　Department of Neurosurgery, Rakusai Shimizu Hospital

【目的】定位放射線治療ガンマナイフはAIである治療最適化ソフトウェアLightningが導入されたことで、より高精細な治療が可能となった。治療効果を担保しながら治療計画・治療実行時間の効率化が期待されている。今回、当院のガンマナイフ治療症例を用いてLightning inverse planningの有用性を検討した。
【方法】2017年９月Icon導入以降の症例で、2022年９月Lightning導入の前後で治療計画のパラメーター変化を比較検討した。Lightning導入後の治療計画作成はまずLightningでの計画を作成し、重要構造近傍や疾患に応じて術者が修正する方法を基本とした。
【成績】Lightning導入前の2154症例において、疾患は転移性脳腫瘍1552例（72％）、髄膜腫230例（11％）、聴神経鞘腫101例（５％）、その他で、腫瘍個数は中央値２（IQR: １－５）、体積は最大病巣/総病巣で中央値2.2/2.8（0.5–7.6/0.7–9.4）mL、SHOT数は中央値11（５–19）、総照射時間は中央値80.5（37.2–141.0）分であった。導入後の553症例において、疾患は転移性脳腫瘍395例（71％）、髄膜腫56例（10％）、聴神経鞘腫35例（６％）、その他で、腫瘍個数は中央値１（１－４）、体積は最大病巣/総病巣で中央値2.4/3.0（0.5–8.2/0.7–10.0）mL、SHOT数は中央値20（９–34）、総照射時間は中央値115.8（49.3–202.0）分であり、SHOT数の増加を認めた。照射時間の増加はコバルトの減衰も関与していた。
【結果】Lightning inverse planningは従来のforward planningよりも治療計画作成時間の短縮化が得られ、スムーズな治療遂行に寄与できていると考えられた。治療効果については今後症例の蓄積が肝要と考えられた。

JG6-2

転移性脳腫瘍の新規病変出現頻度と時期の検討
―ICON用マスクの保存期間の考察―
Examination of the frequency and timing of new lesions in metastatic brain tumors
―Consideration of storage period for ICON masks―

八代　一孝 Kazutaka Yatsushiro[1)], 伊集院　正臣[2)], 堀内　隆夫[2)], 内田　裕之[3)], 佐藤　雅紀[1)], 山崎　一朗[1)], 大坪　俊昭[1)]

[1)] 藤元総合病院　脳神経外科　Department of Neurosurgery, Fujimoto General Hospital, [2)] 藤元総合病院　放射線部, [3)] 鹿児島大学病院　脳神経外科

【目的】現在当院のIconでは、マスク固定による治療が治療件数の80％程度となっている。一方、転移性脳腫瘍患者では、複数回にわたり照射を行うことがあり、マスク保存の場所が限られる中、どの様な患者で、どの程度の期間マスクを保存しておくかが問題となった。そこで今回当院で治療を行った転移性脳腫瘍患者の治療頻度と治療間隔について検討を行った。
【方法】対象は1997年６月の治療開始以降、2022年10月までに治療が行われた肺癌、乳癌、大腸癌からの転移性脳腫瘍症例1687例、延べ5408回の治療である。経過観察はおおよそ３ヶ月毎に造影MRIで実施され、これらの症例について、原発巣毎に新規病変の出現頻度と出現時期について検討を行った。
【結果】原発巣毎の症例数は、肺癌1361例、乳癌171例、大腸癌148例であり、病理が明確な肺癌は、腺癌744例、小細胞癌144例、扁平上皮癌140例、神経内分泌癌22例であった。この中で新規病変が出現したために、２回以上の照射を行った症例は、小細胞肺癌が59.7％、神経内分泌癌が54.5％と高値であったが、肺腺癌、肺扁平上皮癌、乳癌ではいずれも30％台、大腸癌では22.3％であった。一方新規病変が出現した時期を検討すると、新規病変が出現した症例の中で、初回の新規病変が３ヶ月以内、６ヶ月以内に出現した頻度は、全体で28.7％、54.4％であった。一方同頻度は大腸癌で57.6％、78.8％、扁平上皮癌と小細胞肺癌でそれぞれ46.3％、72.2％と37.2％、69.7％であったのに対して、肺腺癌は23.3％、48.6％、乳癌は16.1％、35.7％と新規病変の出現時期にはバラツキが見られた。
【結語】新規病変の出現に対応するために、ICON固定用のマスクを６ヶ月間保存すると、再治療の50％程度の症例で再利用でき、特に小細胞肺癌、肺神経内分泌癌で再利用率が高かった。

JG6-3

マスク治療時の頭部位置の再現性
Reproducibility of head position during treatment using mask

前田　知則 Tomonori Maeda[1)]，水口　紀代美[1)]，藤田　明世[1)]，蒲原　知恵[2)]，東　泰功[2)]，岡本　三穂[3)]，浜田　かおり[3)]，木田　波斗[4)]，道上　怜奈[4)]，森木　章人[4)]

[1)] もみのき病院　放射線技術科　Department of Radiology, Mominoki Hospital, [2)] もみのき病院　臨床工学科
[3)] もみのき病院　看護部, [4)] もみのき病院　脳神経外科

【目的】ガンマナイフにおけるマスク治療は、治療開始前にマスクと枕を作成し、CBCT（Cone Beam Computed Tomography）を撮影することにより基準となる位置を決定する。治療開始直前に再度CBCTを撮影し、位置のずれを補正し治療を開始する。基準の位置からのずれが大きい場合、マスクや枕の圧迫による痛みやゆるみによる固定不足が発生する。それにより、治療中の患者の体動が誘発されることがある。そのため、治療を開始する際の頭部の位置は基準の位置からずれないほうが望ましい。しかしながら、どの方向にどれだけずれやすいのかは明確になっていない。今回我々は、基準の位置と治療位置のずれについて治療を行った患者のデータを用いて調査した。
【方法】マスク治療を行った143例のデータを用いて、治療開始直前に撮影したCBCTと基準の位置とのずれの値を３軸に分けて評価した。また、５回に分割して照射した患者のデータを用い、各軸の経過日数とずれの関係について評価した。
【結果】３軸の中央値はほぼ同じであったが、Ｚ軸が最もばらつきが大きく、Ｘ軸が最も小さくなった。３軸の相関としては、XY・YZには相関があったが、XZには相関がなかった。経過日数とずれの比較は、軸によりばらつきに変化はあるものの、治療日数が経過しても大きな変化はなかった。
【考察】正確に基準位置に合わせることは、患者の負担軽減や治療成績の向上につながるため、各軸に合わせての対策が必要である。治療装置の構造上、Ｚ軸、Ｙ軸、Ｘ軸の順にずれが大きくなると考えられた。当院では、Ｚ軸のずれの対策として、枕に耳の位置をマーキングすることを施行していた。しかしながら、成果が十分に出ていないことが分かった。今後も対策を検討していき、今回の指標と比較することで成果が明確となると思われる。

JG6-4

Gamma Knife ICONとTomotherapyにおける線量分布の比較
Comparison of dose distribution between Gamma Knife ICON and Tomotherapy

山口　英雄 Hideo Yamaguchi[1)]，半田　早紀[1)]，井上　裕之[1)]，岡田　由実子[2)]，山中　一浩[2)]，岩井　謙育[3)]

[1)] 大阪市立総合医療センター　医療技術部　Department of Medical Technology, Osaka City General Hospital
[2)] 大阪市立総合医療センター　脳神経外科, [3)] 富永病院　脳神経外科

【目的】当院では高精度放射線治療を行うため、Gamma Knife ICONとTomotherapyを使用している。近年、過去にGamma Knifeやリニアックの治療歴がある患者の再照射依頼が増えている。頭部領域で新たに治療計画を作成する場合、視神経や脳幹などのリスク臓器を守るための線量を、過去の照射線量を考慮し、算出する。このリスク臓器に対する線量は、各装置が作り出す線量分布によって異なる。今回、Gamma KnifeとTomotherapyの線量分布の比較を行ったので報告する。
【方法】水等価ファントームのCT画像を、Gamma Knifeの計画装置に転送する。標的のROIを作り、6Gy/5fr_30Gyの処方線量で計画を作成する。次にTomotherapyの計画装置にCT画像と作成したROIを送り、同様に計画を作成する。この２つの計画を治療計画支援装置に転送し線量分布を比較する。また、不均質物質を含んだファントームと、実際の治療患者でも同様に比較を行う。
【結果】水等価ファントームでは、横断面画像で100％Doseから50％Doseまで減衰する距離を評価した。Gamma Knifeでは6.6mm、Tomotherapyでは13.4mmであった。不均質物質を含んだファントームでは、リスク臓器を模擬したROIの最大線量で評価した。Gamma Knifeの最大線量は1.4Gy、Tomotherapyは6.0Gyであった。治療患者では各臓器の最大線量で評価した。左眼球（Gamma Knife3.5/Tomotherapy6.1）Gy・左視神経（2.7/7.8）Gy・視交叉（3.3/8.8）Gyとなった。
【結語】Gamma Knifeの線量分布は、標的から離れるに従い急峻に下がることが分かった。またTomotherapyとの線量分布の違いが明らかになった。今回の結果は、治療装置を選択する際の基準の一つになると考える。

JG6-5

ガンマナイフIconにおけるトラブルシュート
Troubleshoot with Gamma Kinfe Icon

神内　満 Mitsuru Kamiuchi[1)]，佐藤　学[2)]，川邊　拓也[2)]

[1)] 洛西シミズ病院　放射線科　Department of Radiology, Rakusai Shimizu Hospital
[2)] 洛西シミズ病院　脳神経外科

【目的】当院ではIcon導入以来、マスク固定を基準として治療を行ってきた。
その際発生したマシントラブルやその対処法を報告する。
【方法】Icon治療においてマシントラブルは常に起こりうる。当院では担当放射線技師が発生したトラブルを転記し、その対処法を共有している。
【結果】Iconにおいては軽微なエラーは自己診断機能によりすぐに復旧し、大部分のものは日常業務において問題とならない。
しかし同じエラーが頻発した場合などは、重大な故障の前触れである場合もあり対策が必要となることがある。
発生したエラーおよびメッセージ、現象、発生タイミング等を記録し共有することが重大トラブルを未然に防ぐために重要であった。
【結語】IconはＣタイプのようにTimer Run等の装置故障時の緊急避難手段がなく、重大な故障は即治療中止となる。
通常稼働時の挙動を十分に把握し、また日常点検等ですぐ異常に気付けるような体制を整備することにより安全な治療を提供できると考える。

JG6-6

Vantage頭蓋フレーム用いた際のCT・MRI・CBCT画像間の位置座標比較
Comparison of coordinates in Vantage skull frame system (Elekta) between CT and MRI and CBCT

加藤　夕典 Yusuke Kato[1)]，森　美雅[2)]，楠　和輝[1)]，西村　良太[1)]，松下　康弘[1)]，小山　一之[1)]，真砂　敦夫[1)]

[1)] 社会医療法人大真会　大隈病院　ガンマナイフセンター　Gamma Knife Center, Ookuma Hospital
[2)] 医療法人社団三成会　新百合ヶ丘総合病院　高精度放射線治療センター

【背景】大隈病院では、2022年９月26日からIconガンマナイフ治療を開始した。９割近い症例では非侵襲的なマスク固定を用いているが、より正確さが必要とされる三叉神経痛症例や、安静が保てず体動が懸念される患者では、Vantageフレーム固定により治療を行っている。今回は、Vantageフレームの座標系をファントムを用いて検証した。
【方法】以前から用いている頭蓋と同程度の大きさの立方体ファントムを用いた。ファントムの溶液槽には希釈したGd造影剤（0.01mmol/L）を注入した。X＝50, 100, 150、Y＝50, 100, 150、Z＝70, 100, 130付近の座標を、CT，MRI，CBCTで測定し比較した。
【結果】MR画像（T1WI）での座標、CBCT画像での座標をCT画像を基準として比較した。X, Y座標の測定では、MR画像ではＺ＝70の高さにおいてＹ座標で最大1.5mmの誤差が見られた。CBCT画像ではＺ＝100の高さにおいてＸ座標で最大0.7mmの誤差を認めたのみであった。Ｚ座標の測定では、MR画像ではＺ＝100、130の高さにおいて最大0.6mmの誤差のみであった。CBCT画像ではＺ＝70の高さにおいて最大0.9mmの誤差を認めたのみであった。
【考察】MR画像では、Ｙ座標方向への画像の歪みは、workstation画面上でも明らかであった。歪みはＺ座標が低くなるほど（大きいほど）大きくなるように思われた。Ｚ＝70において1.5mmの誤差であったが、さらに低い座標では誤差がさらに大きくなる可能性がある。CBCT画像はコントラストが低く座標の同定に、やや困難があったが、CTとの座標誤差はわずかであった。
【結論】CT画像との比較で、CBCT画像は信頼して使用できるのに対し、MR画像は誤差が大きい可能性があると思われた。歪み補正を行うか、少なくとも歪みの程度・方向を把握した上で治療を行うことが必要となる。当院では、実際の治療の際には、座標系はフレームCT・CBCTから取得し、MR画像はフレームレスのものをフージョンして使用している。フレームMRI（インジケータ）を用いて座標取得を行う場合は座標のズレに注意を要すると考えられた。

JG6-7

治療後再発と放射線壊死の鑑別における11C-methionine PETとASLの比較検討

Comparative study of 11C-methionine PET and ASL in differentiating post-treatment recurrence and radiation necrosis

高橋　一広 Kazuhiro Takahashi[1)]，小南　衛[1)]，佐藤　祐一郎[1)]，松本　和規[1)]，石田　嵩人[1)]，河合　秀哉[2)]

[1)] 秋田県立循環器・脳脊髄センター　放射線科診療部
Department of Radiology, Akita Cerebrospinal and Cardiovascular Center
[2)] 秋田県立循環器・脳脊髄センター　脳神経外科

【目的】ガンマナイフ治療後の経過観察においてMRIを施行すると再発と放射線壊死はいずれも造影領域が拡大する。当院では再発と放射線壊死の鑑別を要する症例に対し11C-methionine PET（MET-PET）を撮像可能であるが検査日などの制限も多い。arterial spin labeling（ASL）は患者負担が少なく腫瘍血流を評価可能とされており有用性に関する報告がみられる。本研究ではASLとMET-PETとを比較してガンマナイフ治療後の鑑別に対する有用性について検討した。
【方法】ガンマナイフ治療を実施した後、経過観察中に再発と放射線壊死の鑑別のためMET-PETを施行した5例（髄膜腫4例7病変と転移性脳腫瘍1例2病変）を対象とした。MET-PETは投与後20分より撮像を行った。ASLは3T-MRIを用いPLD＝2200msにて撮像した。病変部と対側正常脳組織部にROIを置き、MET-PETとASLそれぞれで病変部/正常脳ROIの平均値の比を算出し比較検討を行った。
【結果】MET-PETによる診断では再発3病変（全て髄膜腫）、放射線壊死6病変（髄膜腫4、転移性脳腫瘍2）であった。腫瘍再発は放射線壊死に比べASLの病変部/正常部の比が高い傾向にあった（腫瘍再発1.14±0.13、放射線壊死0.76±0.24）。病変部が高信号となる病変部/正常部の比＞1の症例を陽性と定義すると感度67%、特異度83%であった。
【結論】少数例ではあるがASLによる鑑別への有用性が確認された。

The 8th Meeting of the Asian Leksell Gamma Knife Society

Resilience

Program & Abstracts

Welcome Message

Dear colleagues and friends,

On behalf of the board members of Asian Leksell Gamma Knife Society and the Japanese Leksell Gamma Knife Society, we are delighted to announce that the 8th Asian Leksell Gamma Knife Society Meeting (ALGKS) in conjunction with the 20th Japanese society meeting will be held jointly in Kochi, Japan, from February 10-12, 2023 at Kochi Prefectural Culture Hall.

The first Gamma Knife was introduced in Japan in 1999. Gamma Knife has spread rapidly in Asia, including Japan, and treatment technology has been constantly advancing by improvement of Gamma Knife machine. With the progress of minimally invasive treatment in neurosurgery, stereotactic radiotherapy such as Gamma Knife is expected to occupy more important position in the future.
In particular, the development of the Icon has made it easier to perform fractionated irradiation, and the range of treatments that can be treated with Gamma Knife has expanded.
Fractionation for metastatic brain tumors with Gamma Knife is one of the hottest topics, but the optimal dose and optimal number of fractionation remain unclear. There are many unclear points about fractionated irradiation for benign tumors. Large AVMs are still difficult to treat.
We hope that the information on Gamma Knife will be updated by discussing the experience of experts from Asian countries on many difficult clinical issues.

Kochi prefecture is located in the south of Shikoku, one of four main islands of Japan. Ryoma Sakamoto, one of the most popular samurai in Japan, was born in Kochi. Kochi Ryoma Airport, the only airport in Kochi, is named after him. There are a lot of various tourist attractions in Kochi, and the food is delicious. We hope you will take this opportunity to enjoy the winter in Kochi as well.

Globally, the pandemic of the covid-19 is still far from being well controlled, but we look forward to meeting our Asian friends in 2023.
We sincerely look forward to your participation.

With warmest regards,

President,
The 8th Meeting of Asian Leksell Gamma Knife Society
Takashi Shuto, M. D.
Vice president, Yokohama Rosai Hospital,
Director, Department of Neurosurgery, Yokohama Rosai Hospital

Board Members

◆ Board Members of Asian LGK Society

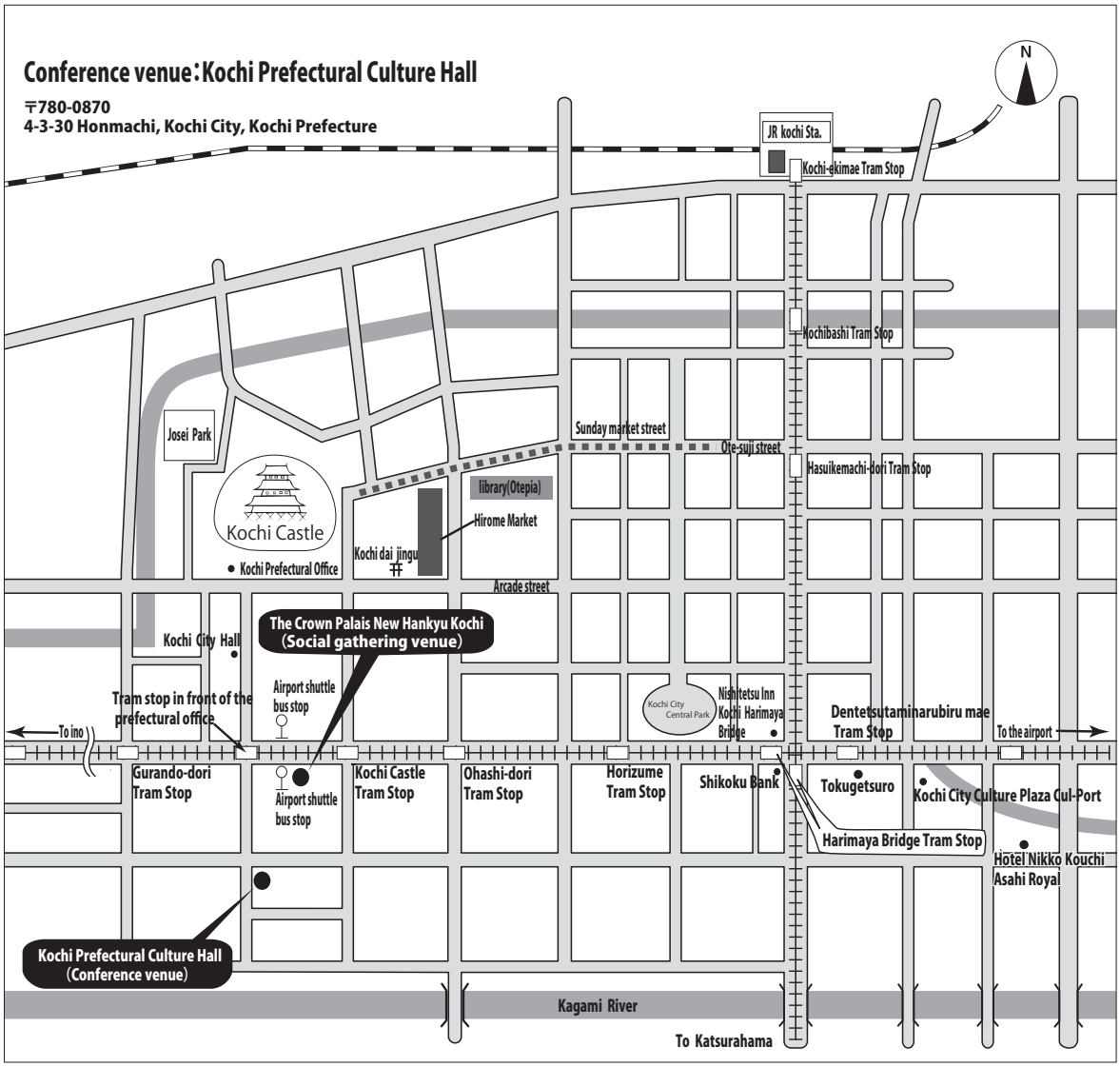
1	Wen-Yuh Chung	Veterans General Hospital-Taipei, National Yang-Ming University, Taiwan
2	Wan-Yuo Guo	Veterans General Hospital-Taipei, National Yang-Ming University, Taiwan
3	Yoshiyasu Iwai	Tominaga Hospital, Japan
4	Hidefumi Jokura	Jiro Suzuki Memorial Gamma House, Furukawa Seiryo Hospital, Japan
5	Bengt Karlsson	National University Hospital, Singapore
6	Jung-Il Lee	Samsung Medical Center, Sungkyunkwan University School of Medicine, Korea
7	Sun-Ha Paek	Seoul National University, Korea
8	David Hung-Chi Pan	Shuang Ho Hospital, Taiwan Medical University, Taiwan
9	Li Pan	Shanghai Gamma Knife Center, China
10	Toru Serizawa	Tsukiji Neurological Clinic, Japan
11	Takashi Shuto	Yokohama Rosai Hospital, Japan
12	Theodor S. Vesagas	The Philippine Gamma Knife Center, Cardinal Santos Medical Center, Philippines
13	Masaaki Yamamoto	Southern Tohoku Hospital, Japan
14	Chung Ping Yu	Gamma Knife Centre, Canossa Hospital, Hong Kong, Clinical Neuroscience Centre, Neurosurgery Centre, Hong Kong Sanatorium and Hospital, Hong Kong

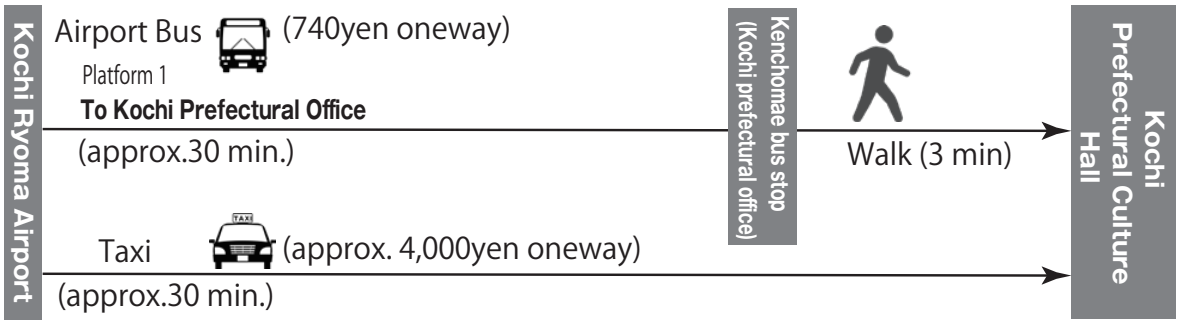
Past Presidents

◆ Succesive Presidents of Asian Leksell Gamma Knife Society

	Year	President	Venue
1st	2009	Dong Gyu Kim	Seoul, Korea
2nd	2010	Yoshihisa Kida	Nagoya, Japan
3rd	2012	David Hung-Chi Pan	Taipei, Taiwan
4th	2015	Masaaki Yamamoto	Yokohama, Japan
5th	2017	Young Jin Lim	Jeju, Korea
6th	2019	Hidefumi Jokura	Sendai, Japan
7th	2020	Wan-Yuo Guo, Wen-Yuh Chung	Taipei, Taiwan
8th	2023	Takashi Shuto	Kochi, Japan

Access Map

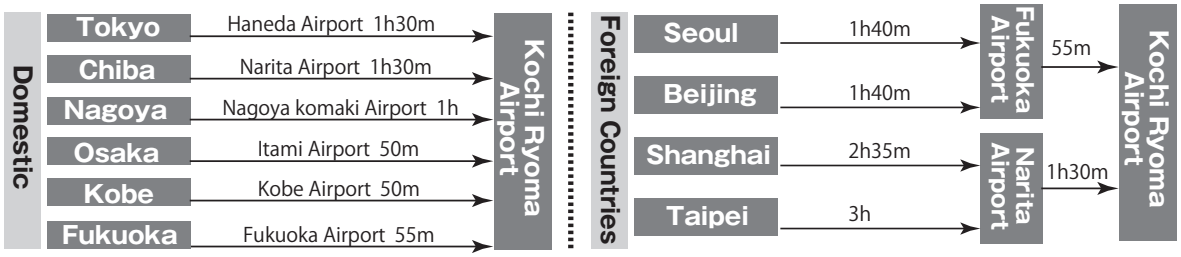




■By air

※**No direct flights**

※**Please note it may take time to make a transfer**

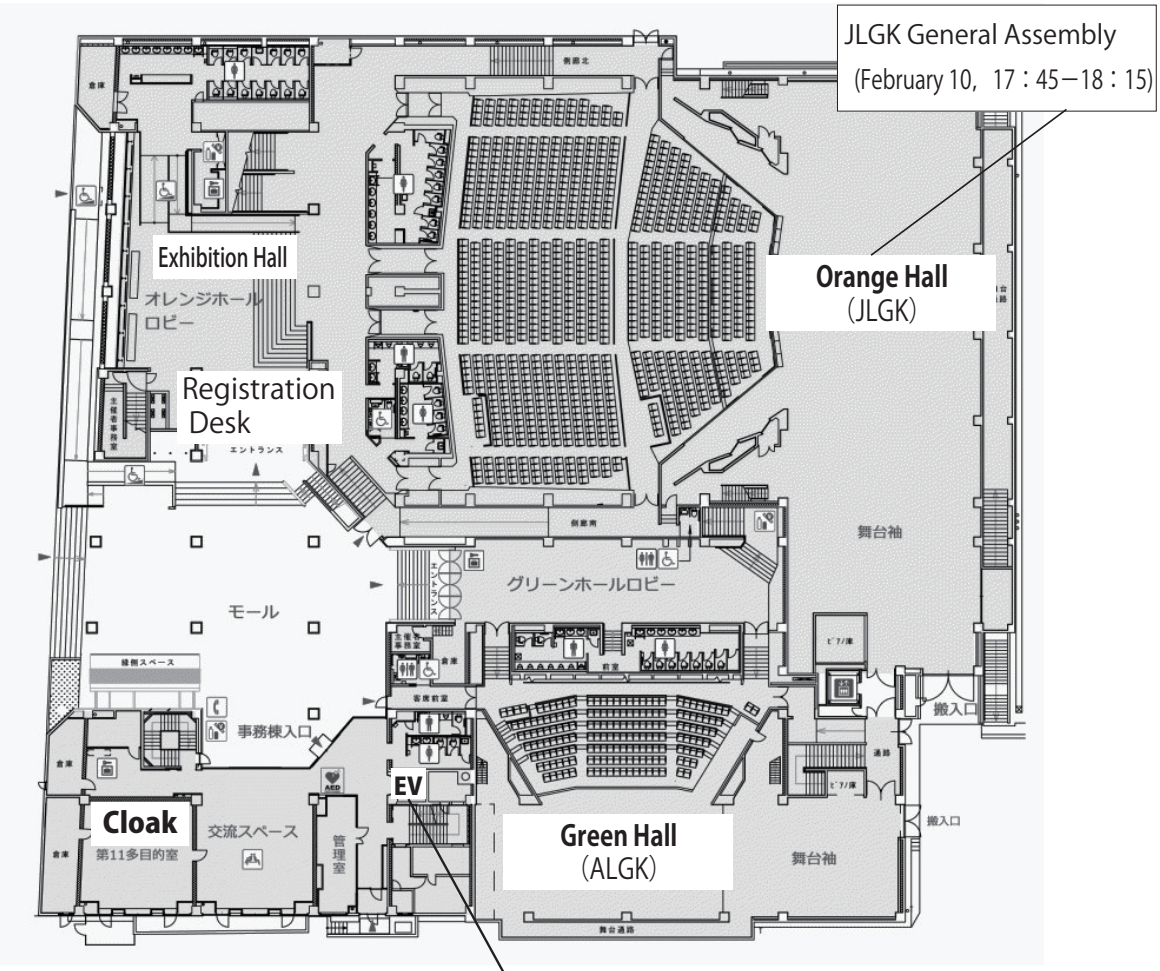


Congress Site Map

Room Location

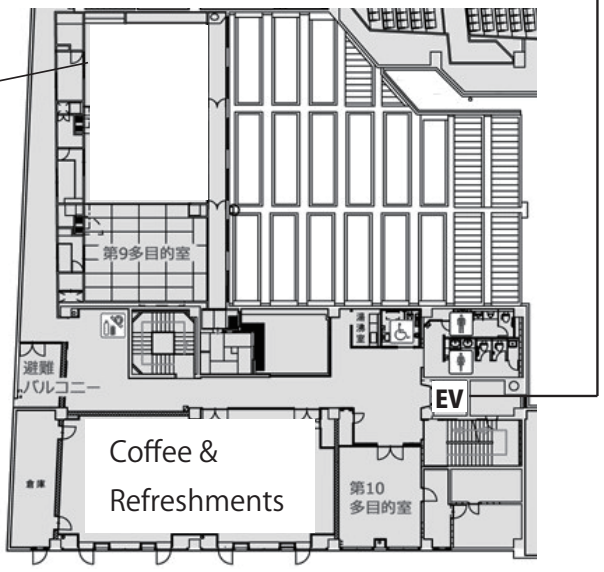
Kochi Prefectural Culture Hall（1F・4F）

1F



Administration Building 4F

JLGK Board Meeting
(February 10, 16：40－17：40)



※Different Venue
◇Get-together Party（3F banquet hall）
(The Crown Palais New Hankyu Kochi, February10 ,19:00-21:00)
◇ALGK Board Meeting（3F Rose room）
(The Crown Palais New Hankyu Kochi, February 11,8:00-9:00)

General Information

◆Date

February 10 (Fri) ~ 12 (Sun), 2023

◆Venue

Kochi Prefectural Culture Hall (Green Hall・Orange Hall)
4-3-30, Honmachi, Kochi-city, Kochi 780-0870 Japan
TEL: +81-88-824-5321
https://kkb-hall.jp/index.html (in Japanese only)

◆Official language

English

◆Registration Desk

Registration desk will be located at the Orange Hall lobby (1st floor).
Open hours:
February 10 (Fri) 12：00 ～ 18：00
February 11 (Sat) 9：15 ～ 18：40
February 12 (Sun) 9：15 ～ 10：40

◆Name Badges

A name badge will be provided to all participants at the registration desk.
The name badge is mandatory for access to all Scientific Sessions, Exhibition and Social Program during the meeting.

◆Program & Abstracts Book

For those who participate in ALGK, one abstracts book will be distributed to each participant at the reception. If you need more than one copy, it will be sold for 2,000JPY, but in limited number.

◆Registration Fee

Onsite registration: February 10 to 12, 2023

Doctor	JPY 22,000
Medical staff	JPY 8,000

◆Registration fee includes the following:

- Admission to all scientific sessions including luncheon seminar
- Program and abstracts book
- Get-together Party ※Pre-registration only

◆Payment Method

Registration fee can be paid by credit card only (VISA, Master, AMEX and JCB are accepted).
Cash payment is not possible for on-site registration on the day. Please prepare your credit card information and register and pay for participation on the web at the reception desk.

◆Congress Etiquette

Participants are advised not to photograph or video recording any sessions without the author's consent. Participants are also advised to obtain consent from authors before citing any of their work

presented at the congress.

◆Wi-Fi Connection

Wi-Fi is not available in Green and Orange Hall, but is available in the following limited areas in the venue.

・Orange Hall Lobby ・Green Hall Lobby ・4F multipurpose room ※Drink Service

The ID and Password for connection will be posted in the venue.

◆Luncheon Seminar

A luncheon seminar will be held on February 11. Japanese style lunch box (avoiding beef and pork) will be served. Lunch box for vegetarian (no meat, no fish, no egg) and halal options are also available, but limited in number.

◆Drink Service

Free coffee and refreshments will be available in multi-purpose room 6 (4th floor), Administration Building.

◆Cloak

Cloak is available at multi-purpose room 11, 1F, Administration Building.

◆Get-together Party (included in the registration fee)

It will be a sit-down party in order to prevent infection. Pre-registration in advance is necessary to attend the party. Please note that we will check your name tag at the reception.
Date & Time: February 10 (Fri) 19：00 ～ 21：00
Place: The Crown Palais New Hankyu Kochi 3F: Flower Room
Attire: Casual and informal

◆ALGK Board Meeting

Date & Time: February 11 (Sat) 8：00 ～ 9：00
Place: Rose room, 3F, The Crown Palais New Hankyu Kochi

◆Secretariat of ALGKS2023

Medical corporation Jikyukai Mominoki Hospital
6-1 Tsukanohara, Kochi-shi, Kochi-ken, 780-0952, Japan
E-mail: asia@ajlgks2023.com

For Moderators & Speakers

Instructions for Moderators

1. Please come to the room 15 minutes before your session starts. The seat for next moderator will be in the front row on the right.
2. Please proceed with the session per the following time allocation.

Instructions for Oral Presentation

1. The time allotted for each presentation is scheduled as follows:
   -Educational Lectures …… Presentation 60 min incl. Q&A
   -Symposia …… Presentation 10 min + Q&A 3 min.
   -General Sessions …… Presentation 8 min + Q&A 2 min
   *You will be notified by a yellow lamp 1 minute before the end of your oral presentation, and will be notified by a red lamp of the end time.
2. All presentations will be done on PC.
3. Please bring your PC or PC data to the PC Preview Desk at least 30 minutes prior to your presentation to register and submit it to test the connection and view your file.
   The PC Preview Desk will be located and be open as follows:

Date	Time	Place
February 10 (Fri)	12：00 ～ 17：30	Lobby, 1F, Orange Hall
February 11 (Sat)	9：15 ～ 17：30	
February 12 (Sun)	9：15 ～ 10：40	

4. Please come to the room 15 minutes before your session starts. The seat for next speaker will be in the front row on the left.
5. Please use the mouse and keyboard on the podium for your presentation. You are required to handle your data yourself, using the mouse or keyboard connected to the PC.
6. The image resolution is Full HD (1920 x 1080 pixels). If it is larger than this size, the edges of the slide will be cut off, so please adjust the slide show settings to Full HD.
7. Sound functions will not be available.
8. Presenter View functions will not be available.
9. If your presentation includes movies and if you use Macintosh, you are advised to bring your own laptop.

[To bring and submit your presentation data (for Windows only)]

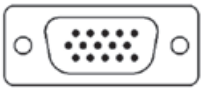
- Please bring your presentation data (PPT). The only PC media that will be available is USB flash drive.
- Any media other than above cannot be used.
  We will prepare a PC with Windows 10 installed at the presentation venue. Application software must be PowerPoint 2019 for Windows (playable with the latest Media Player initial codec, WMV format recommended).
- Your presentation data and pictures and graphs linked thereto are to be saved in the same folder.
- Standard PC fonts for Windows should be used, such as Century and Times New Roman.
- Pleases scan your presentation data for viruses and check if the data works properly in other PCs beforehand.
- The copied data for your presentation will be deleted by the secretariat after the congress.

[To bring your own laptop (PC or Macintosh)]

- Please bring a backup data (PPT) in CD-R or USB memory stick.
- Please make sure to bring an AC adaptor (standard 2 -pin type).

The connector shape of the cable to be connected at the venue is Mini D-sub 15pin or HDMI. Please prepare a computer that fits this shape, or bring a connector that converts to this shape.

Mini D-sub 15pin



HDMI

— Please cancel your password, screen saver and power saving settings in advance.
— Please pick up your laptop at the PC operators' desk in the presentation room after your presentation.

Program

Day 1: Friday, February 10

Green Hall ALGK

12：00 **Reception**

12：55 **Opening Ceremony**

13：10 **General Session 1**
Benign tumors
Moderators：Motohiro Hayashi
Hung-Chuan Pan

14：30

14：40 **ALGK/JLGK Symposium 1**
SRT for metastatic brain tumors
－optimal number of fraction and dose
Moderators：Yoshiyasu Iwai
Se-Hyuk Kim

16：00 **ALGK/JLGK joint announcement**

16：15 **General Session 2**
Vascular disorders 1
Moderator：Chain-Fa-Su

17：05

17：10 **General Session 4**
Imaging, Dose planning, and Physics
Moderator：Hyun-Tai Chung

18：00

19：00 **ALGK/JLGK Get-together Party**
(The Crown Palace New Hankyu Kochi)

21：00

Orange Hall JLGK

12：00 **Reception**

12：55 **Opening Ceremony**

13：00 **Educational Lecture 1 (JLGK)**
Moderator：Akihito Moriki
Speaker：Katsunobu Aoyama

14：00 **Japanese General Session 1 (JLGK)**
Nursing, team medicine

14：40

Moderators：Koichi Hasui
Kaori Toda

16：15 **General Session 3 (ALGK)**
Functional disorders and others
※ALGK On-site Only
Moderator：Jung-Il Lee

17：25

19：00 **ALGK/JLGK Get-together Party**
(The Crown Palace New Hankyu Kochi)

21：00

4F Multipurpose room

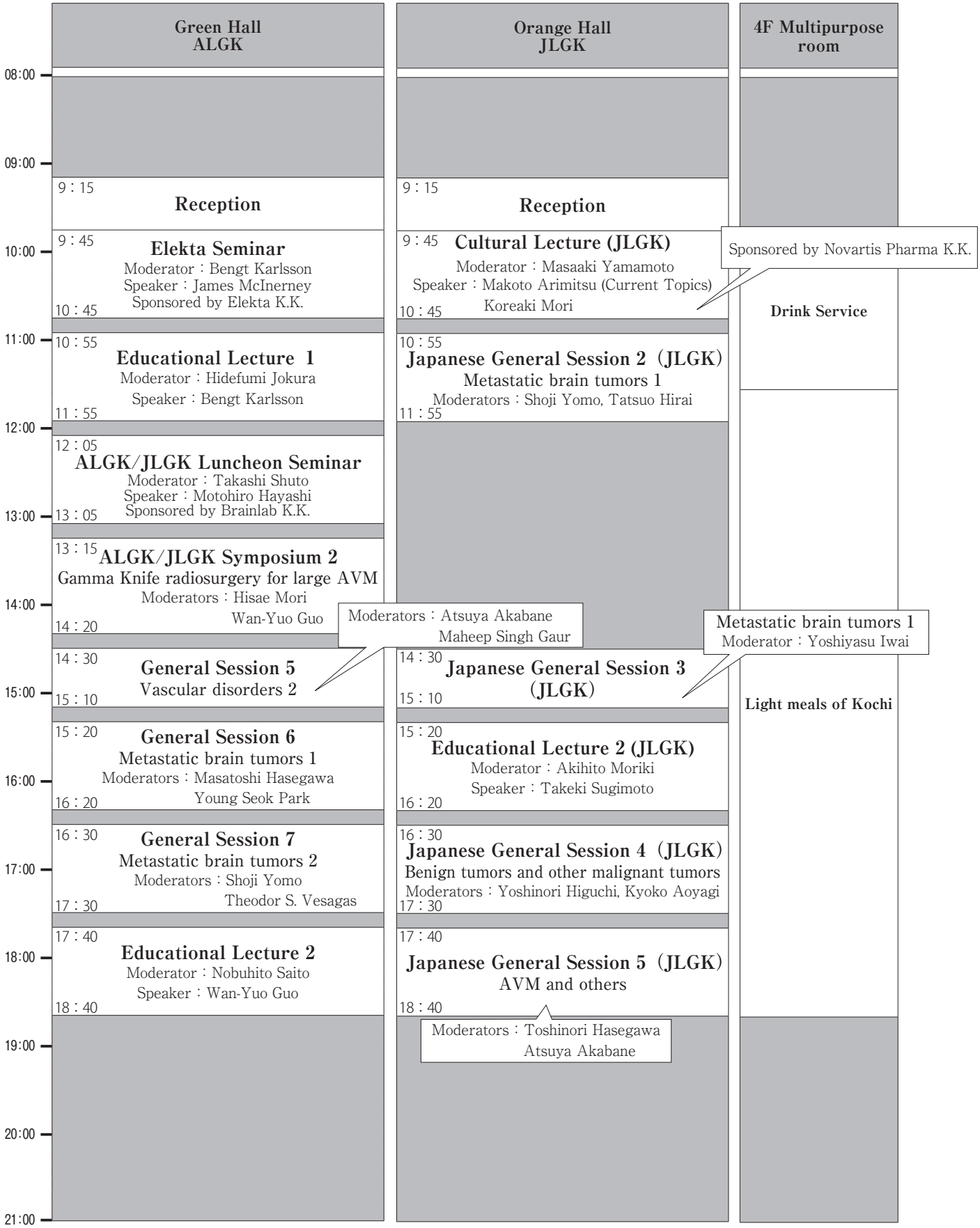
Drink Service

09:00 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00 17:00 18:00 19:00 20:00 21:00

ALGK Program

Program

Day 2: Saturday, February 11



Program

Day 3: Sunday February 12

	Green Hall ALGK	Orange Hall JLGK	4F Multipurpose room
09:00			
	9：15 **Reception**	9：15 **Reception**	
10:00	9：30 **General Session 8** Metastatic brain tumors 3 Moderators：Yoshinori Higuchi Huai-che Yang 10：30	9：30 **Educational Lecture 3 (JLGK)** Moderator：Masanori Morimoto Speaker：Toru Hirano Sponsored by AMIN Co.,Ltd. 10：30	**Drink Service**
11:00	10：35 **ALGK/JLGK Symposium 3** Long term results of Gamma Knife radiosurgery for benign lesions −efficacy and complication Moderators：Toshinori Hasegawa Wen-Yuh Chung 12：20	10：35 **Japanese General Session 6（JLGK）** Icon, technology Moderators：Kazuhiro Yamanaka Kiyomi Minakuchi 11：45	**Light meals of Kochi**
12:00		Moderators：Kazutaka Yatsushiro Szu-Hao Andrew Liu	
13:00	12：25 **General Session 9** Vascular disorders 3 13：05	12：25 **Special Symposium (JLGK)** Moderators：Hidefumi Jokura Akihito Moriki 13：05	
	13：10 **Closing Ceremony**	13：10 **Closing Ceremony**	
14:00			
15:00			
16:00			
17:00			
18:00			
19:00			
20:00			

10th February, Friday

Green Hall

English Session

12 : 55 ～ 13 : 00 Opening Ceremony

13 : 10 ～ 14 : 30 General Session 1 : Benign tumors

Moderators : Motohiro Hayashi（Tokyo Women's Medical University, Japan）
Hung-Chuan Pan（Taichung Veterans General Hospital, Taiwan）

AG1-1 Long-term outcomes of Gamma Knife radiosurgery for central neurocytoma

Hyun Joo Park
Department of Neurosurgery, Seoul national University College of Medicine, Seoul National University Bundang Hospital, Seongnam, Republic of Korea

AG1-2 Central neurocytoma with hemorrhage during Gamma Knife surgery: Case reports and review of the literature

Ji-Eyon Kwon
Department of Neurosurgery, Seoul National University College of Medicine, Seoul National University Bundang Hospital, Seongnam, Korea

AG1-3 Stereotactic radiosurgery for orbital cavernous hemangiomas: a single-center experience over a 22-year period

You-Cong Chen
Department of Neurosurgery, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
School of Medicine, National Yang Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan

AG1-4 Reasonable timing to treat vestibular schwannomas with gamma knife surgery: serial observation of untreated small tumors and remnants after surgery

Yoshinori Higuchi
Department of Neurological Surgery, Chiba University Graduate School of Medicine, Japan

AG1-5 Gamma Knife radiosurgery treatment results for older (age of ≥75) patients with vestibular schwannoma

Kyoko Aoyagi
Gamma Knife House, Chiba Cerebral and Cardiovascular Center, Japan

AG1-6 Long-lasting transient volume expansion of sporadic vestibular schwannomas after stereotactic radiosurgery: Is it tumor progression?

So Young Ji
Department of Neurosurgery, Seoul National University Bundang Hospital, Gyeonggi-do, S. Korea

AG1-7 Using the deformity index of vital structures to predict outcome of patients with large vestibular schwannomas after Gamma Knife radiosurgery

Hung-Chuan Pan
Department of Neurosurgery, Taichung Veterans General Hospital, Taichung, Taiwan

AG1-8 Quantification of tumor response of cystic vestibular schwannoma to Gamma Knife radiosurgery by using artificial intelligence

Chih-Ying Huang
Department of Radiology, Taipei Veterans General Hospital, Taiwan

14：40～16：00 Symposium 1：SRT for metastatic brain tumors －optimal number of fraction and dose

Moderators：Yoshiyasu Iwai（Tominaga Hospital, Japan）
Se-Hyuk Kim（Ajou University School of Medicine, Korea）

AS1-1 Results of 2-staged Gamma Knife radiosurgery for large brain metastases at Ha Noi, Viet Nam

Nguyen Duc Lien
Department of Neurosurgery, National cancer hospital (K hospital), Ha Noi, Viet Nam.

AS1-2 Neoadjuvant stereotactic radiosurgery for brain metastases: single-fraction and hypofractionation experience

Cristian Udovicich
Department of Radiation Oncology, Peter MacCallum Cancer Centre, Melbourne, Australia

AS1-3 Hypofractionated irradiation with Gamma Knife Icon for large metastatic brain tumors

Kazutaka Yatsushiro
Department of Neurosurgery, Fujimoto General Hospital, Japan

AS1-4 Fractionated radiotherapy for metastatic brain tumors using mask system of Leksell Gamma Knife Icon

Takuya Kawabe
Department of Neurosurgery, Rakusai Shimizu Hospital, Japan

AS1-5 Interfractional change of tumor volume during fractionated stereotactic radiotherapy using gamma knife for brain metastases

Mariko Kawashima
Gamma Knife Center, NTT Medical Center Tokyo, Japan

AS1-6 Gamma knife radiosurgery and radiotherapy for brain metastases in non-small cell lung cancer harboring driver gene alterations

Mariko Kawashima
Gamma Knife Center, NTT Medical Center Tokyo, Japan

16：15～17：05 General Session 2：Vascular disorders 1

Moderator：Chain-Fa-Su（Buddhist Tzu-Chi Medical Center, Tzu-Chi University, Taiwan）

AG2-1 (Keynote Lecture)

Brain arteriovenous malformations and dural arteriovenous fistulas: risk evaluations and radiosurgical outcome prediction

Yong-Sin Hu
Department of Radiology, Taipei Hospital, Ministry of Health and Welfare, Taiwan

AG2-2 Gamma Knife radiosurgery for the clival epidural-osseous dural arteriovenous fistulas

Cheng-Chia Lee
Departments of Neurosurgery, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
School of Medicine, National Yang-Ming University, Taipei, Taiwan

AG2-3 Radiosurgical outcome of intracranial avms planned on DSA and MRI for Gamma Knife stereotactic radiosurgery versus MRI alone

Kanwaljeet Garg
Department of Neurosurgery, All India Institute of Medical Sciences, New Delhi, India

17 : 10 ～ 18 : 00 General Session 4 : Imaging, Dose planning, and Physics

Moderator : Hyun-Tai Chung（Seoul National University College of Medicine, Korea）

AG4-1 Efficient timer errors measurements for all three collimators in Gamma Knife (GK) ICON

Tanxia Qu
Center for Advanced Radiosurgery, NYU Langone Health, USA
Department of Radiation Oncology, NYU Langone Health, USA

AG4-2 Use an electrometer's time-series data logger function in Gamma Knife ICON QA

Tanxia Qu
Center for Advanced Radiosurgery, NYU Langone Health, USA
Department of Radiation Oncology, NYU Langone Health, USA

AG4-3 Use an electrometer's time-series data logger function to measure a beam profile

Tanxia Qu
Center for Advanced Radiosurgery, NYU Langone Health, USA
Department of Radiation Oncology, NYU Langone Health, USA

AG4-4 Verification of the absorbed energy calculation procedure of the Leksell Gamma Plan

Hyun-Tai Chung
Department of Medical Device Development, Seoul National University College of Medicine, Seoul, Korea
Department of Neurosurgery, Seoul National University Hospital, Seoul, Korea

AG4-5 Error analysis of probe measurements in extend treatment procedures

Eliseo Dela Cruz, Jr
Philippine Gamma Knife Center, Cardinal Santos Medical Center, San Juan City, Metro Manila, Philippines

10th February, Friday

Orange Hall

English Session

16：15～17：25 General Session 3 : Functional disorders and others

Moderator : Jung-Il Lee（Samsung Medical Center, Sungkyunkwan University School of Medicine, Korea）

AG3-1 Usefulness of Elements workstation (Brainlab) in stereotactic radiosurgery/stereotactic radiotherapy treatment planning

Yoshimasa Mori
Center for Advanced IGRT, Shin-Yurigaoka General Hospital, Japan

AG3-2 Long term results of Gamma knife radiosurgery for essential trigeminal neuralgia: final clinical evaluation of the role and needs according to more than 100 patients with at least 10 years follow up

Motohiro Hayashi
Section of Stereotactic Radiosurgery, Department of Neurosurgery, Tokyo Women's Medical University, Japan

AG3-3 Outcome of Gamma Knife thalamotomy and biologically effective dose (BED)

Jung-Il Lee
Deparment of Neurosurgery, Samsung Medical Center, Sungkyukwan Univerity School of Medicine, Korea

AG3-4 Dynamic radiation-induced imaging changes more than 20 years following Gamma Knife surgery

Ai Peng Tan
Department of Radiology, National University Hospital, Singapore

AG3-5 Adverse radiation effects (ARE): The major challenging complication after stereotactic radiosurgery on intracranial lesions

Szu-Hao Andrew Liu
Gamma knife center and Department of Neurosurgery, Kaohsiung Veterans General Hospital, Taiwan

AG3-6 Ventralis oralis anterior (Voa) deep brain stimulation plus Gamma Knife thalamotomy in an elderly patient with essential tremor

Young Seok Park
Department of Neurosurgery, Gamma Knife Icon Center, Chungbuk National University Hospital, Cheongju, Republic of Korea
Department of Medical Neuroscience, College of Medicine, Chungbuk National University, Cheongju, Republic of Korea
Department of Neurosurgery, College of Medicine, Chungbuk National University, Cheongju, Republic of Korea

AG3-7 Gamma knife radiosurgery multisession providing long term tumor control of skull base meningioma

Abdul Sattar M Hashim
Department of Neurosurgery, Neurospinal and Cancer Care Institute, Pakistan

11th February, Saturday

Green Hall

English Session

9 : 45 ～ 10 : 45　Elekta Seminar　【Sponsored by Elekta Co.,Ltd.】

Moderator : Bengt Karlsson（National University Hospital, Singapore）

Speaker : James McInerney

(Professor of Neurosurgery, Neurosurgical Residency Program Director, Director of Stereotactic and Functional Neurosurgery Fellowship
Neurosurgical Director, Penn State Hershey Gamma Knife Center, Department of Neurosurgery, Penn State Hershey Medical Center (USA))

10 : 55 ～ 11 : 55　Educational Lecture 1

Moderator : Hidefumi Jokura（Jiro Suzuki Memorial Gamma House, Furukawa Seiryo Hospital, Japan）

Factors related to the risk for hemorrhage following GKS – which are treatment and which are natural course related?

Speaker : Bengt Karlsson

(National University Hospital, Singapore)

12 : 05 ～ 13 : 05　ALGK/JLGK Luncheon Seminar

Sponsored by Brainlab K.K.

Moderator : Takashi Shuto（Yokohama Rosai Hospital, Japan）

Treatment strategy and clinical results of Gamma Knife stereotactic radiosurgery for high grade pediatric arteriovenous malformation: Utility and the role of Brainlab "Vascular ELEMENTS" software associated with modern Gamma knife system (Icon)

Speaker : Motohiro Hayashi

(Section of Stereotactic Radiosurgery, Department of Neurosurgery, Tokyo Women's Medical University, Japan)

13 : 15 ～ 14 : 20　Symposium 2 : Gamma Knife radiosurgery for large AVM

Moderators : Hisae Mori（National Cerebral and Cardiovascular Center Hospital, Japan）
Wan-Yuo Guo
（Veterans General Hospital-Taipei, National Yang-Ming University, Taiwan）

AS2-1　The role of gamma knife surgery in the treatment of high-grade ruptured cerebral AVMs

Hisae Mori
Department of Neurosurgery, National Cerebral and Cardiovascular Center Hospital, Japan

AS2-2 Change of therapeutic strategies with GKS and other interventional therapies for unruptured brain arteriovenous malformation after the publication of the ARUBA trial

Taichi Ikedo
Department of Neurosurgery, National Cerebral and Cardiovascular Center, Japan

AS2-3 The irradiated brain volume within 12 Gy is a predictor for radiation-induced changes after stereotactic radiosurgery in patients with unruptured cerebral arteriovenous malformations

Huai-Che Yang
Institute of Brain Science, National Yang-Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan
School of Medicine, National Yang-Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan
Department of Neurosurgery, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan

AS2-4 Efficacy of embolization before stereotactic radiosurgery for brain arteriovenous malformations

Saori Kubota
Department of Neurological Surgery, Chiba University, Japan

AS2-5 Against controversy: Long-term outcomes of gamma knife radiosurgery for non-hemorrhagic large AVM based on the over 1,000 cases in 30 years at our institution

Yuki Shinya
Department of Neurosurgery, The University of Tokyo Hospital, Japan

14：30～15：10 General Session 5 : Vascular disorders 2

Moderators : Atsuya Akabane（NTT Medical Center Tokyo, Japan）
Maheep Singh Gaur（Vimhans Hospital New Delhi, India）

AG5-1 Hemorrhage risk of unruptured brain arteriovenous malformation after Gamma Knife radiosurgery: Significance of vascular compactness

Po-Wei Huang
Department of Radiation Oncology, Shuang Ho Hospital, Taipei Medical University, Taiwan

AG5-2 Gamma Knife radiosurgery for brain arteriovenous malformations: a 15-year single center experience in Southern Vietnam

Binh Thanh Nguyen
Department of Neurosurgery, Cho Ray Hospital, Ho Chi Minh City, Vietnam

AG5-3 Comparison of the outcomes after Gamma Knife radiosurgery for arteriovenous malformations in pediatric and adult patients

Jun Kawagishi
Jiro Suzuki Memorial Gamma House, Furukawa Seiryo Hospital, Japan

AG5-4 A case of spontaneous obliteration of medium-sized unruptured cerebral arteriovenous malformation accompanied by reduced activity of protein S

Atsuya Akabane
Gamma Knife Center, NTT Medical Center Tokyo, Japan

15：20 ～ 16：20 General Session 6 : Metastatic brain tumors 1

Moderators : Masatoshi Hasegawa（Hidaka Hospital, Japan）
Young Seok Park（Chungbuk National University, Korea）

AG6-1 Improved prognosis for NSCLC patients with wildtype/mutant EGFR and brain metastases following stereotactic radiosurgery and immune/targeted therapy

Ai Seon Kuan
Department of Neurosurgery, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan

AG6-2 Can we alleviate the radiation treatment for brain metastasis in the lung cancer patient with EGFR mutation in the era of targeted therapy?

Guan-Ying Chiou
Neurosurgery, Department of Surgery, Fu Jen Catholic University Hospital, New Taipei City, Taiwan

AG6-3 VEGFR-TKI treatment for radiation-induced brain injury after gamma knife radiosurgery for brain metastases from renal cell carcinomas

Ryuichi Noda
Gamma Knife Center, NTT Medical Center Tokyo, Japan
Department of Neurosurgery, NTT Medical Center Tokyo, Japan

AG6-4 Effectiveness of immune checkpoint inhibitors in combination with stereotactic radiosurgery for patients with brain metastases from lung cancer: a propensity score-matched analysis

Shoji Yomo
Division of Radiation Oncology, Aizawa Comprehensive Cancer Center, Aizawa Hospital, Japan

AG6-5 Gamma Knife radiosurgery for surgical cavity of brain metastases: factor analysis and gene consideration

Huang Yi-Han
Department of Neurosurgery, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan

AG6-6 Gamma knife radiosurgery for metastatic brain tumors from ovarian cancer (JLGK1801)

Shigeo Matsunaga
Department of Neurosurgery and Stereotactic Radiotherapy Center, Yokohama Rosai Hospital, Japan

AG6-7 Volume prediction for large brain metastases after hypofractionated gamma knife radiosurgery through artificial neural network

Hyeong Cheol Moon
Department of Neurosurgery, Gamma Knife Icon Center, Chungbuk National University Hospital, Cheongju, Republic of Korea

16：30 ～ 17：30 General Session 7 : Metastatic brain tumors 2

Moderators : Shoji Yomo（Aizawa Hospital, Japan）
Theodor S. Vesagas（The Philippine Gamma Knife Center, Cardinal Santos Medical Center, Philippines）

AG7-1 Natural history of lung squamous cell brain metastases in patients treated with radiosurgery: a thirty-year experience at a Tertiary Medical Center

Yu-Chi Chen
Department of Neurosurgery, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan

AG7-2 withdrawn

AG7-3 Large cystic brain metastases are treatable without drainage by hypofractionated or staged radiosurgery

Takeshi Kondoh
Department of Neurosurgery, Shinsuma General Hospital, Japan

AG7-4 Fractionated Gamma Knife radiosurgery after cyst aspiration for large cystic brain metastases: case series and literature review

Ryuichi Noda
Gamma Knife Center, NTT Medical Center Tokyo, Japan
Department of Neurosurgery, NTT Medical Center Tokyo, Japan

AG7-5 Usefulness of Gamma Knife stereotactic radiotherapy for repeat brain metastasis in the choroid plexus from renal cell carcinoma: a case report

Kazunori Koyama
Gamma Knife Center, Okuma Hospital, Japan

AG7-6 Gamma Knife radiosurgery: A safe and effective treatment for brain metastases in pregnancy

Beehong Soon
Neurosurgery Unit, Department of Surgery, Faculty of Medicine, National University of Malaysia, Kuala Lumpur, Malaysia

17：40 ～ 18：40 Educational Lecture 2

Moderator : Nobuhito Saito（The University of Tokyo Hospital, Japan）

Brain Metastasis: AI Assisted Detection and Beyond

Speaker : Wan-Yuo Guo
(Department of Radiology, Taipei Veterans General Hospital, Taiwan
Taiwan AI Labs, Taipei, Taiwan
China Medical University Hospital, Taichung, Taiwan)

12th February, Sunday

Green Hall

English Session

9：30 ～ 10：30　General Session 8 : Metastatic brain tumors 3

Moderators : Yoshinori Higuchi（Chiba University Graduate School of Medicine, Japan）
Huai-che Yang（Taipei Veterans General Hospital, Taiwan）

AG8-1　Gamma Knife Surgery for twenty or more brain metastases - a pilot and feasibility study

Jiani Sherry Liu
Department of Surgery, Division of Neurosurgery, National University Hospital, Singapore

AG8-2　Multi-session radiosurgery for numerous small brain metastases

Yasuhiro Matsushita
Gamma Knife Center, Okuma Hospital, Japan

AG8-3　Leukoencephalopathy in patients with brain metastases who received radiosurgery with or without whole brain radiotherapy

Chan-Wei Liu
Department of Neurosurgery, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan

AG8-4　Whole-brain radiotherapy vs. Localized radiotherapy after resection of brain metastases in the era of targeted therapy: a retrospective Study

Se-Hyuk Kim
Gamma Knife Center, Brain Tumor Center, Department of Neurosurgery, Ajou University Medical Center, Suwon, Korea

AG8-5　Treatment results of post-stereotactic radiosurgical recurrence in patients with brain metastases

Masaaki Yamamoto
Department of Neurosurgery, Southern Tohoku Hospital, Japan
Katsuta Hospital Mito GammaHouse, Japan

AG8-6　A new tool for assessing risks of systemic and neurologic death in brain metastasis patients undergoing Gamma Knife radiosurgery

Toru Serizawa
Tokyo Gamma Unit Center, Tsukiji Neurological Clinic, Japan

10：35 ～ 12：20　Symposium 3 : Long term results of Gamma Knife radiosurgery for benign lesions －efficacy and complication

Moderators : Toshinori Hasegawa（Komaki City Hospital, Japan）
Wen-Yuh Chung（Veterans General Hospital-Taipei, National Yang-Ming University, Taiwan）

AS3-1　Hearing preservation after planned partial resection followed by gamma knife radiosurgery for large vestibular schwannomas

Yoshiyasu Iwai
Department of Neurosurgery, Tominaga Hospital, Japan

AS3-2 Gamma knife radiosurgery for vestibular schwannomas: Looking back 30 years of our experience

Hidefumi Jokura
Jiro Suzuki Memorial Gamma House, Furukawa Seiryo hospital, Japan
Department of Neurosurgery, Tohoku University School of Medicine, Japan

AS3-3 Stereotactic radiosurgery for post-operative residual vestibular schwannomas: immediate irradiation versus at time of confirmed growth

Shinya Watanabe
Department of Neurosurgery, Mito Kyodo General Hospital, Tsukuba University Hospital Mito Area Medical Education Center, Japan
Department of Neurosurgery, Faculty of Medicine, University of Tsukuba, Japan

AS3-4 Long term results of Gamma knife micro-radiosurgery for acoustic tumors in Neurofibromatosis type 2 patients: treatment policy, strategy, and clinical results for maintenance of serviceable hearing

Motohiro Hayashi
Section of Stereotactic Radiosurgery, Department of Neurosurgery, Tokyo Women's Medical University, Japan

AS3-5 Long term effects of Gamma Knife radiosurgery for skull base meningiomas

Maheep Singh Gaur
Gamma Knife Centre, Vimhans Hospital, India

AS3-6 Long-term outcomes of stereotactic radiosurgery for skull base tumors involving the cavernous sinus

Motoyuki Umekawa
Department of Neurosurgery, The University of Tokyo Hospital, Japan

AS3-7 Long-term risks of hemorrhage and adverse radiation effects of stereotactic radiosurgery for brain arteriovenous malformations

Toshinori Hasegawa
Department of Neurosurgery, Komaki City Hospital, Japan

AS3-8 Multimodal treatment for ruptured arteriovenous malformations at our institution with three modalities

Akihiro Niwa
Department of Neurosurgery, National Cerebral and Cardiovascular Center Hospital, Japan

12：25 ～ 13：05 General Session 9 : Vascular disorders 3

Moderators : Kazutaka Yatsushiro（Fujimoto General Hospital, Japan）
Szu-Hao Andrew Liu（Kaohsiung Veterans General Hospital, Taiwan）

AG9-1 Development of expanding hematoma and expanding cysts in AVMs after GKS

Han-Song Tseng
Department of Neurosurgery, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan

AG9-2 Long-term results of gamma knife radiosurgery for pediatric arteriovenous malformations

Kazuhiro Yamanaka
Department of Neurosurgery, Osaka City General Hospital, Japan

AG9-3 Effect of treatment of cerebral arteriovenous malformations (AVMs) on AVM-associated epilepsy

Etsuko Yamamoto Hattori
Department of Neurosurgery, National Cerebral and Cardiovascular Center, Japan

AG9-4 Two cases of response to gamma knife radiosurgery for arteriovenous malformation complicated by Moyamoya disease

Junji Fukumori
Department of Neurosurgery, National Cerebral and Cardiovascular Center Hospital, Japan

13：10 ～ 13：15 **Closing Ceremony**

Educational Lecture

Curriculum Vitae

Abstracts

Name : Bengt Karlsson

Education:
1972 - 1974 : University Studies in Technical and Theoretical Physics, Royal Institute of Technology, Stockholm, Sweden
1975 - 1980 : Medical studies, Karolinska Institute, Stockholm, Sweden
1980 : Examined from the Karolinska Institute Medical School, Stockholm, Sweden
1996 : Successful defense of doctorial thesis (Ph.D.) "Gamma Knife surgery for Arteriovenous malformations" at the Karolinska Institute, Stockholm, Sweden, 1996

Positions:
1983 - 1988 : residency in Neurosurgery, South Hospital, Stockholm, Sweden
1988 - 2001 : consultant at the department of Neurosurgery, Karolinska Hospital, Stockholm Sweden
1991 - 1998 : Assistant Director, Karolinska Gamma Knife center
1998 - 2001 : Director, Karolinska Gamma Knife Center, Karolinska, Hospital, Stockholm, Sweden
2001 - 2004 : Board certified Neurosurgeon in Germany and head, Gamma Knife Center at the Goethe University Frankfurt, Frankfurt am Main, Germany
2004 - 2009 : Head of Gamma Knife and Full Professor of Neurosurgery, dep of Neurosurgery, West Virginia University, Morgantown WV USA
2009 - at present : Visiting consultant, National University Hospital, Singapore and director, Parkway Gamma Knife Centre
Working with Gamma Knife Surgery since 1985

Medical Licenses:
Sweden M.D. since 1982. Active
Germany M.D. since 2001. Active
West Virginia USA M.D. since 2005. Passive
Pennsylvania USA M.D. since 2007. Passive
Singapore M.D. since 2008. Active

Visiting professor to the following places:
Dep of Neurosurgery, Armed Forces Hospital Riyadh KSA (Dec 1997)
Dep of Neurosurgery, University at Buffalo, NY USA (May 1999)
Dep of Neurosurgery, Cleveland Clinic. Cleveland, OH USA (Nov 2007)
Dep of Neurosurgery, Riyadh Military Hospital, Riyadh, Saudi Arabia (October 2009)

Factors related to the risk for hemorrhage following GKS – which are treatment and which are natural course related?

Bengt Karlsson, M.D., Ph.D.

National University Hospital, Singapore

The risk for hemorrhage between GKS and obliteration was analyzed in a recent study based on data from 5037 patients. It could be shown that the risk is independently related to the lowest dose to the AVM nidus, the AVM volume, the age of the patient and the AVM location. We could also show that females in their child bearing ages had a lower risk for hemorrhage as compared to males in the same age group.

Which of the parameters above are treatment and which are AVM or patient related? This is important, as this information allows us to objectively compare the risk/benefit ratios between GKS and other management modalities. In order to answer this question, information about the natural course for AVMs is necessary. We could in an earlier study show that the AVM volume and the age of the patient are unrelated to the hemorrhage risk for untreated patients. We could also show that females in their child bearing ages have a higher risk for hemorrhage as compared to males in the same age group. Thus, the increase in post GKS risk for hemorrhage caused by larger AVM volumes and older ages must be treatment related. The lower risk for hemorrhage for females in the child bearing ages is indirectly related to the treatment, as pregnancy has been postponed until the AVMs are occluded. Our data shows that the risk for AVM hemorrhage during pregnancy is 3-4 times higher during pregnancy, or around 10% per year.

In conclusion, the higher risk for hemorrhage for centrally located AVMs reflect the natural course and is not treatment related. Low dose to any part of the AVM Indus, large AVM volume and old age are all independent factors increasing the risk for post GKS hemorrhage. These relations can be quantified, allowing us to accurately predict the risk for hemorrhage during the first two years following GKS.

Name : Wan-Yuo Guo, M.D., Ph.D. (郭萬祐)

Ⅰ. Current Position:
Emeritus Professor, Department of Radiology, Taipei Veterans General Hospital (VGH-TPE)
Professor, School of Medicine, National Yang Ming Chiao Tung University, Taiwan
Head, Medical Solutions, Taiwan AI Labs, Taipei, Taiwan
Consultant, AI Center for Medical Diagnosis, CMU Hospital, Taichung, Taiwan
President, The World Federation of Neuroradiological Societies (WFNRS)

Ⅱ. Education
a) Undergraduate
1974 - 1981 Medical Doctor, China Medical University (CMU), Taiwan
b) Graduate
1989 - 1993 PhD, Karolinska Institute (KI), Stockholm, Sweden

Ⅲ. Professional Experience
1981 - 1983 Military Surgeon
1983 - 1986 Residency in Dept. of Radiology, VGH-TPE
1986 - 1987 Chief Residency, Dept. of Radiology, VGH-TPE
1987 - 1988 Fellowship, Division of Neuroradiology, Dept. of Radiology, VGH-TPE
1988 - 1989 Attending Radiologist, Division of Neuroradiology, VGH-TPE
1989 - 1993 Fellowship, Dept. of Neuroradiology, Karolinska Hospital, KI, Stockholm, Sweden
1994 - 2006 Chief, Division of MRI, Dept. of Radiology, VGH-TPE
2006 - 2016 Chief, Division of Neuroradiology, Dept. of Radiology, VGH-TPE
1987 - 1989 Deputy Secretary General, The Chinese Taipei Society of Radiology (CTSR)
1995 - 1998 Secretary General, The Neuroradiological Society of Taiwan (NRST)
2008 - 2010 Secretary General, CTSR
2006 - 2010 Member-at-large, World Federation of Neuroradiological Societies (WFNRS)
2010 - 2013 President, NRST
2013 - 2016 President, CTSR
2014 - 2018 Member, Executive Committee, WFNRS
2014 - 2018 President, XXI SNR-Symposium Neuroradiologicum
(2018 World Congress of Neuroradiology, Taipei, Taiwan)
2018 - 2022 President-Elect/Vice President, WFNRS
2016 - 2022 Professor and Chairman, Department of Radiology, VGH-TPE, Taiwan
2005 - present Professor, School of Medicine, National Yang Ming Chiao Tung University, Taiwan

Ⅳ. Honors
1. Derek Harwood-Nash Pediatric Neuroradiology Scholarship 1998, The Hospital for Sick Children university of Toronto, Toronto, Canada
2. Visiting Professor, Division of Pediatric Neurosurgery, Department of Neurosurgery, Jikei University, School of Medicine, Tokyo, Japan, Aug 14-21, 2004
3. Honorary Member, American Society of Neuroradiology (2014)
4. Honorary Member, American Roentgen Ray Society (2015)
5. Honorary Member, KCR-AOCR (2022)

Ⅴ. Publications and Lectures
2 Hundreds of publications and hundreds of domestic and international invited speeches.
2 Five SCI Journals cover story papers

Brain Metastasis: AI Assisted Detection and Beyond

Wan-Yuo Guo[1,2,3], Myron Li[2], Ethan Tu[2] , Kei Yamada[4]

[1] Department of Radiology, Taipei Veterans General Hospital, Taiwan
[2] Taiwan AI Labs, Taipei, Taiwan
[3] China Medical University Hospital, Taichung, Taiwan
[4] Department of Radiology, Graduate School of Medical Science, Kyoto Prefectural University of Medicine, Japan

Introduction The majority of deep learning artificial intelligence (AI) models for imaging diagnosis demonstrate diminished model performance on external dataset. We employ multiple steps in model development, refinement, validation on MRI from wide-ranging vendors and hospitals and results in a clinically applicable vendor agnostic AI model for brain metastasis detection on MRI.
Methods AI model training based on MRI of 1029 patients with brain metastases from a single institute and single MRI brand was conducted. A benchmark algorithm of 2D Mask R-CNN was used and resulted in an initial model, DeepMets® (Step I). Model generalization of DeepMets® was then carried out over a nationwide population-based dataset (from 23 hospitals) via deep active learning on 559 patients (randomized from 3125) from National Health Insurance Administration (NHIA) medi-cloud, Taiwan. Iterative refining process using the ResNext50 U-Net architecture with attention mechanisms were undertaken and resulted in a newer version model, DeepMets-Plus® (Step II). Final testing of the model was conducted on a dataset of brain metastasis consisted of 152 patients (489 metastases). They were referred from 19 hospitals for considering radiosurgery on their brain metastasis. Their diagnostic MRI were conducted from three vendors. Sizes of the metastases were median 7 (4-40) mm in maximum diameters. The ground truth of the final test was obtained from a consensus of three experienced neuroradiologists, with 30 (25-36) years professional experience in neuroradiology (Step III).
Results The performance of DeepMets® were: sensitivity 96%, precision 86%, and f1 91% (Step I). It dropped to sensitivity 76%, precision 45% and f1 48%, initially, on the NHIA dataset. After three active learning rounds with Ensemble & Post, DeepMets-Plus® yielded the final performance of sensitivity 0.86%, precision 0.90%, and f1 0.87% (Step II). For DeepMets-Plus®, the intersection over union between ground truth and model inference were 0.718, 0.210-0.904 (median, range). The centroid and Hausdorff distances were, respectively, 0.617, 0.124-2.154 mm and 2.512, 0.469-7.469 mm. The final model performance was: sensitivity 85%, precision 93%, f1 89%, and false positive rate of 0.21/patient (Step III).
Discussion and Conclusion The initial model, DeepMets®, has high performance in detecting brain metastases on in-house homogeneous MRI dataset. However, the performance of DeepMets® initially dropped when applied to the heterogeneous imaging datasets in NHIA. After the model refinement conducted on the NHIA imaging datasets, DeepMets-Plus® gains model generalization and results in model performance as good as in the step I. The access to a national-scale dataset demonstrates significant improvements in performance and model generalization across vendors and imaging parameters for brain metastasis detection. The model is now applicable for assisting brain metastasis detection and contouring for clinical use.
One of the solutions for generalization of an AI model is to train a model on dataset from multiple sources with heterogeneity in data properties. In real world scenario, however, it is not feasible to collect and centralize datasets due to privacy and autonomy concerns. Federated learning, a way of model training and refinement based on non-centralized smaller datasets, opens a new window for reaching our goal of sharing the weights of models rather than datasets *per se* and resulting in the final model weights with the input of bigger datasets.
Regulatory approval AI models and their business promotion are the last but not least steps of AI application in clinical scenarios. They are also the critical steps that decide the sustainability of AI ecosystem. To the year of 2022, the global majority of medical AI models that have received regulatory approval for clinical use are imaging-related products. Among them, only not many are reimbursed globally, e.g., in the US and Japan. If we believe that medical AI is one of the savors of the medical communities to overcome the global problem of medical manpower shortage, the last steps of obtaining regulatory approval and business promotion and reimbursement for using AI in clinical service will be the keys to the success.

Luncheon Seminar

Curriculum Vitae

Abstract

Name : Motohiro Hayashi, MD, DMSc

Motohiro Hayashi, MD, DMSc is a Professor of Neurosurgery at Tokyo Women's Medical University, a Visiting Associate Professor of Neurosurgery at National defense medical college, a Visiting Associate Professor of Heavy Particle Ion Center at Gunma University. and a visiting researcher at National Institutes for Quantum Science and Technology. He is the Director of the section of Stereotactic Radiosurgery at Tokyo Women's Medical University. Dr Hayashi earned both his MD and MDSc in Neurosurgery from Tokyo Women's Medical University. He then completed clinical training of both Neurosurgery and Stereotactic Radiosurgery Program at Tokyo Women's Medical University and is board-certified in Neurosurgery in 1997. Dr.Hayashi obtained "Diplome d'AFSA de Neurochirurgie" at Marseille University Timone Hospital in 2000, and experienced 1014 cases with Gamma knife from professor Jean Regis. His previous research involved tissue regeneration after stereotactic radiosurgery with animal models, focusing on elucidating the action mechanism of functional disorders in radiosurgery. Dr Hayashi's current research interests are focused on clinical improvement in both intractable skull base tumors and intractable functional disorders in stereotactic radiosurgery, and development Carbon knife (establishing micro-beam of heavy particle ion) at National Institutes for Quantum Science and Technology, funded through National Government grants. He is active in many societies and is currently a executive member of the Japanese Neurosurgery Society, and was board member of both World Federation of Neurosurgery Society in 2010-2017, and International Stereotactic Radiosurgery Society in 2013-2017, and host 12th International Stereotactic Radiosurgery Society Congress as a chairman in Yokohama, Japan in 2015.

Scientific Achievements:
Editorial review board of "*NEUROSUGERY*" in 2022-2024. 257articles (including 3 editorial books/ Total IF: 327.386) in the international journals and medico/radiosurgical textbooks, 216 invited and symposium presentations including 118 of international conferences. 12000 therapeutic experience with Gamma Knife and ZAP-X, and organized 31 official training courses as an official trainer designated from Elekta KK.

Treatment strategy and clinical results of Gamma Knife stereotactic radiosurgery for high grade pediatric arteriovenous malformation: Utility and the role of Brainlab "Vascular ELEMENTS" software associated with modern Gamma knife system (Icon).

Motohiro Hayashi, Ayako Horiba, and Mieko Oka

Section of Stereotactic Radiosurgery, Department of Neurosurgery, Tokyo Women's Medical University, Japan

The management of high grade pediatric arteriovenous malformation (AVM) with Gamma knife surgery had been very complicated, and complete disappearance without any complication, such as radiation necrosis and delayed cyst formation, was very rare. Therefore, we have been tried to sophisticate the treatment system itself for pediatric cases to cause in favorable clinical results, morphology and complication point of view. In recent cases, we have tried to apply MAC anesthesia, which was no intubation in general anesthesia not to give fear emotion to all infant patients. And then, we installed Gamma knife ICON system (ELEKTA Instruments AB), which has no need for frame application, with association of the dedicated software of "Vascular ELEMNTS" delivered by Brainlab. There is advantage to use this system that the previous angiography could be used with preoperative 3DCTA and MRI/A in the unique platform, and we can contour the target as 4D (3D + flow) before dose planning in Gamma Plan (ELEKTA Instruments AB). In practice, we don't need both angiography with frame application and oral intubation under general anesthesia at the day of Gamma knife surgery. Some pediatric patients didn't need hospitalization. In this lecture presentation, we would like to demonstrate our institutional experience, treatment policy, strategy, and clinical results for pediatric AVM cases, especially high grade AVM.

Symposium

Abstracts

AS1-1

Results of 2-staged Gamma Knife radiosurgery for large brain metastases at Ha Noi, Viet Nam

Nguyen Duc Lien, Nguyen Minh Thuan, Phan Thanh Duong, Pham Hong Phuc

Department of Neurosurgery, National cancer hospital (K hospital), Ha Noi, Viet Nam

Introduction The optimal interfraction intervals for fractionated radiosurgery has yet to be established. Our study aimed to evaluate the preliminary treatment result of 2-staged stereotactic radiosurgery by Gamma Knife for large brain metastases.
Methods Between July 2019 to June 2021, a total of 50 patients underwent 2-staged Gamma Knife radiosurgery for large brain metastases using the ICON unit at K hospital, Hanoi,VietNam. All patients had at least 1 large brain metastasis with the largest diameter > 3cm or the volume >10cc, and theier KPS score was ≥ 60. Two- staged radiosurgery was performed with the median dose of 12 Gy at 50% isodose line, and the time interval between 2 treatments was 2 weeks.
Results The most common primary tumor site was the lung (35/50, 70%), and followed by the breast (16%). Number of metastatic tumors in the brain: 1 foci (44%), 2-5 foci 28/50 patients (56%). The mean tumor volume was 18.13 ± 6.98 cm3at the first treatment, and 13.24 ± 6.56 cm3 at the second treatment (volume reduction 27.24%, p = 0.0001). The local tumor control rate of 50 large brain metastases was 94% at 3 months, 34% complete response, 52% partial response, 8% stable disease. The estimated local control rate was 88% and 76% at 6 months and 12 months, respectively. New brain metastases have not deverloped during 3 months follow up period. Amongs 50 lesions, 6 (12%) show radiation-induced adverse effects (8% Grade 1 and 2 toxicity, 4% Grade 3). The sstimated overall survival rates at 6 and 12 months were 92% ± 4% and 74% ± 6%, respectively.
Conclusions According to our results, we suggest that 2-staged Gamma Knife radiosurgery with a 2 weeks interval can be one of the effective treatment method for large brain metastases.

AS1-2

Neoadjuvant stereotactic radiosurgery for brain metastases: single-fraction and hypofractionation experience

Cristian Udovicich[1, 2], Damien Tange[3], Kendrick Koo[1], Neda Haghighi[1, 4]

[1] Department of Radiation Oncology, Peter MacCallum Cancer Centre, Melbourne, Australia
[2] Sir Peter MacCallum Department of Oncology, The University of Melbourne, Australia
[3] Department of Neurosurgery, Peter MacCallum Cancer Centre, Melbourne, Australia
[4] Icon Cancer Centre, Epworth Hospital, Richmond, Australia

Introduction The standard of care after resection of brain metastases is post-operative stereotactic radiosurgery (PoSRS). However, PoSRS has limitations with high rates of leptomeningeal disease (LMD) ~15-30%. Additionally, there are challenges with potential radionecrosis (RN) and inaccurate target volume delineation. Neoadjuvant SRS (NaSRS) has been proposed as an alternative approach to decrease these potential toxicities. The majority of previous evidence for NaSRS has been single-fraction SRS. The aim of the study was to report outcomes in patients undergoing single-fraction and hypofractionated NaSRS for brain metastases.
Methods Patients undergoing SRS followed by resection of intracranial lesions with a confirmed primary malignancy were included in our retrospective multi-centre case series. Exclusion criteria included previous local treatment to the NaSRS metastasis, current/previous LMD and ECOG≥3. Primary endpoints included LC and LMD. LMD was classified as classical or nodular. Secondary endpoints included RN, distant intracranial control (DC) and overall survival (OS). RN was graded as per CTCAE Version 5.0. LC and RN were calculated on a per-lesion analysis. LMD, DC and OS were calculated on a per-patient analysis. Time-to-event outcomes were estimated using the Kaplan-Meier method.
Results Overall, 41 patients with 44 metastases were eligible. Median follow-up was 10.5 months (IQR 7.4-31.6). The mean age was 62.9 years (range 36-80) and 27 (66%) were ECOG 0-1. The most common primary malignancies included non-small cell lung cancer (39%), melanoma (18%) and breast (14%). Hypofractionated SRS was utilised in 70%. There were two local failures (4.5%) with a 12-month LC rate of 93.9%. Four patients (9.8%) developed LMD, three classical and one nodular. The 12-month LMD rate was 7.8%. The 12-month RN rate was 5.6%, with only one metastasis (2.2%) developing Grade 2 RN. The 12-month DC and OS rate was 55.1% and 60.6%, respectively.
Conclusions We present one of the largest cohorts of patients in which the majority of patients were treated with hypofractionated SRS. We found a high rate of local control comparable to post-operative SRS with low rates of LMD and RN. NaSRS is a promising approach for appropriate patients where surgical resection is a component of local therapy.

AS1-3

Hypofractionated irradiation with Gamma Knife Icon for large metastatic brain tumors

Kazutaka Yatsushiro[1)], Hiroyuki Uchida[2)], Masaki Sato[1)], Ichiro Yamasaki[1)], Toshiaki Otsubo[1)], Takao Horinouchi[3)], Masaomi Ijuin[3)]

[1)] Department of Neurosurgery, Fujimoto General Hospital, Japan
[2)] Department of Neurosurgery, Kagoshima University Hospital, Japan
[3)] Department of Radiology, Fujimoto General Hospital, Japan

Introduction In November 2016, we started hypofractionated irradiation with the Leksell Gamma Knife Icon (ICON) for large metastatic brain tumors. In this paper, we investigated the therapeutic effect and the rate and timing of occurrence of radiation injury.
Methods From December 2016 to June 2021, the subjects consisted of 194 patients (111 men and 83 women) who underwent fractionated irradiation at ICON in our hospital due to large tumor volume and were able to follow up for more than 6 months. Primary cancer was located in the lung in 118 patients, the colorectal in 23, the breast in 18, and other locations in 35. Three irradiation methods were selected for each tumor volume. Survival rate was evaluated using the Kaplan-Meier method, and recurrence rate and rate of radiation injury were evaluated using competing risk analysis.
Results We used 30 Gy / 3 fx, 35 Gy / 5 fx, and 40-42 Gy / 8-10 fx for fractionated irradiation. The number of cases for each division was 26, 110, and 58, and the average tumor volumes were 7.4 cm^3, 11.8 cm^3, and 25.2 cm^3, respectively. The median survival times were 72, 36, and 53 weeks, respectively, with no significant difference. On the other hand, the recurrence rates at 1 year and 2 years were 7.9 / 16.1 %, 5.2 / 6.5 % and 9.5 / 12.1 %, respectively. The incidence of radiation injury requiring medical treatment was 12.2 / 17.0 %, 7.2 / 8.8 %, and 5.5 / 7.7 %. Radiation injury occurred on average 7.7 months after treatment, while recurrence occurred on average 10.1 months after treatment.
Conclusions Hyopofractionated irradiation with ICON was shown to be an effective and safe treatment even for large metastatic brain tumors.

AS1-4

Fractionated radiotherapy for metastatic brain tumors using mask system of Leksell Gamma Knife Icon

Takuya Kawabe , Manabu Sato

Department of Neurosurgery, Rakusai Shimizu Hospital, Japan

Introduction Leksell Gamma Knife Icon enables us to apply new methods of immobilization using mask fixation and the option of fractionated treatment.
Methods We retrospectively analyzed 537 patients (668 times) with brain metastases who underwent fractionated radiotherapies using mask system of Icon between September 25th, 2017 and September 24th, 2022 at Rakusai Shimizu Hospital and for whom radiological and clinical follow-up data were available. If the tumor volume was larger than 5.0 ml, recurrence, or the location was in an eloquent area, we applied a fractionated schedule. The most common origin was lung (310 patients), followed by breast (84), gastro-intestinal tracts (64), kidney (21), and others (78).
Results The reasons for the select of fractionated schedule (including duplication) were large volume (378 times), recurrence (226), and near the eloquent area (218). For large tumors, we selected fractionated schedules as follows; 7.0 Gy x 5Fr (5-10 ml), 4.2(-4.7)Gy x 10Fr (10-20ml), 3.7(-4.2)Gy x 10Fr (20-30ml), 3.2(-4.7)Gy x 10Fr (30ml-). Median survival times after Icon treatment was 28.4 months, with only 4/5/6% of neurological deaths at 12/24/36 months after treatment. Poor local control was 11/25/35% at 6/12/24 months post-treatment. Preservation of neurological function was 89/84/83% at 12/24/36 months post-treatment. Serious complications occurred in only 1/3/5% of patients at 12/24/36 months post-treatment.
Conclusions Although these results are limited to short periods, survival rates, local control rates and qualitative survival rated in patients unsuitable for stereotactic radiosurgery, such as those with large, recurrent, and eloquent site lesions, were within the acceptable ranges.

AS1-5

Interfractional change of tumor volume during fractionated stereotactic radiotherapy using gamma knife for brain metastases

Mariko Kawashima[1)], Atsuya Akabane[1)], Ryuichi Noda[1),2)], Masafumi Segawa[2)], Sho Tsunoda[2)], Tomohiro Inoue[2)]

[1)] Gamma Knife Center, NTT Medical Center Tokyo, Japan
[2)] Department of Neurosurgery, NTT Medical Center Tokyo, Japan

Introduction Fractionated stereotactic radiotherapy (FSRT) using gamma knife is useful for brain metastases. However, several uncertainties derived from fractionation pose issues for maintaining high-level accuracy. This study analyzed interfractional tumor change by performing radiological reassessment at the midterm of FSRT with ≥ 10 fractions, and the significance of replanning was evaluated.
Methods Data of FSRT using gamma knife with ≥ 10 fractions were retrospectively collected. Interfractional volume changes in MRI at the midterm of the irradiation period were analyzed. Radiological changes after FSRT and final outcomes were also investigated.
Results Overall, 114 lesions in 74 treatments from 66 patients were included, with previously irradiated lesions accounting for 46%. The median interval between planning and the interfractional MRI was 7 days. The interfractional change rates of tumor volume ranged from − 48 to + 72%. Significant interfractional enlargement was observed in 16 lesions (14%); evident regression was confirmed in 17 lesions (15%). Predictive factors for interfractional enlargement were small tumor and cystic lesion; high biologically effective dose was associated with regression. After FSRT, most lesions regressed within 6 months despite interfractional change type. The incidences of tumor control and radiation necrosis indicated no differences between interfractionally-regressed lesions and others.
Conclusions This is the first study to evaluate interfractional tumor change in FSRT using gamma knife with ≥ 10 fractions, indicating significant volume changes in 29% of the lesions. These preliminary results suggest that interfractional reassessment of a treatment plan in FSRT with irradiation periods exceeding a week is necessary for more adaptive treatment.

AS1-6

Gamma knife radiosurgery and radiotherapy for brain metastases in non-small cell lung cancer harboring driver gene alterations

Mariko Kawashima[1)], Atsuya Akabane[1)], Ryuichi Noda[1),2)], Masafumi Segawa[2)], Sho Tsunoda[2)], Tomohiro Inoue[2)]

[1)] Gamma Knife Center, NTT Medical Center Tokyo, Japan
[2)] Department of Neurosurgery, NTT Medical Center Tokyo, Japan

Introduction While fractionated gamma knife radiotherapy (F-GK) is effective for large brain metastases (BMs), other potential candidates for F-GK have not been elucidated. Patients with non-small cell lung cancer (NSCLC), especially those harboring driver gene alterations, can now survive longer than before because of advancements in targeted therapy. Consequently, they require long-term safety. This study aimed to analyze the outcomes of single-fraction gamma knife radiosurgery (S-GK) and F-GK for NSCLC-BMs.
Methods Data of consecutive patients who underwent S-GK or F-GK as the first local treatment for NSCLC-BMs between May 2018 and December 2021 at our institution were retrospectively collected. We excluded patients whose gene alteration status was unknown, those who underwent staged radiosurgery, and those with only BMs of < 5 mm diameter. F-GK was generally selected for patients with large tumors, those located in eloquent regions, and those whose border was ambiguously enhanced.
Results Among 97 patients with 282 lesions, 44 patients with 125 lesions harbored the following driver gene alterations: EGFR mutation in 34 patients and ALK or ROS1 rearrangements in 10. S-GK was performed in 63 patients, while F-GK (3–15 in fractions) was performed in 34 patients. The lesions treated with F-GK were slightly but significantly larger than those treated with S-GK ($p = 0.048$). After treatment, the overall survival of patients with driver gene alteration was 97% at 1 year and 88% at 2 years, which was significantly higher than those in patients without it ($p = 0.008$). Higher local control rates were observed in smaller BMs ($p = 0.002$) and lesions with driver gene alterations ($p = 0.036$). Radiation-induced adverse effects (RAEs) appeared more frequently in patients with larger BMs ($p = 0.012$) and those treated with S-GK ($p = 0.036$) in the multivariate analysis; driver gene alteration was not a predictive factor for RAEs.
Conclusions Both S-GK and F-GK achieved high local control for NSCLC-BMs. F-GK could be more suitable in terms of RAE risk, especially for patients with driver gene alteration, and is expected for long survival in the era of the third-generation tyrosine kinase inhibitors.

AS2-1

The role of gamma knife surgery in the treatment of high-grade ruptured cerebral AVMs

Hisae Mori, Taichi Ikedo, Etsuko Yamamoto, Ozaki Saya, Akihiro Niwa, Yuji Kushi, Koji Shimonaga, Eika Hamano, Kiyofumi Yamada, Hirotoshi Imamura, Koji Iihara, Hiroharu Kataoka

Department of Neurosurgery, National Cerebral and Cardiovascular Center Hospital, Japan

Introduction High-grade ruptured arteriovenous malformations (rAVMs) are difficult to treat, even when surgery and embolization are combined. The purpose of this study is to investigate the current state and future challenges of gamma knife radiosurgery (GKRS) in high-grade rAVMs.
Methods From April 2002 to September 2021, treatment method and prognosis were retrospectively examined for all 518 AVMs treated by inpatient exploration, 27 of which were the Spetzler-Martin Grade (S-M) IV, V ruptured and treated.
Results The study included 17 male patients (62.9%) with a mean age of 29.3 ± 18.7 years and a mean follow-up period of 89.9 ± 73.7 months were studied. S-M grade IV was present in 25 patients (92.6%). All patients had IVR combination.9 (75%) of 12 (54.5%) patients treated with the combination of GKRS and IVR were cured. There were 12 occlusions (54.5%), of which 9 were occlusions (75%) All nine instances of rebleeding following therapy were GKRS (p=0.03). Irradiation strategies included dose staging (D; target volume; TV 7.1 ± 3.7cc), volume staging (V; TV 14.2 ± 6.0cc), and irradiation with the bleeding source as the target (T; p=0.03). Posttreatment bleeding in cases D3 and V5 did not differ significantly, and the occlusion rate was 54.5% in case D6, 25% in case V2, and 33.3% in case T1.The incidence of occlusion was comparable between the three groups. mRS0-2 was 60% in the three removed patients and 68% in the fifteen GKRS cases at the last follow-up. At the most recent follow-up, mRS0-2 levels were not significantly different.
Discussion The lesions located on the surface of the brain without involvement of the perforating arteries were cured by a combination of direct surgery and IVR, whereas the majority of the other lesions were treated with GKRS.
In instances treated with combined IVR and GKRS, the occlusion rate is significant, and IVR treatment after GKRS is an alternative. Although bleeding can be lethal, the prevention of rebleeding should take precedence over the risk of delayed radiation injury.
Conclusions Currently, GKRS is the most effective treatment for high-grade rAVMs, and it is important to tailor treatment to individual nidus characteristics.

AS2-2

Change of therapeutic strategies with GKS and other interventional therapies for unruptured brain arteriovenous malformation after the publication of the ARUBA trial

Taichi Ikedo, Hisae Mori, Etsuko Yamamoto, Akihiro Niwa, Saya Ozaki, Yuji Kushi, Koji Shimonaga, Eika Hamano, Kiyofumi Yamada, Hirotoshi Imamura, Koji Iihara, Hiroharu Kataoka

Department of Neurosurgery, National Cerebral and Cardiovascular Center, Japan

Introduction Although the ARUBA trial demonstrated superiority of medical treatment for unruptured brain arteriovenous malformation (bAVM), researchers have criticized its research design and interpretations. We examined whether the publication of the ARUBA trial changed therapeutic strategies and outcomes of treatment for unruptured bAVM with multimodalities including gamma knife surgery (GKS) and microsurgery.
Methods We reviewed 226 consecutive patients with unruptured bAVM admitted to our institute from 2002 to 2022. Patients were divided into pre-ARUBA group (125 patients, before February 2014) and post-ARUBA group (101 patients, after March 2014). Symptomatic stroke or death were evaluated for the primary outcome. Strategic choice including medical treatment or interventional therapies including GKS, microsurgery, embolization was compared between the two groups.
Results 73% of patients had therapeutic interventions in pre-ARUBA group, and 84% in post-ARUBA group ($p = 0.053$). Strategic choice of microsurgery remains unchanged after the publication of ARUBA study (pre vs. post: 16% vs. 10%, $p = 0.24$), whereas SRS slightly increased (57% vs. 74%, $p < 0.01$). Although microsurgery for high grade bAVMs with SM grade of 3−5 decreased from 30% to 10% in post-ARUBA ($p < 0.01$), GKS did not decrease even for high SM grade bAVMs (38% vs. 40%, $p = 0.87$). Rate of stroke or death was higher in patients with medical treatment (medical vs. intervention: 22% vs. 9.7%, $p = 0.022$). The annual incidence of stroke or death decreased by interventional therapies (total: 4.3%/y vs. 1.8%/y, $p = 0.032$, pre: 4.3%/y vs. 1.5%/y, $p = 0.033$, post: 4.0% vs. 2.8%, $p = 0.64$). In interventional therapies, GKS significantly reduced the development of bAVM rupture compared with medical treatment in the long term (4.3% vs. 1.2%, $p < 0.01$, HR = 3.1)
Conclusions Therapeutic intervention rate including GKS did not decrease even after the publication of the ARUBA trial. The superiority of interventional therapies over medical treatment was demonstrated in our single institutional study.

AS2-3

The irradiated brain volume within 12 Gy is a predictor for radiation-induced changes after stereotactic radiosurgery in patients with unruptured cerebral arteriovenous malformations

Huai-Che Yang[1), 2), 3)], Hsiu-Mei Wu[2), 4)], Syu-Jyun Peng[6)], Cheng-Chia Lee[1), 2), 3)], Cheng-Ying Shiau[2), 5)], I-Chun Lai[2), 5)], Wan-Yuo Guo[2), 4)], Chung-Jung Lin[2), 4)], David Hung-Chi Pan[2), 3), 7)], Wen-Yuh Chung[2), 3)]

[1)] Institute of Brain Science, National Yang-Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan
[2)] School of Medicine, National Yang-Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan
[3)] Department of Neurosurgery, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[4)] Department of Radiology, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[5)] Cancer Center, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[6)] Program in Artificial Intelligence in Medicine, College of Medicine, Taipei Medical University, Taiwan
[7)] Department of Neurosurgery, Shuang Ho Hospital, Taipei Medical University, Taipei, Taiwan
[8)] Department of Neurology, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan

Introduction To determine whether the coverage of brain parenchyma within the 12Gy radiosurgical volume (V12) correlates with the development of radiation-induced changes (RICs) in patients with unruptured cerebral arteriovenous malformations (AVM) after undergoing stereotactic radiosurgery (SRS).
Methods This study conducted regular follow-up examinations of 165 patients with unruptured AVMs who had previously undergone SRS. The RICs identified in T2-weighted MRI scans at any time point in the first 3 years after SRS was labeled early RICs. The RICs remain identified in T2-weighted MRI scans at 5-years follow-up brain images was labeled late RICs. Fully automated segmentation was used to analyze the MRI scans from these patients, whereupon the volume and proportion of brain parenchyma within the V12 was calculated. Logistic regression analysis was used to characterize the factors affecting the incidence of early and late RICs of any grade following SRS.
Results The median duration of follow-up was 70 months (range, 36-222). Early RICs were identified in 124 of the 165 patients with the highest grade as followed: Grade 1 (103 patients), Grade 2 (19 patients), and Grade 3 (2 patients). Only 103 patients had more than 5 years follow-up and late RICs were identified in 70 of 103 patients. 17 of 70 patients with late RICs were symptomatic. The median volume and proportion of brain parenchyma within the V12 was 22.4 cm^3 (range, 0.6-63.9) and 58.7% (range, 18.4-76.8). Univariate analysis revealed that AVM volume and the brain volume within the V12 were correlated with the incidence of both early and late RICs after SRS. Multivariable analysis revealed that only the brain volume within the V12 was significantly associated with the incidence of early and late RICs after SRS.
Conclusions In patients with unruptured AVM, the volume of brain parenchyma within the V12 was an important factor associated with the incidence of early and late RICs following SRS. Prior to SRS, meticulous radiosurgical planning to reduce brain parenchyma coverage within the V12 could reduce the risk of complications.

AS2-4

Efficacy of embolization before stereotactic radiosurgery for brain arteriovenous malformations

Saori Kubota[1)], Kyoko Aoyagi[2)], Masaaki Kubota[1)], Yosuke Tajima[1)], Yoshinori Higuchi[1)], Toru Serizawa[3)]

[1)] Department of Neurological Surgery, Chiba University, Japan
[2)] Gamma Knife House, Chiba Cerebral and Cardiovascular Center, Japan
[3)] Tokyo Gamma Unit Center, Tsukiji Neurological Clinic, Japan

Objective This study aims to evaluate the effect of endovascular embolization prior to stereotactic radiosurgery on the outcome of patients with arteriovenous malformations (AVM).
Method A total of 420 patients with AVM treated with single session Gamma Knife radiosurgery (GK) were included in this study. Of these patients, 261 were treated with GK only, and 159 were treated with embolization followed by GK (GK+E). Comparing clinical characteristics between patients treated with GK only and GK+E, these groups were matched in a 1:1 ratio using propensity score matching to eliminate differences in basic characteristics. The primary outcome was to compare the nidus obliteration rates between the GK only and GK+E groups. The secondary outcomes were the comparison of cumulative hemorrhage rates and the incidence of delayed radiation injury after GK between these groups.
Results In the unmatched cohorts, the AVMs in the GK+E group had a larger nidus volume, higher Spetzler-Martin Grade, and lower peripheral prescription dose than those in the GK-only group. In the matched cohort of 136 patients in each group, the nidus obliteration rate 5 years after GK was 67.9% in GK only group and 75.4% in GK+E group (p=0.54). There was no significant difference in the cumulative delayed radiation injury rate between the two groups (GK only 5.2%, GK+E 7.3%, 10 years after GK, p=0.20), whereas GK+E group had a lower cumulative incidence of hemorrhage compared to GK only group (GK only 10.1%, GK+E 3.8%, 10 years after GK, p=0.04).
Conclusions Endovascular embolization prior to GK did not affect nidus obliteration rates or the incidence of delayed radiation injury, while the cumulative incidence of hemorrhage tended to be lower in GK+E group.

AS2-5

Against controversy: Long-term outcomes of gamma knife radiosurgery for non-hemorrhagic large AVM based on the over 1,000 cases in 30 years at our institution

Yuki Shinya[1)], Hirotaka Hasegawa[1)], Motoyuki Umekawa[1)], Satoshi Koizumi[1)], Atsuto Katano[2)], Yuichi Suzuki[2)], and Nobuhito Saito[1)]

[1)] Department of Neurosurgery, The University of Tokyo Hospital, Japan
[2)] Department of Radiology, The University of Tokyo Hospital, Japan

Introduction Treatment strategies for AVMs have changed dramatically since ARUBA study. In particular, the intervention for large unruptured AVMs is controversial. We are committed to single-session GK whenever possible, and our policy is to perform single GK for a nidus volume of up to 20 mL. In this study, we analyzed 1070 GK treatments for AVMs over 32 years at our institution, aiming to report the current status and future prospects of GK for large unruptured AVMs.
Methods We retrospectively analyzed 1070 cases of GK for AVMs at our hospital from 1990 to 2022. The endpoints were AVM obliteration, post-GK hemorrhage, adverse events, and disease-specific survival (DSS). They were classified into three groups by nidus volume: small (-5 mL), medium (5-10 mL), and large (>10 mL). The outcomes of large AVMs were compared and validated with those of small and medium-sized lesions.
Results Cumulative AVM obliteration rates in the entire cohort were 80% at 5 years and 90% at 10 years; post-GK hemorrhage rates were 3.4% at 5 years, 4.5% at 10 years, and 7.0% at 20 years; and DSS were 99% at 10 years, 98% at 15 years, 92% at 20 years. For unruptured AVMs, the prescription dose was significantly lower in the order of small, medium, and large groups (mean 20.3 Gy vs. 19.9 Gy vs. 18.7 Gy, $P = 0.001$). Previous embolization tended to be less common in the small group (7.6% vs. 15.6% vs. 12.3%, $P = 0.081$). There was a trend toward longer latency period for AVM obliteration in the unruptured large AVM group (52% at 3 years, 81% at 5 years, and 93% at 10 years in the small group vs. 42% at 3 years, 87% at 5 years, and 93% at 10 years in the medium group vs. 30% at 3 years, 71% at 5 years, and 96 % at 10 years in the large group, $P = 0.052$). The unruptured medium AVM group showed a trend toward higher post-GK hemorrhage rates 12 years after GK (2.2% at 5 years and 3.9% at 10-15 years in the small group vs. 7.4% at 5-10 years and 13.0% at 15 years in the medium group vs. 6.3% at 5-15 years in the large group, $P = 0.089$). The cumulative neurological preservation rates were significantly worse in the unruptured large AVM group (99% at 5 years, and 96% at 10-15 years in the small group vs. 94% at 5 years, 92% at 10 years, and 86% at 15 years in the medium group vs. 89% at 5-10 years and 84% and 15 years in the large group, $P = 0.005$).
Conclusions Although the intervention for unruptured large AVMs is controversial, our long-term outcomes of the single-session GK for those with over 10mL nidus volume were acceptable. Abundant treatment data, clarification of long-term results, and the addition of new technologies could continue to optimize treatment.

AS3-1

Hearing preservation after planned partial resection followed by gamma knife radiosurgery for large vestibular schwannomas

Yoshiyasu Iwai[1)], Kazuhiro Yamanaka[2)], Shizuma Tonomoto[1)], Atsushi Furuya[1)], Masahiro Yata[1)], Kazuhiro Nomoto[1)], Aichi Ikema[1)], Mayo Hamada[1)], Masaaki Furube[1)], Yuuki Mukai[1)], Yoshinori Nagao[1)], Kou Matsuda[1)], Miyahito Kugai[1)], Yoshihiro Minamida[1)], Keishou Yamazato[1)], Masahiko Kitano[1)], Yoshiko Tominaga[1)], Shinsuke Tominaga[1)]

[1)] Department of Neurosurgery, Tominaga Hospital, Japan
[2)] Department of Neurosurgery, Osaka City General Hospital, Japan

Introduction We have been performing planned partial surgical resections followed by gamma knife radiosurgery (GKS) for large vestibular schwannomas (VSs), and we could achieve the hearing preservation and/or hearing improvement after this strategy.
Methods From January 2000 to September 2021, we treated 50 patients with large unilateral VSs with planned partial tumor removal followed by GKS. At the time of surgical resection, the internal auditory canal is not opened and part of the ventral tumor is left in order to preserve the functions of the facial and cochlear nerves. GKS is performed at a marginal dose of 12 Gy, 3 months after surgery when the residual tumor has a shape suitable for GKS. In order to preserve hearing function, dose planning is performed so that the average cochlear exposure dose is 4 Gy or less. The median maximum diameter of the tumors was 32 mm. The median tumor volume at GKS was 2.7 cm^3 and the median prescribed dose was 12 Gy. The median follow-up period was 74 months.
Results At the final follow-up, facial nerve preservation (HB grade I - II) was achieved in 47 patients (94%; HB grade I: 92%, II: 2%). Among the patients with preoperative serviceable hearing (PTA $\leqq$ 50 dB; 16 patients), 13 patients (81%) can maintain serviceable hearing postoperatively. At the last follow-up, 7 of preoperative serviceable hearing preservation (44%) maintained serviceable hearing. Among 34 patients without serviceable hearing, three patients (9%) improved to serviceable hearing postoperatively. Five-, 10-year and 15-year tumor growth control without additional treatment occurred in 86% of patients. Four patients (8.5%) required salvage surgery.
Conclusions Planned partial removal of large VSs followed by GKS achieved a high rate of facial nerve and hearing preservation. Furthermore, some patients with severe hearing loss before treatment have the chance of hearing improvement, even those with large VSs.

AS3-2

Gamma knife radiosurgery for vestibular schwannomas: Looking back 30 years of our experience

Hidefumi Jokura[1), 2)], Jun Kawagishi[1), 2)], Ryutaro Suzuki[1), 2)], Kou Takahashi[1)]

[1)] Jiro Suzuki Memorial Gamma House, Furukawa Seiryo hospital, Japan
[2)] Department of Neurosurgery, Tohoku University School of Medicine, Japan

Introduction Gamma knife radiosurgery (GKRS) has established a role as a primary treatment modality for small to medium sized vestibular schwannomas (VSs). Nevertheless, considering that the tumor is benign and more and more young patients are treated, information of long-term follow up is still insufficient. We will summarize our 30-year-experience of GKRS for VSs.
Methods Materials are 626 cases of unilateral VSs treated between November 1991 and December 2020.
Results The median age was 60 years (17-84 years) and 41% of the patients were male. The median tumor volume was 2.7cm^3 (0.12 – 20.2 cm^3) and the median marginal dose was 12.0 Gy (range, 10–17Gy). The median follow-up period was 83 months (range, 0.4–363.0 months). Tumor control (not requiring salvage surgery) rate at 5, 10, and 15 yeas were 94.0%, 91.6%, and 88.4%, respectively. Tumor control of volume <1 cm^3, 1≤<4 cm^3, 4≤<10 cm^3 and 10≤<15 cm^3 group at 15 years were 98.9%, 93.8%, 81.1% and 77.2%, respectively. Transient expansion of solid and/or cystic part of tumors persisted much longer than 3-4 years in some cases. Four salvage surgery were needed between 10 and 20 years and 2 after 20 years. Five of 6 cases showed good regression of tumor for more than 10 years before regrowth were detected. Viable schwannoma was confirmed histologically in every case. Two cases of malignant transformation were confirmed at 101 and 46 months (0.3%). Other rare but serious complication related treatment include subarachnoid hemorrhage due to aneurysm formation and cerebral infarction due to occlusion of AICA.
Conclusions GKRS provide good long-term tumor control with few complications in most of the cases. Need for salvage surgery after GKRS should not be decided by volume and timing after GKRS alone. Prediction of the fate of the transient expansion is almost impossible. Therefore, if a patient remains asymptomatic or within acceptable aggravation of symptoms, continuing follow-up is strongly recommended. More than 10 years of good control after GKRS do not necessarily means eradication of viable schwannoma cells and do not warrant life-long control.

AS3-3

Stereotactic radiosurgery for post-operative residual vestibular schwannomas: immediate irradiation versus at time of confirmed growth

Shinya Watanabe[1), 2)], Masaaki Yamamoto[3)], Hitoshi Aiyama[4)], Narushi Sugii[5)], Hidehiro Koduki[5)], Masahide Matsuda[2)], Hiroyoshi Akutsu[6)], Eiichi Ishikawa[2)]

[1)] Department of Neurosurgery, Mito Kyodo General Hospital, Tsukuba University Hospital Mito Area Medical Education Center, Japan
[2)] Department of Neurosurgery, Faculty of Medicine, University of Tsukuba, Japan
[3)] Department of Neurosurgery, Southern Tohoku Hospital, Japan
[4)] Department of Neurosurgery, Tsukuba Memorial Hospital, Japan
[5)] Department of Neurosurgery, University of Tsukuba Hospital, Japan
[6)] Department of Neurologic Surgery, Dokkyo Medical University, Japan

Introduction Occasionally, intentional partial removal of a vestibular schwannoma (VS) is performed. In such cases, the timing of stereotactic radiosurgery (SRS) for the residual tumor is potentially problematic, i.e., is immediate irradiation or a "wait and see" approach better? Little information is available allowing us to address this question.
We compared long-term outcomes of SRS for post-operative residual VS between two treatment strategies, immediate (group-B) and delayed (group-A, at time of confirmed enlargement) irradiation.
Methods Among 402 patients receiving Gamma Knife SRS for VSs between June 1991 and March 2015, 127 had undergone surgery for VSs. We excluded 21 patients (13 lost-to-follow-up and 9 lacking pre-SRS surgical information). Thus, 106, 46 group-A and 60 group-B, patients were studied. Respective median tumor volumes were 2.6 cc and 2.8 cc. The median prescribed dose was 12.0 Gy in both groups.
Results Median follow-up was 73 (range: 6–164) months in group-A and 63 (range: 3–192) months in group-B. Tumor volume control was obtained in 34 of the 44 (72%) group-A and 46 of the 55 (84%) group-B (p=0.4519) patients. A further procedure was required in four (9%)/group-A and four (7%) group-B (p=0.7220) patients. Post-operative cumulative clinical control rates for the two SRS strategies were 96%/ 92% at the 60th/120th post-SRS month in group-A and 95%/91% in group-B (p=0.8813) patients. After SRS, among the 45 group-A patients, two (4%) experienced facial pain while none developed facial nerve paresis. Among the 60 group-B patients, facial pain occurred in three (5%) and facial palsy in one. There were no significant differences in the incidences of these post-SRS complications between the two groups (both p=1.0000).
Conclusions Neither of these post-operative SRS strategies was superior or inferior to the other. SRS can reasonably be postponed until the time of confirmed enlargement of the residual tumor.

AS3-4

Long term results of Gamma knife micro-radiosurgery for acoustic tumors in Neurofibromatosis type 2 patients: treatment policy, strategy, and clinical results for maintenance of serviceable hearing

Motohiro Hayashi, Ayako Horiba, and Mieko Oka

Section of Stereotactic Radiosurgery, Department of Neurosurgery, Tokyo Women's Medical University, Japan

Introduction Gamma Knife surgery (GKS) should be considered a standard treatment option for small and medium-sized acoustic tumors with favor clinical results. However, the management of the cases with Neurofibromatosis type 2 (NF2) was hard, and the treatment indication of GKS for bilateral acoustic tumors had still discussed. In recent 20 years, we had unique treatment policy for acoustic tumors in NF2 patients that the side of serviceable hearing should be priority target to try to prevent hearing loss due to tumor progression.
Methods A total of 20 patients with 32 acoustic tumors underwent GKS. Among of them, we investigated hearing function in the 16 cases with serviceable hearing (Gardner & Robertson: 12 class 1 & 4 class 2), and their Koos classification: 7 stage I, 4 stage II, 2 stage III, and 3 stage IV. In all patients, before starting to create the dose planning on Gamma Plan, we perfectly visualized small bony structures; cochlea, horizontal bar, Bill's bar, facial notch, superior and inferior vestibular groove, and then tried to assign three nerve divisions of acoustic nerve as tumor origin; superior vestibular, inferior vestibular, and cochlea nerve in each. We should grasp the anatomical relationship based on 4 dimensional tumor pathology. They were treated with the use of high-resolution magnetic resonance imaging fused with bone image; creation of the highly precise conformal and selective multi-isocenter dose planning with small collimators, carefully sparing adjacent cranial nerves of any excessive irradiation, and created a wide 80 % isodose area within the tumor while applying an adequate marginal dose (mean 11.9 Gy) at the 50 % isodose line.
Results Among 13 patients who were followed 74.4 months in average (24-195 months) after treatment, the tumor control and shrinkage rates were 93.8 % and 43.8%, respectively. Preservation of serviceable hearing reached in 81.3 %, especially 91.7% in G&R class 1 cases. There was no major morbidity including facial nerve function.
Conclusions Due to contemporary technological and methodological achievements based on microanatomy, GKS provided most of patients with NF2 maintenance of serviceable hearing. This clinical results predicts that GKS can prevent hearing malfunction at the earliesst stage of less axon damage due to nerve sheath tumor progression, and can recommend that the patient who has solitary acoustic tumor with serviceable hearing should be treated by GKS as early as possible to maintain hearing preservation.

AS3-5

Long term effects of Gamma Knife radiosurgery for skull base meningiomas

Maheep Singh Gaur

Gamma Knife Centre, Vimhans Hospital, India

Introduction Stereotactic radiosurgery is now a treatment option for skull base benign meningiomas. Surgery of these lesions has been complicated and high recurrance is seen in residual tumors
Methods We have treated 1190 benign meningiomas between April 1998 and April 2021 of which 856 were skull base meningiomas. Total 482 were treated 10 years after treatment and 458 were analyzed. 51% tumors were in CP angle and cavernous sinus region.
Results Total 482 were treated 10 years after treatment and 458 were analyzed. 51% tumors were in CP angle and cavernous sinus region. Local tumor control rates were 86% and 90% at 10 years and 15 years, respectively. Tumors with volume <15cc and average prescribed dose 12.6 Gy dose at first 5 year showed 99% tumor control. Tumors >15cc average prescription 11.8Gy at first 5year showed control rate of 97%. In first 10 years amd later over all control & reduction was 96 & 90% respectively. New Cranial nerve deficits about 5% among cavernous sinus region tumors. 45 cases had undesired results, second treatment on 51% of undesired result treated for extension of original and 20% on treated tumor. 13 tumors increase but remained untreated. Unusual high edema seen in parietal parasaggital region tumors.
Conclusions Stereotactic radiosurgery was effective treatment method for local control of skull base meningiomas, especially for small or postoperative residual tumors. Correct combination of microsurgery and radiosurgery leads to excellent local control.

AS3-6

Long-term outcomes of stereotactic radiosurgery for skull base tumors involving the cavernous sinus

Motoyuki Umekawa[1)], Yuki Shinya[1)], Hirotaka Hasegawa[1)], Atsuto Katano[2)], Nobuhito Saito[1)]

[1)] Department of Neurosurgery, The University of Tokyo Hospital, Japan
[2)] Department of Radiology, The University of Tokyo Hospital, Japan

Introduction Stereotactic radiosurgery (SRS) is an effective and less invasive therapeutic option for cavernous sinus (CS) tumors. However, its long-term effectiveness efficacy and neurological outcomes remain to be demonstrated. We aimed to examine the long-term outcomes of SRS for CS tumors.
Methods Overall,127 patients with benign CS tumors, including 91 with meningioma, 14 with trigeminal schwannoma (TS), 14 with non-functioning pituitary adenoma (PA), and 8 with cavernous hemangioma (CH), treated with SRS at our institution from 1990 to 2018, were included. Tumor control and functional preservation/recovery were evaluated in detail.
Results The mean post-SRS follow-up period was 102 months. The progression-free survivals (PFSs) were 97% at 5 years, 90% at 10 years, and 88% at 15 years for the entire cohort; 96% at 5 years and 87% at 10 years for meningiomas; and 100% at 10 years for the other tumors. No significant difference was observed among the tumor types (log-rank test; meningioma vs. TS, $p = 0.232$, meningioma vs. PA, $p = 0.297$, meningioma vs. CH, $p = 0.277$). Improvement in cranial nerve (CN) function was observed in 35 (27%) patients. TSs tended to show CN improvements more often than meningiomas did (total improvements, 62% vs. 23%; $p = 0.004$, eye movementfunction,100% vs. 20%; $p = 0.002$). Deterioration or new development of CN deficits was observed in 11 (9%) patients.
Conclusions SRS provides durable tumor control and contributes to sufficient preservation of CN function.

AS3-7

Long-term risks of hemorrhage and adverse radiation effects of stereotactic radiosurgery for brain arteriovenous malformations

Toshinori Hasegawa, Takenori Kato

Department of Neurosurgery, Komaki City Hospital, Japan

Introduction The information about long-term risks of hemorrhage and late adverse radiation effects (AREs) after stereotactic radiosurgery for brain arteriovenous malformations (AVMs) is lacking. This study investigated the annual hemorrhage rates, nidus obliteration rates, late ARE rates, and their associating factors in AVM patients treated with gamma knife surgery (GKS).
Methods We examined 1327 AVM patients treated with GKS. The Spetzler-Martin grade was I in 329 patients (25%), II in 423 (32%), III in 479 (37%), and IV/V in 96 (7%). The median treatment volume was 2.5 cm^3, and the median marginal dose was 20 Gy.
Results The median follow-up period was 57 months. The five- and 10-year nidus obliteration rates were 64% and 83%, respectively. Smaller treatment volume ($p < 0.001$), Spetzler-Martin grades I – III ($p = 0.002$), and no pre-GKS embolization ($p = 0.003$) significantly associated with nidus obliteration. The five- and 10-year cumulative hemorrhage rates were 7% and 10%, respectively. Larger treatment volume significantly associated with AVM rupture ($p = 0.001$). The annual hemorrhage rate was 1.6% for the first five years post-GKS, which decreased to 0.5% thereafter. During the follow-up period, 42 symptomatic cyst formations/chronic encapsulated hematomas (CFs/CEHs, 3%) and three radiation-induced tumors (RITs, 0.2%) were observed. The 10- and 15-year cumulative ARE rates were 4.2% and 10.6%, respectively. Larger treatment volume ($p = 0.001$), the use of more isocenters ($P = 0.01$), and women ($p = 0.02$) significantly associated with the development of late AREs.
Conclusions GKS is associated with reduced hemorrhage risk and high nidus obliteration rates in AVM patients. The incidence of late AREs tended to increase over time. The most common ARE was CF/CEH, which can be safely removed; however, careful attention should be paid to the long-term development of fatal RITs.

AS3-8

Multimodal treatment for ruptured arteriovenous malformations at our institution with three modalities

Akihiro Niwa, Hisae Mori, Taichi Ikedo, Etsuko Yamamoto, Ozaki Saya, Yuji Kushi, Koji Shimonaga, Eika Hamano, Kiyofumi Yamada, Hirotoshi Imamura, Koji Iihara, Hiroharu Kataoka

Department of Neurosurgery, National Cerebral and Cardiovascular Center Hospital, Japan

Introduction Ruptured brain arteriovenous malformations (AVMs) have an increased risk of rebleeding within one year. Our institution aims for curative treatment with multimodalities, including direct surgery, interventional radiology (IVR), and gamma knife radiosurgery (GKS). We reviewed therapeutic strategies and outcomes of ruptured AVMs at our institution.

Methods Of the AVMs treated at our institution from April 2002 to September 2022, 183 AVMs with bleeding within one year were included in this study. We retrospectively reviewed their treatments and outcomes with medical records. Ruptured AVMs initially treated with IVRs or direct surgeries at other hospitals were excluded. As a basic protocol for ruptured AVMs, direct surgery was the first choice, except for eloquent areas and deep lesions treated with GKS.

Results 97 AVMs (53%) were Spetzler-Martin (SM) grade 1 − 2, and follow-up periods were 73 ± 62 months. Direct surgery was performed in 82 AVMs (45%) and GKS in 89 AVMs (49%). IVR was combined with direct surgery in 46 AVMs (25%) and GKS in 13 AVMs (7%), respectively. Direct surgery was significantly more common in Grades 1 − 2 (direct surgery, 63%; GKS, 34%, $p<0.01$), and GKS was more common in Grades 3 − 5 (direct surgery, 24%; GKS,66%, $p<0.01$). 17 AVMs (9.3%) had rebleeding during follow-up (15 AVMs after GKS and 2 patients with medical therapy only). Durations between the primary treatment and rebleeding was 22 ± 23 months. Final modified Rankin scale (mRS) 0 − 2 was more common in AVMs with the interventional therapies (interventional therapies, 147 AVMs, 86%; medical treatment only, 3 AVMs, 25%, $p<0.01$), whereas worsening to final mRS 3 − 6 was fewer (interventional therapies, 22 AVMs, 13%; medical treatment only, 8 patients, 67%, $p<0.01$). The obliteration rate was 95.1% in the direct surgery and 60.3% in AVMs followed more than three years.

Conclusions The development of rebleeding in patients with ruptured AVMs exacerbate their life and functional prognoses. Aggressive therapeutic intervention with multimodalities aiming for high embolization rate can potentially prevent rebleeding and achieve a good functional prognosis.

General Session

Abstracts

AG1-1

Long-term outcomes of Gamma Knife radiosurgery for central neurocytoma

Hyun Joo Park[1)], Jin Wook Kim[2)], Hyun-Tai Chung[2)], Dong Gyu Kim[2)], Sun Ha Paek[2)]

[1)] Department of Neurosurgery, Seoul national University College of Medicine, Seoul National University Bundang Hospital, Seongnam, Republic of Korea
[2)] Department of Neurosurgery, Seoul National University Hospital, Seoul National University College of Medicine, Seoul, South Korea

Introduction Central neurocytomas (CNs) are rare, benign WHO grade II tumors with the majority found in the intraventricular location. We analyzed the long-term results of primary and adjuvant GKRS for CNs.
Methods We performed a retrospective analysis on patients diagnosed with CNs and treated with either primary or adjuvant GKRS from 1998 to 2017 to ensure a follow-up period greater than 5 years. Recurrences were defined as greater than 20% volume increase compared with the previous MR images. Tumor volumes were measured manually using the volumetric method. Outcomes such as progression-free survival, local control rate, residual tumor size, functional status, complications and mortality were evaluated. Tumor volume ratios were calculated as the ratio of follow up tumor volume to initial tumor volume and plotted against time to extrapolate the annual volume change rate.
Results A total of forty-seven patients were enrolled in this study between 1998 and 2017. The mean age was 34.2 years (range 11-62). Male to female ratio was 27:20. 29 patients (61.7%) were treated with primary GKRS 18 patients (38.3) underwent adjuvant GKRS following surgical resection. The mean clinical and radiological follow-up in months was 127.8. The most common presenting symptoms were headache, nausea or vomiting seen in 23 patients (48.9%). Mean GKRS dose was 15.57 (range 6-20Gy). Local tumor control was achieved in thirty-six patients (76.6%) and eleven patients (23.4%) experienced recurrence. 8 patients had in-field recurrence (17.0%) and 3 had out-of-field recurrences (6.4%). Primary GKRS group had greater local tumor control rate compared with the adjuvant GKRS group (86.2 vs. 61.1, $p = 0.048$).
Conclusions Gamma knife radiosurgery is a safe and effective option as a primary and adjuvant treatment for CN.

AG1-2

Central neurocytoma with hemorrhage during Gamma Knife surgery: Case reports and review of the literature

Ji-Eyon Kwon, Hyun Joo Park, So Young Ji, Chae-Yong Kim, Jung Ho Han

Department of Neurosurgery, Seoul National University College of Medicine, Seoul National University Bundang Hospital, Seongnam, Korea

Introduction We evaluated 19 central neurocytomas (CN) at Seoul National University Bundang Hospital that underwent Gammaknife surgery (GKS) between 2009 and 2021. We reviewed 6 cases of neurocytoma with intraventricular hemorrhage (IVH), which is uncommon in central neurocytoma. CN is a highly vascularized and well-circumscribed tumor located in lateral ventricle; usually arise from the neuronal cells of septum pallucidum, fornix, or subependymal plate of lateral or third ventricle. Conventional treatment of CN is complete resection of tumor, usually leading to cure and long-term survival.
Methods We divided the groups of CN into primary and secondary applications of GKS; ten patients underwent GKS at the beginning, whereas nine patients received GKS following craniotomy and tumor excision. The patients consisted of 12 males and 7 females with intraventricular lesions. The median age was 37.6 years (range: 21-64) and the median tumor volume at GKS was 7.2 ± 8.7cc (0.31-38.67). Initial tumor volume was 24.0 ± 25.9cc (2.48-79.11) and marginal dose (Gy) was 15.8 ± 2.5 (13-24). Progression free survival [PFS](month) was 46.3 ± 37.8 (5.47-126.7) and the recurrence ratio was 21% with the average PFS was 27.7month.
Results Six intraventricular hemorrhages (IVH) occurred; three patients before initial GKS and the other three patients after GKS. Due to the fact that only one of these patients underwent a tumor biopsy prior to GKS, we were unable to investigate the immunohistochemical backgrounds of IVH but may presume neuroradiological differences based on MR images. Six cases exhibited honeycomb-like morphology with multiseptated lobules, and their initial mean tumor volume was 21.1cc. Only one patient underwent GKS after surgery.
Conclusions Incidence of CNs with bleeding has been underestimated, previously misdiagnosed as oligodendrogliomas or cavernous malformations. Thus, when intraventricular mass with IVH is found, it is recommended to perform a tumor biopsy with suspicion of the possibility of CN. The specific etiology of CN bleeding is unknown; however, it may be due to increased vascularity and hemodynamic stress resulting from arteriovenous shunting, venous obstruction by tumor encasement, and weak tumor arteries. And it is also related with etiologic variables such as cardiovascular disease, thrombocytopenia, and in our study, a patient who gave birth 3 months before to IVH.

AG1-3

Stereotactic radiosurgery for orbital cavernous hemangiomas: a single-center experience over a 22-year period

You-Cong Chen[1), 2)], Chieh-Chih Tsai[2), 3)], Shih-Jen Chen[2), 3)], Hsiu-Mei Wu[2), 4)], Huai-Che Yang[1), 2)], Ching-Jen Chen[6)], Yong-Sin Hu[2), 4)], Chung-Jung Lin[1), 4)], Wan-Yuo Guo[2), 4)], David Hung-Chi Pan[1), 7)], Wen-Yuh Chung[1), 2)], Cheng-Chia Lee[1), 2), 5)]

[1)] Department of Neurosurgery, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[2)] School of Medicine, National Yang Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan
[3)] Department of Ophthalmology, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[4)] Department of Radiology, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[5)] Brain Research Center, National Yang Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan
[6)] Department of Neurological Surgery, University of Virginia Health System, Charlottesville, Virginia, USA
[7)] Department of Neurosurgery, Shuang Ho Hospital, Taipei Medical University, Taipei, Taiwan

Introduction Orbital cavernous hemangioma (OCH) is a common orbital lesion in Asian adults. Surgery is the most common treatment, but severe complications such as major bleeding and injury to surrounding neurovascular structures are not infrequent. Among the stereotactic radiosurgery modalities, Gamma Knife radiosurgery (GKRS) has been known for its precise delivery of high-dose radiation to targets within the skull and orbit, but the safety and clinical effectiveness of single-session GKRS treatment for OCHs remain unknown.
Methods Patients who presented with an OCH between September 1999 and May 2022 and were treated with single-session GKRS were included in this single-center cohort study.
Results There were 23 patients (7 males and 16 females) in this study. The median margin dose was 12 Gy (range 11–13 Gy). The median clinical and radiological follow-ups were 45 months (range 5–190 months) and 45 months (range 6–190 months), respectively. Nine (69.2%) of 13 patients with visual acuity impairment had improvement in best corrected visual acuity. Of the 8 patients with visual field defects, 5 patients (62.5%) had complete resolution. Tumor regression was observed in 22 patients (95.7%). The mean relative reduction in tumor volume was 82.6% ± 23.7%. The relative reductions in tumor volume were 33%, 49%, 72%, 84%, and 89% at 6, 12, 24, 36, and 48 months, respectively. Adverse effects of radiation were not observed.
Conclusions GKRS appears to be safe and efficacious for treating OCHs over long-term follow-up. The treatment is associated with a high rate of regression in OCHs and remarkable improvement in both visual acuity and visual field deficits.

AG1-4

Reasonable timing to treat vestibular schwannomas with gamma knife surgery: serial observation of untreated small tumors and remnants after surgery

Yoshinori Higuchi[1)], Kyoko Aoyagi[2)], Toru Serizawa[3)], Shigeki Nakano[1)], Shinichi Origuchi[1)], Kentaro Horiguchi[1)], Yasuo Iwadate[1)]

[1)] Department of Neurological Surgery, Chiba University Graduate School of Medicine, Japan
[2)] Department of Neurosurgery, Chiba Cerebral and Cardiovascular Center, Japan
[3)] Tokyo Gamma Unit Center, Tsukiji Neurological Clinic, Japan

Introduction Although gamma knife surgery (GKS) has been an established treatment option for vestibular schwannomas (VSs), there is no consensus regarding the treatment timing and the indication for postoperative residual tumor. In this study, tumor growth was analyzed by measuring the volume of untreated small VSs and postoperative residual tumors. The GKS intervention timing for VSs was discussed.
Methods From a VSs database collected at our hospital since 2010, 53 untreated VSs (Koos grade 1–2) and 44 patients with residual tumors <1 mL after surgical resection were included. Tumor growth was measured by volumetry on MRI images and a >20% difference was defined as a change in tumor volume. The Kaplan–Meier method was used to analyze the risk factors for tumor growth in untreated tumors and residual tumor growth frequency after surgery.
Results Untreated small VSs demonstrated tumor growth 61.2% at 5 years. Cerebellopontine angle (CPA) extension and sway velocity (SV) with eyes open of posturography were related to tumor growth. The tumor growth-free survival of patients with CPA extension and intracanalicular tumor at 2 years were 37.3% and 76.4%, respectively. Tumor growth free survival of patients with high and low SV at 2 years was 30.8% and 68.9%, respectively. The Cox hazard model demonstrated a significant risk for future tumor growth at high SV. Postoperative residual tumors <1 mL demonstrated 30% tumor growth at 5 years. Postoperative residual tumors grew significantly less than untreated VSs matched by tumor volume. The tumor volume was reduced in 9% of patients with residual tumors.
Conclusions In untreated VSs, the tumor growth risks were tumor size and tumors with balance abnormalities. Patients with disequilibrium should be under regular follow-up MRI to detect tumor growth. Early intervention might be appropriate for these patients. On the other hand, postoperative small residual tumors grew less frequently than those with natural history and in some cases, shrunk, suggesting that follow-up is appropriate. However regular MRI follow-up is also mandatory.

AG1-5

Gamma Knife radiosurgery treatment results for older (age of ≥75) patients with vestibular schwannoma

Kyoko Aoyagi[1], Toru Serizawa[2], Yoshinori Higuchi[3], Yasuo Iwadate[3]

[1] Gamma Knife House, Chiba Cerebral and Cardiovascular Center, Japan
[2] Tokyo Gamma Unit Center, Tsukiji Neurological Clinic, Japan
[3] Department of Neurological Surgery, Chiba University, Japan

Objective This study aims to compare the results of Gamma Knife Radiosurgery (GKS) for vestibular schwannoma (VS) in older patients aged 75 years or older with those of patients younger than 75 years old.
Methods A total of 723 consecutive patients with unilateral VS who underwent GKS at two institutions over 23 years were included in this study. We analyzed tumor control, overall survival, transient expansion, hydrocephalus, and facial nerve dysfunction by comparing 80 patients in the older group and 643 patients in the younger group.
Results The older group had more women, larger tumor volumes, and lower prescribed doses. The median overall survival time after GKS was significantly shorter in the older group. (10-year survival rate, 69.4% vs. 89.4%, $p<0.0001$) Cumulative 5- and 10- year incidence of tumor control failure tended to be higher in the older group (7.2% and 9.5%, respectively) than in the younger group (3.8% and 5.9%, respectively, $p=0.06$). The incidence of hydrocephalus was significantly higher in the older group compared to the younger group (16.4% vs. 5.0% at 5 years, $p=0.0001$). There were no significant differences in duration of transient expansion or incidence of facial nerve dysfunction.
Conclusions The indication of GKS should be made carefully for VS patients aged ≥75, since older patients have a shorter life expectancy, relatively poor tumor control, and higher incidence of hydrocephalus.

AG1-6

Long-lasting transient volume expansion of sporadic vestibular schwannomas after stereotactic radiosurgery: Is it tumor progression?

So Young Ji[1], Hyun Joo Park[1], Ji-Eyon Kwon[1], Kihwan Hwang[1, 2], Chae-Yong Kim[1, 2], Jung Ho Han[1, 2]

[1] Department of Neurosurgery, Seoul National University Bundang Hospital, Gyeonggi-do, S. Korea
[2] Department of Neurosurgery, Seoul National University College of Medicine, S. Korea
[3] Department of Neurosurgery, Gyeongsang National University Hospital, Gyengsangnam-do, S. Korea.

Introduction Transient volume expansion (TVE) of vestibular schwannomas (VSs) is a well-known phenomenon, and it subsequently regresses usually within the first two years after stereotactic radiosurgery (SRS). In this study, we analyzed how much TVE occurs and hot it changes after SRS for sporadic VSs.
Methods We performed a retrospective study of patients with VS treated with SRS during 2009–2018. One hundred eighty-eight patients had at least 24 months of clinical and radiographic follow-up and were included. Volume expansion was defined as a volume increase at any time with a loss of central contrast enhancement after SRS.
Results The mean tumor volume at SRS was 2.7 cm^3 (range 0.01–20.7 cm^3). The mean marginal dose to the tumor was 12.4 Gy (range 6.0–15.0 Gy). The mean follow-up period was 78.7 (28.0-148.0) months. The overall tumor control rate was 92.0 %. After SRS, 155 (82.4%) of patients demonstrated volume expansion. The median time of volume expansion was 6 (2.0-37.0) months after SRS. In 105 (67.7%) among patients with post-radiosurgery tumor volume expansion, the tumor subsequently regressed within the first 24 months after SRS. However, in fifty-five (35.5%) patients, the tumor was still enlarged even after 24 months after SRS compared to the initial tumor volume. Among them with volume expansion even after 24 months after SRS, thirty-eight (69.1%) patients finally had tumor shrinkage at 45.7 (range 25.0-100.0) months after development of TVE. Tumor regression after TVE was identified in 11 (20.0%) patients after 3 years, 2 (3.6%) patients after 4 years, 6 (10.9%) patients after 5 years, and 3 (5.5%) patients after 6 years after TVE development. However, seventeen (30.9%) patients did not show a resolution of the increased tumor volume until the last follow-up period (30-141 months).
Among 55 patients with tumor volume expansion over 24 months after SRS, forty-nine (89.1 %) had not had any neurological symptoms related with tumor volume expansion, while 6 (10.9%) patients experienced additional surgery for tumor progression.
Conclusions TVE after SRS for VSs usually occurs and regressed within the first 24 months after SRS. However, in approximately one-third of patients, TVE seems to be delayed after 24 months after SRS, and in some patients even after 6 years. Thus, additional treatment for VSs with volume expansion after SRS should be decided cautiously considering this phenomenon of the long-lasting TVE, especially in patients with no neurological symptoms related with tumor volume expansion.

AG1-7

Using the deformity index of vital structures to predict outcome of patients with large vestibular schwannomas after Gamma Knife radiosurgery

Hung-Chuan Pan

Department of Neurosurgery, Taichung Veterans General Hospital, Taichung, Taiwan

Introduction Microsurgery is the mainstay of treatment for large vestibular schwannomas (VS), but the benefits of radiosurgery remain incompletely defined. Here, we aim to use automated volumetric analysis software to quantify the degree of brain stem deformity and other tumor characteristics, and then use such information to predict long-term outcomes of patients with large VS following GKRS.
Methods Between 2003 and 2020, 39 patients with large VS (volume >8 cc) undergoing GKRS with a margin dose of 10-12 Gy were with available MRI data and complete medical records. With 3-dimension (3D) MRI, we reconstructed the tumor, brainstem, and cerebellum to evaluate the extent of deformity of these vital structures for predicting the long-term outcome of patients.
Results Their mean tumor volume was 13.9±6.1 cc, and their mean follow-up after GKRS was 86.7 ±65.3 months. Favorable clinical outcome was observed in 26 (66.7%) patients, while 13 (33.3%) patients had treatment failure. Patients with small tumor volumes, low vital structure deformity indice (TV/BSV+CerV / and TV+EV/BSV+CerV), and long distance of tumor to the central line were more likely to have favorable clinical outcome after GKRS: specifically, Good vs Poor: 12.3 ±5.3 cc vs 17.1 ±6.6 cc ($p < 0.01$), 0.1 ±0.1 vs 0.2 ±0.1/0.12 ±0.06 vs 0.20 ±0.09 ($p < 0.01$/$p < 0.001$), 4.5 ±3.8mm vs -0.2 ±3.5mm ($p < 0.001$). Significant prognostic value was found with the following: tumor shrinkage ratio >50% ($p<0.01$), CV ($p<0.01$), CV/TV ($p<0.05$), TV/CerV ($p<0.05$), TV+EV/BSV+CerV ($p<0.05$) and the distance of tumor to the central line ($p<0.05$). In cox regression, favorable clinical outcome was highly correlated with the Charlson comorbidity index and cochlear dosage (both $p<0.05$). In multivariant analysis, tumor regression was highly correlated with the CV/TV ratio ($p<0.001$).
Conclusions The brainstem deformity ratio is likely a useful index to assess the clinical and tumor regression outcomes. Clinical outcomes are multifactorial and include factors such as image alterations, medical status, and cochlear function. We found that tumor regression was highly correlated with the ratio of cystic components, thereby indicating tumor characteristics contributed to tumor regression.

AG1-8

Quantification of tumor response of cystic vestibular schwannoma to Gamma Knife radiosurgery by using artificial intelligence

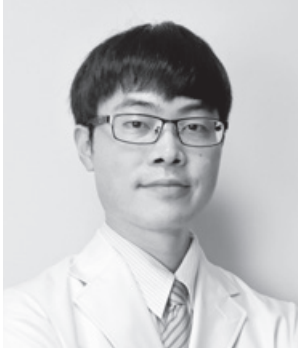
Chih-Ying Huang[1)], Syu-Jyun Peng[2)], Hsiu-Mei Wu[1, 3)], Huai-Che Yang[3, 4)], Ching-Jen Chen[5)], Mao-Che Wang[3, 6)], Yong-Sin Hu[1, 3)], Yu-Wei Chen[1, 4)], Chung-Jung Lin[1, 3)], Wan-Yuo Guo[1, 3)], David Hung-Chi Pan[4, 7)], Wen-Yuh Chung MD[3, 4)], Cheng-Chia Lee[3, 4, 8)]

[1)] Department of Radiology, Taipei Veterans General Hospital, Taiwan
[2)] Professional Master Program in Artificial Intelligence in Medicine, College of Medicine, Taipei Medical University, Taiwan
[3)] School of Medicine, National Yang Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan
[4)] Department of Neurosurgery, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taiwan
[5)] Department of Neurological Surgery, University of Virginia Health System, Charlottesville, Virginia, USA
[6)] Department of Otolaryngology–Head and Neck Surgery, Taipei Veterans General Hospital, Taiwan
[7)] Department of Neurosurgery, Shuang Ho Hospital, Taipei Medical University, Taiwan
[8)] Brain Research Center, National Yang Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan

Introduction Gamma Knife radiosurgery (GKRS) is a common treatment modality for vestibular schwannoma (VS). The ability to predict treatment response is important in patient counseling and decision-making. The authors developed an algorithm that can automatically segment and differentiate cystic and solid tumor components of VS. They also investigated associations between the quantified radiological features of each component and tumor response after GKRS.
Methods This is a retrospective study comprising 323 patients with VS treated with GKRS. After preprocessing and generation of pretreatment T2-weighted (T2W)/T1-weighted with contrast (T1WC) images, the authors segmented VSs into cystic and solid components by using fuzzy C-means clustering. Quantitative radiological features of the entire tumor and its cystic and solid components were extracted. Linear regression models were implemented to correlate clinical variables and radiological features with the specific growth rate (SGR) of VS after GKRS.
Results A multivariable linear regression model of radiological features of the entire tumor demonstrated that a higher tumor mean signal intensity (SI) on T2W/T1WC images ($p < 0.001$) was associated with a lower SGR after GKRS. Similarly, a multivariable linear regression model using radiological features of cystic and solid tumor components demonstrated that a higher solid component mean SI ($p = 0.039$) and a higher cystic component mean SI ($p = 0.004$) on T2W/T1WC images were associated with a lower SGR after GKRS. A larger cystic component proportion ($p = 0.085$) was associated with a trend toward a lower SGR after GKRS.
Conclusions Radiological features of VSs on pretreatment MRI that were quantified using fuzzy C-means were associated with tumor response after GKRS. Tumors with a higher tumor mean SI, a higher solid component mean SI, and a higher cystic component mean SI on T2W/T1WC images were more likely to regress in volume after GKRS. Those with a larger cystic component proportion also trended toward regression after GKRS. Further refinement of the algorithm may allow direct prediction of tumor response.

ALGK General Session
Abstracts

Name : Yong-Sin Hu, M.D



【Education & Current Position】
National Yang-Ming University, Taiwan School of Medicine
Taipei Veterans General Hospital, Taiwan Department of Radiology
Resident, Chief resident, and attending physician
Taipei Hospital, Ministry of Health and Welfare Attending physician
National Yang Ming Chiao Tung University Lecturer

【Award】
1. Travel grant award, the World Federation of Neuroradiological Societies, 2019
2. First prize for Paper of the year, Neuroradiological Society of Taiwan, 2019
3. Bronze medal for best oral presentation, Asian-Oceanian Society of Neuroradiology, 2021
4. Outstanding teacher, National Yang Ming Chioa Tung University, 2022

【Publications】
1. Hu YS, Lin CJ, Wu HM, et al. Lateral sinus dural arteriovenous fistulas: sinovenous outflow restriction outweighs cortical venous reflux as a parameter associated with hemorrhage. **Radiology**. 2017 Nov; 285 (2): 528-535. SCI IF=29.146; Rank: 0.7% (1/136)
2. Hu YS, Guo WY, Lee IH, et al. Prolonged cerebral circulation time is more associated with symptomatic carotid stenosis than stenosis degree or collateral circulation. **J Neurointerv Surg.** 2018 May; 10 (5): 476-480. SCI IF=8.581; Rank: 7.1% (1/14)
3. Hu YS, Lee CC, Guo WY, et al. Trigeminal nerve atrophy predicts pain recurrence after Gamma Knife stereotactic radiosurgery for classical trigeminal neuralgia. **Neurosurgery.** 2019 Apr; 84 (4): 927-934. SCI IF=5.315; Rank: 12.3% (26/211)
4. Hu YS, Guo WY, Lin CJ, et al. Magnetic resonance imaging as a single diagnostic tool for verifying radiosurgery outcomes of cavernous sinus dural arteriovenous fistula. **Eur J Radiol.** 2020 Apr; 125: 108866. SCI IF=4.531; Rank: 31.6% (43/136)
5. Hu YS, Lee CC, Wu HM, et al. Stagnant venous outflow predicts brain arteriovenous malformation obliteration after Gamma Knife radiosurgery without prior intervention. **Neurosurgery.** 2020 Aug; 87 (2): 338-347. SCI IF=5.315; Rank: 12.3% (26/211)
6. Hu YS, Lee CC, Wu HM, et al. Stagnant venous outflow in ruptured arteriovenous malformations revealed by delayed quantitative digital subtraction angiography. **Eur J Radiol.** 2021 Jan; 134: 109455. SCI IF=4.531; Rank: 31.6% (43/136)
7. Hu YS, Yang HC, Lin CJ, et al. Imaging marksers associated with radiation-induced changes in brain arteriovenous malformations after radiosurgery. **Neurosurgery.** 2022 Apr; 90 (4): 464-474. SCI IF=5.315; Rank: 12.3% (26/211)
8. Hu YS, Lee CC, Wu CA, et al. Sinovenous outflow in lateral sinus dural arteriovenous fistulas after stereotactic radiosurgery: a retrospective longitudinal imaging study. **Acta Neurochir (Wien).** 2022 Jul 13. Online ahead of print. SCI IF=2.816; Rank: 40.8% (86/211)
9. Hu YS, Lin CJ, Wu CA, et al. Outflow patency correlates with radiosurgical outcomes of lateral sinus dural arteriovenous fistula. **World Neurosurg.** 2022 Aug 11. Online ahead of print. SCI IF=2.21; Rank: 58.3% (123/211)

Brain arteriovenous malformations and dural arteriovenous fistulas: risk evaluations and radiosurgical outcome prediction

Yong-Sin Hu[1), 2), 3)]

[1)] Department of Radiology, Taipei Hospital, Ministry of Health and Welfare, Taiwan
[2)] School of Medicine, National Yang Ming Chiao Tung University, Taiwan
[3)] Department of Radiology, Taipei Veterans General Hospital, Taiwan

The brain arteriovenous malformations (BAVMs) account for 4% to 33% of intracranial hemorrhages, and are associated with a 50% neurological morbidity rate and a 12% mortality rate. Annual hemorrhage rates for BAVMs vary from 1% to 33%, depending on the clinical and anatomical features. Interventions for BAVMs carry different complication risks. Therefore, individualized risk assessment is crucial for physicians to determine the optimal treatment. Quantitative digital subtraction angiography (QDSA) techniques have been developed to objectively reflect hemodynamic changes associated with disease severity and therapeutic effects. In QDSA measurements, a venous stasis index, defined as the inflow gradient divided by the absolute value of the outflow gradient, shows the stagnant degree of BAVM venous drainage. A larger venous stasis index is an objective sign related to BAVM hemorrhage with a comparable diagnostic performance to exclusive deep drainage in angioarchitectural analysis. The QDSA measurements for drainage veins are more reliable than those for feeding arteries. QDSA reflects stagnant venous drainage in association with BAVM hemorrhage, but should be performed at least 1 month after BAVM hemorrhage to minimize the hemodynamic confounders. Gamma Knife radiosurgery (GKRS) is an effective and minimally invasive treatment option for patients with BAVMs. GKRS achieves complete obliteration in 65% to 82% of BAVMs after a latency period of 2 to 3 years. BAVMs with a larger stasis index may predict obliteration after GKRS. In addition to hemorrhage, radiation-induced changes (RICs) are major causes of neurological deficits for patients with BAVMs after GKRS. RICs, seen as increased perinidal T2-weighted hyperintensity on MRI, are commonly observed within 2 years after GKRS. Large BAVMs and neoangiogenesis on DSA before GKRS and thrombus within nidus or drainage vein on follow-up MRI are associated with moderate to severe RICs in treatment-naïve patients with BAVMs. Symptomatic RICs are more likely to develop in basal ganglia or brainstem.

Dural arteriovenous fistulas (DAVFs) comprise approximately 10% to 15% of intracranial vascular malformations and most frequently occur in the cavernous sinus (CS) and lateral sinus (LS). DAVFs may behave either benignly or aggressively, according to their venous drainage patterns and locations. Cortical venous reflux (CVR) and venous ectasia have been considered to be of high risk of hemorrhage according to the two most commonly used classification schemes: Borden and Cognard. On the angiography of LSDAVF, the combined conduit score (CCS) is defined as the sum of the proximal and distal conduit scores based on the patency of sinovenous conduits distal (downstream) and proximal (upstream) to the DAVF, ranging from 0 (total occlusion) to 8 (full patency). Sinovenous outflow restriction (SOR), indicated as a CCS of ≤2, had a stronger association with hemorrhage than CVR in LSDAVFs, because SOR may precipitate the buildup of high intracranial pressure by the DAVFs. GKRS can serve as a primary treatment for low-risk DAVFs or patients who are not amenable to endovascular therapy or microsurgery. Several studies have investigated the factors associated with DAVF obliteration after GKRS and some suggested that CS and non-CS DAVFs should be considered different entities. CSDAVFs with fewer venous drainage routes are more likely to be obliterated after GKRS. By contrast, LSDAVFs with a nearly patent outflow are more likely to achieve obliteration. Unenhanced MRI/ 3D TOF MRA at 1.5 T is a reliable follow-up imaging technique for demonstrating CSDAVF obliteration after GKRS with observed specificity of 100% and sensitivity of 84%. A restrictive change of outflow can be observed in some LSDAVFs after GKRS without associated symptoms. Follow-up imaging after GKRS revealed that patients with SOR had a lower LSDAVF obliteration rate. Angioarchitectural and QDSA analyses may assist with hemorrhage risk assessment and GKRS outcome prediction for patients with BAVMs and DAVFs.

AG2-2

Gamma Knife radiosurgery for the clival epidural-osseous dural arteriovenous fistulas

Cheng-Chia Lee[1), 4)], Ching-Jen Chen[6)], Shao-Ching Chen[1)], Huai-Che Yang[1), 4)], Chung Jung Lin[2), 4)], Chih-Chun Wu[2), 4)], Wen-Yuh Chung[1), 4)],Wan-Yuo Guo[2), 4)], David Hung-Chi Pan[1), 5)], Cheng-Ying Shiau[3), 4)], Hsiu-Mei Wu[2), 4)]

[1)] Departments of Neurosurgery, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[2)] Departments of Radiology, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[3)] Departments of Radiation Oncology, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[4)] School of Medicine, National Yang-Ming University, Taipei, Taiwan
[5)] Taipei Medical University-Shuang Ho Hospital, Taipei, Taiwan
[6)] Department of Neurological Surgery, University of Virginia Health System, Charlottesville, Virginia, USA

Introduction Clival epidural-osseous dural arteriovenous fistulas (DAVF) are often associated with large nidus, multiple arterial feeders, and complex venous drainage. We investigated the outcomes of a series of clival epidural-osseous DAVFs treated using GKS.
Methods Thirteen patients with clival epidural-osseous DAVF were treated using GKS in our institution between 1993 and 2015. The age at the time of GKS ranged from 38-76 years (median 55 years). Eight patients were defined as Cognard class I, four patients were class IIa, and one patient was class IIa+b. The median treatment volume was 17.6 cm^3 (range: 6.2–40.3 cm^3). The median prescribed margin dose was 16.5 Gy (range: 15–18 Gy). Clinical and radiographic follow-ups were performed at 6-month intervals. Patient outcomes after GKS were categorized as: 1) complete improvement, 2) partial improvement 3) stationary, and 4) progression.
Results All 13 patients demonstrated symptomatic improvement, and 12 of 13 patients achieved complete obliteration and one patient had partial obliteration on catheter angiography. The median follow-up period was 26 months (range: 14–186 months). The median latency period from GKS to obliteration was 21 months (range: 8–186 months). There was no intracranial hemorrhage during the follow-up period, and no mortality was observed. One definite complication was observed following treatment, and two patients required repeat GKS treatment with eventual complete obliteration.
Conclusions GKS offers a safe and effective primary or adjuvant treatment modality for complex clival epidural-osseous DAVFs. All patients in this case series demonstrated symptomatic improvement, and almost all patients achieved complete obliteration.

AG2-3

Radiosurgical outcome of intracranial avms planned on DSA and MRI for Gamma Knife stereotactic radiosurgery versus MRI alone

Kanwaljeet Garg, Manmohan Singh, Devasheesh Kamra, Shweta Kedia, Manoj Phalak, Duttaraj Sawarkar, Deepak Agrawal, S S Kale

Department of Neurosurgery, All India Institute of Medical Sciences, New Delhi, India

Introduction Gamma Knife radiosurgery (GKRS) is a standard treatment for arteriovenous malformations (AVMs). Digital subtraction Angiography (DSA) has been traditionally used to localize the nidus while planning GKRS, though it is an invasive procedure. However, few recent studies have described the use of MRI to localize the nidus in place of DSA. The aim of the current study is to compare the outcome when GKRS planning is done based on DSA and MRI or MRI alone.
Methods All patients with AVM who underwent Gamma Knife Radiosurgery from 1st January, 2011 to 30th June,2018 were included in this retrospective study and divided based on following criteria:-
Group A – Patients in whom Gamma Knife treatment was planned on MRI and DSA together
Group B - Patients where the Gamma Knife treatment was planned on MRI alone
The obliteration of AVM as confirmed with DSA was recorded.
Results 224 patients were included in the study. Both the groups were comparable as per age gender, pre-Gamma Knife embolization and pre-GKT microsurgery status. However, the MRI alone group had a higher percentage of higher SM grade patients (p-value of 0.0072). There was no statistically significant difference between baseline AVM volume and marginal AVM dose between two groups.
It was found that at 2 years follow up, the obliteration rate was more in Group B i.e. 25% compared with 11.34% in Group A (p=0.06973). Similarly, the obliteration rates comparison at 3 years and 5 years were not significant between Groups A and B. In Group A, 97 patients out of 148 felt symptomatic improvement (65.5%) compared with 51 out of 76 patients in Group B (67.1%) (p=0.8953). Ten out of 148 patients (6.8%) had post GKT bleeding in Group A compared with 5 out of 76 patients (6.6%) in Group B (p=0.9597). Nine patients in Group A (6.08 %) and 1 patient in Group B (1.3 %) died due to post GKT bleed and sequelae (p=0.2792). In Group A, 39 out of 148 patients (26.35%) had ARE (Adverse Radiation Effects) compared with 26 out of 76 (34.21%) in Group B (p=0.2197).
Conclusions GKRS treatment of AVMs planned on MRI and DSA does not add statistically significant advantage over the AVMs planned on MRI alone. The comparative obliteration rates were either equal or non-significantly higher in the MRI alone group as compared to the combined MRI and DSA group at 2-year, 3-year and 5-year follow up. There was no significant difference between post radiation sequelae and adverse effects between the two groups.

AG3-1

Usefulness of Elements workstation (Brainlab) in stereotactic radiosurgery/stereotactic radiotherapy treatment planning

Yoshimasa Mori[1)], Yasuhiro Matsushita[2)], Kazunori Koyama[2)], Yoshihisa Kida[2)], Atsuo Masago[2)]

[1)] Center for Advanced IGRT, Shin-Yurigaoka General Hospital, Japan
[2)] Gamma Knife Center, Ookuma Hospital, Japan

Introduction Ookuma hospital started Gamma Knife Icon stereotactic radiosurgery and stereotactic radiotherapy (SRS/SRT) in this past September (from Sep. 26th, 2022). Usefulness of Elements workstation (Brainlab, Munich) in treatment planning of GammaPlan-based Icon SRS/SRT.
Methods In one case of large meningioma, one of large pituitary adenoma, and four of cerebral arteriovenous malformation (AVM), contouring of targets and organs at risk (OARs) were performed initially on Elements workstation and then those object sets were transferred to GammaPlan workstation. Dose planning was continued on GammaPlan workstation. Finally on the treatment day, dose planning was optimized and finalized on the images fused to thermoplastic mask-based Icon stereotactic CBCT (cone-beam computed tomography) images.
Results In cases of large meningioma and large pituitary adenoma involving the optic pathways, contouring of targets and OARs were performed comfortably in details on Elements workstation, because multiple image series (CT and MRIs of T1WI, T2WI, heavy T2 images, 3D-gradient echo images, and so on) can be handled on it.
In cases of AVMs, 2D-angiograms can be fused with 3D-MRIs and CTs. Therefore, stereotactic angiography with invasive skull frame equipped with fiducial system is not needed. In addition, contouring of AVM nidus was performed comfortably in details on Elements workstation, because those image series, including multi-phase angiograms, can be easily handled.
Conclusions Elements workstation, in addition to GammaPlan, enables more precise and more comfortable treatment planning of Icon SRS/SRT, especially skull base tumors and AVMs.

AG3-2

Long term results of Gamma knife radiosurgery for essential trigeminal neuralgia: final clinical evaluation of the role and needs according to more than 100 patients with at least 10 years follow up

Motohiro Hayashi, Daiki Sato, Ayako Horiba, Mieko Oka

Section of Stereotactic Radiosurgery, Department of Neurosurgery, Tokyo Women's Medical University, Japan

Introduction Although the early and middle-term efficacy of Gamma Knife surgery (GKS) for medical refractory essential trigeminal neuralgia (eTGN) has been reported, long-term evaluations are very limited. Our institutional initial clinical results which investigated 130 patients with at least 3 years follow up, had already reported in 2011 as follows; 86% experienced pain attack cessation, and 56.7% were medication free. On the other hand, 23% ones suffered from facial numbness, and 12.5% complained very bothersome. We should continue the very strict patient eligibility to recommend GKS for the patients with eTGN taking account into the severe complication of very bothersome whose rate could not be accepted, patient emotion point of view. So, we tried to investigate patient data obtained at least 10 years' post-treatment and examined the significance of this treatment with new endpoints to elucidate the true role of GKS among the modern treatments for eTGN.
Methods Among 249 consecutive patients with eTGN treated with GKS (Retro-Gasserian target/4-mm single isocenter/90 Gy@100%) at our institution between 2003 and 2011, 103 patients who could be followed up for at least 10 years (mean, 174 [120-219] months) after GKS and whose data were amenable to accurate evaluation were included in this retrospective study. In this study, we aimed to accurately evaluate pain attacks using the conventional BNI-P as a clinical evaluation method for pain and Engel's classification to evaluate electric discharge based on pathophysiological characteristics. The BNI-N was used to evaluate complications (facial dysesthesia).
Results At the last follow-up, the rate of pain atta/ck cessation (both BNI-P I-IIIa and Engel's class I) was achieved in 58.2% (60/103), instead of 82.5% (85/103) at the initial effect. Among of the patients with pain attack recurrence, twenty eight ones (65.8%) underwent additional treatment. On the other hand, the rate of significant complication (BNI-N II-IV) which was mainly facial dysesthesia was 24.3% (25/103), including 2.9% (3/103) with very bothersome (BNI-N IV).
Conclusions GKS for eTGN demonstrated favorable therapeutic effects with long-term follow-up. Serious complication was a strong concern in the early and middle-term follow-up, resolved spontaneously. Therefore, the clinical indications for GKS should be expanded to patients with eTGN according to the present long-term clinical results.

AG3-3

Outcome of Gamma Knife thalamotomy and biologically effective dose (BED)

Jung-Il Lee, Hye Won Choi, Yong Seok Im

Deparment of Neurosurgery, Samsung Medical Center, Sungkyukwan Univerity School of Medicine, Korea

Introduction The purpose of this study was to investigate the results following nucleus ventralis intermedius (VIM) Gamma Knife thalamotomy (GKT) for medically-refractory tremor. In addition, we analyzed the correlation between biologically effective dose (BED) and the clinical outcome.

Methods Twenty patients underwent GKT for disabling tremor that did not respond to medical treatment. All of them except one patient, received unilateral GKT, and one patient underwent staged bilateral GKT. Mean age was 71.5 years (range 59-76 years). Eight patients had serious underlying medical diseases. A maximum dose of 130 Gy was administered to the VIM, using a single 4-mm isocenter. The Fahn-Tolosa-Marin clinical tremor rating scale (TRS) was used before and after GKT to evaluate the severity of tremor and changes after treatment. The measurements before and after treatment were compared using paired T-tests.

We calculated BED using the formula reported in the previous literature and conducted a regression analysis of BED and TRS score.

Results There were 16 evaluable patients, with available TRS scores before and after GKT. The median follow-up period was 10 months (range 1-41 months) and four patients deceased during the follow-up period. The mean scores before and after GKT was 3.13 ± 0.62 and 2.38 ± 1.09 for action tremor (p= 0.041), 2.75 ± 1.00 and 2.19 ± 0.98 for writing (p= 0.003), 2.88 ± 1.20 and 2.13 ± 1.36 for drawing (p= 0.002), 2.69 ± 1.20 and 1.94 ± 1.34 for water-pouring (p= 0.013). Three patients (18.8%) exhibited improvements in all categories of TRS scores; eight (50.0%) in two or three categories; four (25.0%) only in one category. The results of the regression analysis of BED and TRS score revealed a moderate positive correlation only between BED and action tremor score (r=0.51, p=0.045).

Conclusions In this study, GKT brought substantial improvements in tremor for the patients in old age or with serious medical comorbidities. A statistically-meaningful correlation between BED and clinical outcome was observed only in action tremor category. Further systemic prospective study in a large population of patients is required to find an optimal BED in GKT.

AG3-4

Dynamic radiation-induced imaging changes more than 20 years following Gamma Knife surgery

Ai Peng Tan[1)], Tseng Tsai Yeo[2)], Hsiang Rong Yong[1)], Bengt Karlsson[2)]

[1)] Department of Radiology, National University Hospital, Singapore
[2)] Department of Surgery, Division of Neurosurgery, National University Hospital, Singapore

This is a case report describing a patient who was treated with Gamma Knife surgery for eight brain metastases in 1994. The patient developed an asymptomatic cyst with minimal edema at the site of one of the treated tumors seven years later. The edema subsided and the cyst stabilized. However, the patient developed an increased frequency of epileptic activity 23 years after the treatment. A MRI examination revealed that a slight edema had developed at the site of the cyst. The symptoms subsided without treatment, and the edema was no longer to be seen at the images from a follow-up MRI examination one year later. This case report illustrates that radiation induced changed may appear more than 20 years after radiosurgery. Thus, the possibility of radiation induced changes should be kept in mind as a differential diagnosis when imaging changes are observed many years after radiosurgery.

AG3-5

Adverse radiation effects (ARE): The major challenging complication after stereotactic radiosurgery on intracranial lesions

Szu-Hao Andrew Liu, Wen-Yuh Chung, Chi-Jen Chou

Gamma knife center and Department of Neurosurgery, Kaohsiung Veterans General Hospital, Taiwan

Introduction As the rapid widely use of stereotactic radiosurgery (SRS) in treating intracranial lesions, adverse radiation effects (ARE) are becoming major problem after SRS. The diagnosis and management of ARE after SRS are challenging. It's sometimes hard to differentiate ARE from tumor progression. Combined multiple parametric imaging tools may enhance diagnostic accuracy. The management of ARE is also an issue. To date, there are still no widely accepted guidelines available. Besides traditional methods including steroids and surgery, the anti-VEGF mono antibody bevacizumab has been shown to be effective treatment of ARE. We shared our experience in dealing with ARE at our institution and reviewed the relative literatures of the current management for ARE.
Methods We retrospective analysis the patients who had ARE after receiving gamma knife radiosurgery (GKRS) from Dec 2017 to Dec 2021. ARE were diagnosed by serial MRIs, MR diffusion image, MRS and PET scan. The management of ARE included observation, corticosteroids, bevacizumab and surgical resection.
Results There were 62 of 595 patients (10.1%) had ARE after GKRS. The median onset of ARE was 7 months. 33 patients (53%) were symptomatic, including 23 patients with metastatic tumor, 3 patients with vascular disorders and 7 patients with other disease entities. Symptoms relieved on 14/33 patients treated with corticosteroid and 12/14 patients with bevacizumab. 6 of 14 patients (42%) who receiving bevacizumab recurred ARE after withdrawing the drugs. The multivariate analysis revealed prescription dose and radiation volume are independent risk factors of developing ARE.
Conclusions Our results suggested ARE is not uncommon in patients receiving GKRS with half of them are symptomatic. Bevacizumab is well worked in short term result though at least 40% of the patients will recur after discontinuing the drug. The prescription dose of the lesion as well as radiation volume play an important role in developing ARE.

AG3-6

Ventralis oralis anterior (Voa) deep brain stimulation plus Gamma Knife thalamotomy in an elderly patient with essential tremor

Young Seok Park[1), 2), 3)], Hyeong Cheol Moon[1)], Dongsuk Jang[1)]

[1)] Department of Neurosurgery, Gamma Knife Icon Center, Chungbuk National University Hospital, Cheongju, Republic of Korea
[2)] Department of Medical Neuroscience, College of Medicine, Chungbuk National University, Cheongju, Republic of Korea
[3)] Department of Neurosurgery, College of Medicine, Chungbuk National University, Cheongju, Republic of Korea.

Introduction Deep brain stimulation (DBS) of the ventralis intermedius nucleus (Vim) provides a safe and effective therapy for medically refractory essential tremor (ET). However, DBS may be risky in elderly patients and those with ischemic brain lesions. Gamma Knife radiosurgery (GKS) is a minimally invasive procedure, but bilateral thalamotomy is dangerous.
Methods We report a case of ventralis oralis anterior nucleus (Voa) DBS for dominant hand tremor plus Voa GKS for nondominant hand tremor in a very elderly patient with medically intractable ET. An 83-year-old right-handed woman visited our hospital with a medically intractable ET. Because of the ischemic lesion in the right basal ganglia, we decided to perform left unilateral DBS instead of bilateral DBS. We chose Voa as the target for DBS because, clinically, her tremor was mainly confined to her hands, and Voa had better intraoperative microelectrode recording results than Vim.
Results After 2 years, her right-hand tremor remained in an improved state, but she still had severe tremor in her left hand. Therefore, we performed GKS targeting the right Voa. One year after surgery, the patient's hand tremor successfully improved without any complications.
Conclusions Salvage Voa GKS after unilateral Voa DBS is a valuable option for very elderly patients and patients with ischemic brain lesions. We suggest that Voa GKS thalamotomy is as useful and safe a surgical technique as Vim GKS for dystonic hand tremor. To the best of our knowledge, this is the first case report using salvage Voa as the only target for ET.

AG3-7

Gamma knife radiosurgery multisession providing long term tumor control of skull base meningioma

Abdul Sattar M Hashim, Aurangzeb kalhoro

Department of Neurosurgery, Neurospinal and Cancer Care Institute, Pakistan

Introduction: To evaluate long-term outcomes of patients who have undergone stereotactic radiosurgery for cranial base meningiomas, the authors experience of 12-year experience with these cases with follow-up to more than 7 years.
Methods: Between November 2008 and December 2019, the consultant Gammaknife treated benign cranial base meningiomas in 119 patients using Multisession Gamma Knife radiosurgery. The tumor volumes ranged from 1.7 to 55.3 cm^3 (median 8.1 cm^3), and the radiosurgery doses ranged from 18 to 25 Gy (median 20 Gy) to the tumor margin.
Results: The mean duration of follow-up was 72.1 months (range 20–122 months). Tumor volume decreased in 55 patients (52.7%), remained stable in 56 patients (47%), and increased (local failure) in 8 patients (6%). Fourteen patients experienced tumor recurrence outside the treatment field. The progression-free survival rate, including malignant transformation and outside recurrence, was 93% at 5 years and 83% at 10 years. Neurological status improved in 16 patients (15%). Permanent radiation injury occurred in 6 patients (6%).
Conclusions: Gamma Knife radiosurgery is a safe and effective treatment for cranial base meningiomas as demonstrated with a long-term follow-up period of > 7 years. Surgeons must be aware of the possibility of treatment failure, defined as local failure, marginal failure, and malignant transformation; however, this may be the natural course of meningiomas and not related to radiosurgery. Good tumor Control could be achieved for long term duration.

AG4-1

Efficient timer errors measurements for all three collimators in Gamma Knife (GK) ICON

Tanxia Qu[1), 2)], Hesheng Wang[2)]

[1)] Center for Advanced Radiosurgery, NYU Langone Health, USA
[2)] Department of Radiation Oncology, NYU Langone Health, USA

Introduction Gamma Knife ICON has three independent collimators in diameters of 4mm, 8mm, and 16mm, and therefore three on-off timer errors. This study used two methods to measure the timer errors, aiming to establish an efficient and accurate measurement method and compared the results.
Methods The conventional first method was manual with a PTW Semiflex chamber. The detector, inside a 16 cm diameter sphere solid water phantom, was positioned at the focal point of a GK. The two-exposure method (Orton 1972) was used to calculate the timer errors. It took average of 3 min to measure one data point. The novel second method used a PTW diamond detector which was connected to an electrometer with the time-series data logger function to log the shot times of 6 sec, 6 sec, and 9 sec for the collimators of 4mm, 8mm, and 16mm, respectively. Each collimator was measured for 10 times for statistics purpose. A sigmoid function was used to fit the data in the transit period. Triangle function was used to fit the 4mm collimator contribution in the 16mm collimator shot. The average time collecting the charges for all three collimators were less than 5 min and the data processing time was less than 0.5 min for an i7 pc.
Results With the manual method, the timer errors for 4mm and 8mm collimators were 0.054 sec, 0.095 sec and -0.056 sec, respectively. The 16mm timer errors was negative which had no physical meaning. The 4mm collimator was too large for the chamber, among other reasons. With the automatic method, the timer errors for 4mm, 8mm, and 16 mm were fitted as 0.26, 0.16, and 0.48 sec, respectively. All results were positive. The 8mm timer error was shorter than 4mm's, while 16 mm collimator had the largest timer error due to its longer distance from the Block position and the unavoidable 4mm collimator contribution.
Conclusions For timer error measurement of the GK Icon, the conventional manual method was not adequate. The novel automatic method using the time-series data logger function of an electrometer could obtain the results correctly and efficiently.

AG4-2

Use an electrometer's time-series data logger function in Gamma Knife ICON QA

Tanxia Qu[1), 2)], Hesheng Wang[2)]

[1)] Center for Advanced Radiosurgery, NYU Langone Health, USA
[2)] Department of Radiation Oncology, NYU Langone Health, USA

Introduction This study applied the time-series data logger function of an electrometer in Gamma Knife ICON QA. The manual method to use the PTW Semiflex chamber to measure the dose rate, timer accuracy, timer linearity, timer error, and transit dose has at least three issues: 1) it is strictly inaccurate because the chamber volume is too large for the 4mm collimator by which the source sectors must pass twice for each 16 mm collimator on-off action; 2) its integrated dose method is not accurate enough to measure the low tenth of a sec time error for the 4 mm and 8 mm collimator; 3) it is time consuming and random error prone. All can be overcome by the method in post processing the differential data collected using the time-series data function of an electrometer.
Methods A PTW chamber, inside a 16 cm diameter sphere solid water phantom, was positioned at the focal point of a GK. The chamber was connected to an electrometer of time-series data logger function with its sampling rate at 0.5 sec. Only 16 mm collimator was measured in the monthly QA. The current-time data was logged for four shots of 0.5, 1, 5, and 10 minutes. A collimator size correction factor was applied to the unavoidable 4 mm collimator contributions. The charge was the integration of the current over time. The dose rate, timer accuracy, timer linearity, timer error, and transit dose were obtained from the dose- shot time linear fitting.
Results For monthly QA, the dose rate, timer accuracy, timer linearity, timer error, and transit dose were 3.13 Gy/min, 59.5 sec, 1.00, 0.02 sec, and 0.001 Gy, respectively. The data collection time was about the exposure time, and the data processing time was less than 1 min on an i7 pc.
Conclusions This study demonstrated that a time-series data logger function can be used to perform tasks accurately and efficiently in GK's monthly QA.

AG4-3

Use an electrometer's time-series data logger function to measure a beam profile

Tanxia Qu[1), 2)], Hesheng Wang[2)]

[1)] Center for Advanced Radiosurgery, NYU Langone Health, USA
[2)] Department of Radiation Oncology, NYU Langone Health, USA

Introduction This study was to establish a method to measure beam profiles (position series data) efficiently by using an electrometer's time-series data logging function. A beam profile measuring system executes two functions: position a detector using servo-trails and log charge using an electrometer. The functions can be played using Gamma Knife's patient position system and an electrometer of time-series data logging ability, respectively.
Methods The proposed method was illustrated by measuring a z-direction beam profile for the 4mm collimator of Gamma Knife (GK) ICON. The GK Daily QA Tool Plus detector was connected to an electrometer with the time-series data logger function, with its sampling rate at 0.5 sec. The data logger was turned on, then the detector was programed to dwell 6 sec at each of the 37 positions ranging from 91 mm to 109 mm with 0.5 mm step. A MATLAB algorithm identified the 37 data clusters, averaged each cluster to be 37 values which corresponded to the 37 positions in space, therefore obtained a beam profile. The method could replace the time-consuming and random error prone film dosimetry in GK annual QA.
Results A beam profile of 37 points over 18 mm range was obtained. Three profile features in FWHM, 20% -80% penumbra, and center were calculated using a spline interpolation method. The results of 5.01 mm, 2.50 mm, and 100.2 were within the tolerance comparing with the corresponding parameters in the reference data. The method was efficient that the data collection took less than 4 min and the data processing took less than 30 sec on an i7 PC.
Conclusions We have demonstrated that a relatively inexpensive electrometer of timeseries time-series logging can be used to measure a beam profile efficiently.

AG4-4

Verification of the absorbed energy calculation procedure of the Leksell Gamma Plan

Hyun-Tai Chung[1, 2], Tae Hoon Kim[3], Young Chan Seo[1], Kyo Tae Kim[1], Eun Jung Lee[2], Sung Ho Lee[2, 4], Jin Wook Kim[2], Yong Hwy Kim[2, 4], Sun Ha Paek[1, 2]

[1] Department of Medical Device Development, Seoul National University College of Medicine, Seoul, Korea
[2] Department of Neurosurgery, Seoul National University Hospital, Seoul, Korea
[3] Department of Radiation Oncology, Asan Medical Center, Seoul, Korea
[4] Department of Neurosurgery, Seoul National University College of Medicine, Seoul, Korea

Introduction Absorbed energy by a tumor is an integration of dose to each point in the tumor, related to DNA aberrations caused by radiation. Despite its importance, the accuracy of the treatment planning to calculate it has never been verified. In this study, absorbed energy by two vestibular schwannomas was calculated with Leksell Gamma Plan (LGP) and verified using 3D-printed tumor model scintillation detectors in skull phantoms.
Methods The MR images of two patients containing tumors were exported to a 3D-slicing program in DICOM-RT format. The hollow skull phantoms were built by 3D printing according to each patient's skull image and filled with water. Tumor model scintillators (TMS) formed in the shape of the tumors were 3D-printed using self-developed scintillating plastic resin. The TMS outputs were measured in nine fields at the center of the solid water phantom and normalized to Monte Carlo simulation values. A TMS detector was inserted into the tumor location inside the skull phantom, and CBCT images were obtained. Treatment plans were made to irradiate the TMS using the TMR10 algorithm. 12.5Gy and 13Gy were prescribed to 50% isodose for each TMS. Irradiation was carried out in the same manner as the patient. The energy absorbed by TMS was measured and compared with LGP values.
Results The volume of the TMS was 0.722cm^3 and 0.216cm^3. The mean adjusted R-square value of linear fitting of the calibration data was 0.9996 +/- 0.0020. The absorbed energy calculated by LGP was 14.24 +/- 2.44 mJ and 4.62 +/- 0.70 mJ, respectively. The corresponding measured energy was 14.29 +/- 0.11 mJ and 4.65 +/- 0.03 mJ.
Conclusions The absorbed energy by a TMS calculated by the TMR10 algorithm of the LGP agreed with measured values with differences less than 0.7%. It is necessary to verify the convolution algorithm using inhomogeneous anthropomorphic phantoms.

AG4-5

Error analysis of probe measurements in extend treatment procedures

Eliseo Dela Cruz, Jr.

Philippine Gamma Knife Center, Cardinal Santos Medical Center, San Juan City, Metro Manila, Philippines

Introduction The Gamma Knife (GK) is an advanced radiation treatment, stereotactic radiosurgery, for adults and children with small to medium brain tumors measuring up to 3 cm in diameter, abnormal blood vessel formations called arteriovenous malformations, epilepsy, trigeminal neuralgia, a nerve condition that causes chronic pain, and other neurological conditions. Since its invention, patients with serious disorders can be treated with this noninvasive procedure in one day with no overnight hospital stay.
The Philippine Gamma Knife Center (PGKC), launched in 1998 at the Cardinal Santos Medical Center, is the first and only center in Manila that uses a Leksell Gamma Knife to treat brain disorders. The initial GK machine acquired was the *Model B*. In 2014, PGKC acquired the *Perfexion* model, which offers the most precise treatment using robotic couch with improved patient comfort. Today, more than 3,000 patients have been treated in the center using this state-of-the-art equipment.
In 2016, two years upon acquisition of *Perfexion*, PGKC started using the *eXtend System* for multi-session treatments, called fractionated treatments, for larger lesions or those in more sensitive locations.
Methods The probe measurement data will be extracted from all the 57 patients who have undergone fractionated treatment employing the *eXtend System* treatment at the PGKC facility starting February 2016. Errors will be computed mathematically and then will be compared to errors generated by the machine. The author will identify the sources of error and make recommendations to minimize errors.
Results On progress.
Conclusions On progress.

Hemorrhage risk of unruptured brain arteriovenous malformation after Gamma Knife radiosurgery: Significance of vascular compactness

Po-Wei Huang[1], Syu-Jyun Peng[2], David Hung-Chi Pan[3, 4, 14], Huai-Che Yang[3, 9], Jo-Ting Tsai[1, 11, 13], Cheng-Ying Shiau[8, 9], I-Chang Su[4, 12, 14], Ching-Jen Chen[6], Hsiu-Mei Wu[7, 9], Chung-Jung Lin[7, 9], Wen-Yuh Chung[3, 5, 9], Wan-Yuo Guo[7, 9], Wei-Lun Lo[4, 12, 14], Cheng-Chia Lee[3, 9, 10]

[1] Department of Radiation Oncology, Shuang Ho Hospital, Taipei Medical University, Taiwan
[2] Program in Artificial Intelligence in Medicine, College of Medicine, Taipei Medical University, Taiwan
[3] Department of Neurosurgery, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taiwan
[4] Department of Neurosurgery, Shuang Ho Hospital, Taipei Medical University, Taiwan
[5] Department of Neurosurgery, Kaohsiung Veterans General Hospital, Taiwan
[6] Department of Neurosurgery, University of Texas Health Science Center, USA
[7] Department of Radiology, Taipei Veterans General Hospital, Taiwan
[8] Cancer Center, Taipei Veterans General Hospital, Taiwan
[9] School of Medicine, National Yang Ming Chiao Tung University, Taiwan
[10] Brain Research Center, National Yang Ming Chiao Tung University, Taiwan
[11] Department of Radiology, School of Medicine, College of Medicine, Taipei Medical University, Taiwan
[12] Department of Surgery, School of Medicine, College of Medicine, Taipei Medical University, Taiwan
[13] Graduate Institute of Clinical Medicine, College of Medicine, Taipei Medical University, Taiwan
[14] Taipei Neuroscience Institute, Taipei Medical University, Taiwan

Introduction The goal of the study was to investigate whether morphology (i.e. compact/ diffuse) of brain arteriovenous malformations (bAVMs) correlates with the incidence of hemorrhagic events in patients with unruptured bAVMs after receiving Gamma Knife Radiosurgery (GKRS).

Methods This study retrospectively included 262 adult patients with unruptured bAVMs receiving upfront GKRS from double-institutions. Hemorrhagic events were defined as bleeding signs on computed tomography (CT) or magnetic resonance images (MRI). The morphology of bAVMs was evaluated using fully automated segmentation, which calculated the proportion of vessel, brain tissue, and cerebrospinal fluid in bAVMs on T2-weighted MRI. Compactness index, defined as the ratio of vessel to brain tissue, categorized the bAVMs into compact and diffuse types based on the optimal cutoff. Cox proportional hazard model was used to identify the independent factors for post-GKRS hemorrhage.

Results The median clinical and imaging follow-ups were 62.1 and 42.9 months. Post-GKRS hemorrhage occurred in 14 (5.3%) patients with 2 bAVMs bleeding twice, resulting in an annual bleeding risk of 0.9%. Multivariable analysis revealed that bAVM morphology (compact versus diffuse), bAVM volume and prescribed margin dose were significant predictors for post-GKRS hemorrhage. Among the diffuse bAVMs, the post-GKRS hemorrhage rate was higher for larger bAVMs (2.2 versus 13.5 versus 26.3 hemorrhage per 1000 person-years in bAVM volume <15 cm^3 versus 15-30 cm^3 versus >30 cm^3; p=0.044). There was no significant difference between hemorrhage rates of each volume group within compact bAVMs. The hemorrhage rate after GKRS was higher in Spetzler-Martin grade IV-V bAVMs compared with grade I-III nidi (22.3 versus 4.1 hemorrhages per 1000 person-years; p = 0.001). The elevated post-GKRS hemorrhage risk in Spetzler-Martin grade IV-V bAVMs mainly originated from the diffuse bAVMs rather than the compact subgroup (35.2 versus 4.8 hemorrhages per 1000 person-years; p = 0.022).

Conclusions Compact and smaller bAVMs, with higher prescribed margin dose harbor lower risks of post-GKRS hemorrhage. The hemorrhage rate after GKRS was increased in the diffuse and large (>30 cm^3) bAVMs and in the diffuse type Spetzler-Martin IV-V bAVMs to a level higher than 2.2% annually. This finding could help guide patient selection of GKRS management for the unruptured bAVMs.

AG5-2

Gamma Knife radiosurgery for brain arteriovenous malformations: a 15-year single center experience in Southern Vietnam

Binh Thanh Nguyen[1)], Chuong Thanh Huynh[1)], Tu Minh Nguyen[1)], Constantine L. Karras[2)], Phuong Le Huynh[1)], Huy Minh Tran[3)]

[1] Department of Neurosurgery, Cho Ray Hospital, Ho Chi Minh City, Vietnam
[2] Department of Neurological Surgery, Northwestern University, Chicago, Illinois, USA
[3] Department of Neurosurgery, Faculty of Medicine, University of Medicine and Pharmacy at Ho Chi Minh City, Ho Chi Minh City, Vietnam

Introduction This study aims to identify the obliteration outcome, complications, and predictors in GKRS treatment for BAVM at a tertiary center in a developing country for 15 years.
Methods We retrospectively reviewed clinical and GKRS procedures of patients who received GKRS from October 2006 to December 2020 at Cho Ray Hospital, Vietnam. The patient data was classified into two cohorts. Cohort 1 and cohort 2 included patients who underwent GKRS from 2006 to 2011 and from 2011 to 2020, respectively. Exclusion criteria included patients with less than 24 months follow-up without obliteration, or AVM-related hemorrhage during this period.
Results 870 patients were included in the final analysis. Patients in cohort 1 had significantly smaller AVMs (8.4 ± 11.6 vs. 11.2 ± 12.8 cm^3, $p < 0.001$) and were less frequently located in eloquent locations (46.6 vs. 65.5%, $p<0.001$) than in cohort 2. Mean AVM margin dose was 20.4 ± 3.2 (range: 14-26) Gy. Mean follow-up time was 49.6 ± 22.6 months (range: 5.9-102.6). The overall AVM obliteration rate was 66.6%. Cohort 1 had a significantly higher rate of complete obliteration than cohort 2 (81.0 vs. 55.1%, $P <0.001$). The post-GKRS annual hemorrhage risk was 1.0%. Significant radiosurgery-induced brain edema and radiosurgery-induced cyst formation was reported in n=24 (2.6%) and n=4 (0.5%), respectively. Using multivariate analysis, we identified obliteration predictors as prior AVM hemorrhage (HR= 1.430, 95% CI: 1.182-1.729), higher margin dose (HR=1.136, 95% CI: 1.086-1.188), eloquent location (HR= 0.765, 95%CI: 0.647-0.905), and higher AVM volume (HR=0.982, 95% CI: 0.968-0.997).
Conclusions GKRS is a safe and effective treatment for BAVM. Lack of prior AVM hemorrhage, eloquent location, and higher AVM were unfavorable predictors for post-GKRS obliterations.

AG5-3

Comparison of the outcomes after Gamma Knife radiosurgery for arteriovenous malformations in pediatric and adult patients

Jun Kawagishi, Hidefumi Jokura

Jiro Suzuki Memorial Gamma House, Furukawa Seiryo Hospital, Japan

Introduction The aim of this study is to compare the outcomes after Gamma Knife radiosurgery (GKRS) for arteriovenous malformations (AVM) in pediatric and adult patients with case-control study.
Methods A retrospective analysis was performed on AVM patients who underwent GKRS at our hospital from 1991 to 2021. Patients were classified into pediatric (<18 years) and adult (>=18 years) cohorts and matched in a 1:1 ratio using propensity scores. The complete obliteration rate after GKRS and the incidence of adverse events, including symptomatic bleeding, in both groups were compared and analyzed.
Results Of a total of 848 patients who were eligible for inclusion in this study, 158 were selected for each of the matched cohorts. The mean nidus volume was 5.1 cm^3 for the pediatric group and 5.3 cm^3 for the adult group (p=0.777), the mean prescribed dose was 20.8 Gy and 20.9 Gy (p=0.870), and the mean observation period was 13.7 years and 14.1 years (p=0.591). Cumulative complete obliteration rates at 3/5/10/15/20 years after GKRS were 57.1/67.4/78.5/79.8/81.3% in the pediatric group and 44.8/63.4/75.9/78.2/78.2% in the adult group, respectively, with no significant difference between them (p=0.136). Cumulative adverse event rates at 3/5/10/15/20 years after GKRS were 3.8/4.6/11.4/19.3/19.3% in the pediatric group and 5.1/7.2/11.9/16.6/17.8% in the adult group. Annual incidence was slightly higher in pediatric group (1.2% vs 1.0%), but there was no statistically significantly different (p = 0.466).
Conclusions The outcomes after GKRS for comparable AVMs in pediatric and adult patients were not found to be apparent different. GKRS is a reasonable treatment option for pediatric AVM patients as well as adult patients.

AG5-4

A case of spontaneous obliteration of medium-sized unruptured cerebral arteriovenous malformation accompanied by reduced activity of protein S

Atsuya Akabane[1)], Ryuichi Noda[1)], Mariko Kawashima[1)], Sho Tsunoda[2)], Masafumi Segaw[2)], Tomohiro Inoue[2)]

[1)] Gamma Knife Center, NTT Medical Center Tokyo, Japan
[2)] Department of Neurosurgery, NTT Medical Center Tokyo, Japan

Introduction Spontaneous obliteration of cerebral arteriovenous malformations (AVMs) is rare, and most of them are triggered by intracranial hemorrhage from the AVMs. Meanwhile, protein S is a coenzyme of protein C that exhibits coagulation inhibitory action, and its decreased activity may lead to various types of thrombosis including sinus thrombosis. Here, we report a case of medium-sized unruptured AVM with spontaneous obliteration accompanied by reduced activity of protein S.
Case A 32-year-old female had loss-of-consciousness seizures and headaches since she was 17 years old. As a result of cerebral angiography and magnetic resonance (MR) imaging, she was diagnosed with a right fronto-parietal AVM (Spetzler-Martin Grade IV/2+1+1) and flow-related aneurysm of the anterior cerebral artery, and was referred to our center for gamma knife radiosurgery (GKS). At the patient's wish, GKS was not performed immediately, and so MR imaging follow-up was continued. Follow-up MR imaging after 7 months revealed stenosis of the deep drainer and a high intensity area on fluid-attenuated inversion recovery (FLAIR) around the nidus. The nidus was not detectable on MR angiography obtained after 3 years and 8 months, and cerebral angiography 7 years and 3 months later showed obliteration of the AVM and shrinkage of the anterior cerebral artery aneurysm. Along with this, the high intensity areas on FLAIR also began to contract. Blood tests were performed to investigate the etiology of the spontaneous obliteration and found that protein S activity was reduced (51.9%; the normal range was 63.5-149.0%).
Conclusions Spontaneous obliteration of medium-sized AVMs without hemorrhage is extremely rare. In this case, the decreased activity of protein S may have contributed to the thrombosis. If an enlarged high intensity area on FLAIR is observed during MR imaging follow-up of AVM, it is advisable to continue more careful evaluation because of the possibility of rapid hemodynamic changes in the AVM.

AG6-1

Improved prognosis for NSCLC patients with wildtype/mutant EGFR and brain metastases following stereotactic radiosurgery and immune/targeted therapy

Ai Seon Kuan, Cheng-Chia Lee

Department of Neurosurgery, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan

Introduction Advances in targeted therapy has improved the survival of non-small cell lung cancer (NSCLC) with mutant EGFR but evidence for those with brain metastases (BMs) was inconclusive while prognosis of those with wildtype EGFR remained poor. We examined the differential effect of stereotactic radiosurgery (SRS) and tyrosine kinase inhibitor (TKI) or immune checkpoint inhibitor (ICI) on NSCLC patients with mutant EGFR or wildtype EGFR, respectively.
Methods NSCLC patients with BMs who underwent SRS and/or TKI or ICI therapy were recruited. Overall survival (OS) and intracranial progression free survival (iPFS) following SRS were estimated using Kaplan-Meier methods. Hazard ratios for risk factors were estimated using Cox regression models.
Results For mutant EGFR, the median OS for combined SRS and TKI vs TKI alone vs SRS alone were 35.1 vs. 24.3 vs. 20.8 months, respectively, while the median iPFS were 20.0 vs. 13.8 vs. 11.8 months, respectively. For wildtype EGFR, the median OS for combined SRS and ICI vs. ICI alone vs. SRS alone were 28.1 vs. 17.3 vs. 15.6 months, respectively, while the median iPFS were 28.1 vs. 17.3 vs. 12.8 months, respectively. EGFR co-mutation (double or multiple mutations) was associated with poor OS and iPFS. Multivariable analysis showed that good performance status was associated with superior intracranial tumor control while extracranial metastases was associated with poorer survival.
Conclusions In NSCLC patients with mutant EGFR and BMs, combined SRS and TKI resulted in superior intracranial tumor control and survival and should be considered a standard-of-care treatment. For those with wildtype EGFR, there was evidence for improved intracranial tumor control with combined SRS and ICI while survival appeared to be better with this combined modality.

AG6-2

Can we alleviate the radiation treatment for brain metastasis in the lung cancer patient with EGFR mutation in the era of targeted therapy?

Guan-Ying Chiou[1], Chi-Lu Chiang[4), 6), 9)], Huai-Che Yang[2), 4)], Chia-I Shen[4), 6), 9)], Hsiu-Mei Wu[3), 5)], Yu-Wei Chen, B.A.[2), 3)], Ching-Jen Chen[10)], Yung-Hung Luo[4), 6), 9)], Yong-Sin Hu[3), 4)], Chung-Jung Lin[3), 4)], Wen-Yuh Chung[2), 4)], Cheng-Ying Shiau[4), 5)], Wan-Yuo Guo[3), 4)], David Hung-Chi Pan[2), 8)], Cheng-Chia Lee[2), 4), 7)]

[1)] Neurosurgery, Department of Surgery, Fu Jen Catholic University Hospital, New Taipei City, Taiwan
[2)] Department of Neurosurgery, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[3)] Department of Radiology, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[4)] School of Medicine, National Yang Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan.
[5)] Cancer Center, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[6)] Department of Chest Medicine, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[7)] Brain Research Center, National Yang Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan.
[8)] Department of Neurosurgery, Shuang Ho Hospital, Taipei Medical University, Taipei, Taiwan
[9)] Institute of Clinical Medicine, School of Medicine, National Yang-Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan
[10)] Department of Neurological Surgery, University of Virginia Health System, Charlottesville, Virginia, USA

Whether combined radiation and tyrosine kinase inhibitor (TKI) therapy in non-small cell lung cancer (NSCLC) patients with brain metastases (BMs) and epidermal growth factor receptor (EGFR) mutations confers additional benefits over TKI therapy alone remains controversial. To compare outcomes between combined TKI and stereotactic radiosurgery (SRS) therapy versus TKI therapy alone in NSCLC patients with BMs and EGFR mutations, 280 patients were selected and categorized into two groups, TKI therapy alone (group I, n= 90) and combined therapy (group II, n=190). Cumulative tumor control rates were higher in group II compared to group I (79.8% vs. 31.2% at 36 months, $p<0.0001$). Cumulative overall survival (OS) rates were comparable between groups I and II (43.8% vs. 59.4% at 36 months, $p=0.3203$). Independent predictors of tumor control were older age, fewer number of BMs, lack of extracranial metastasis, and combined SRS and TKI therapy. Independent predictors of overall survival were fewer number of BMs and a higher Karnofsky Performance Status (KPS) score. Although OS rate did not differ between TKI therapy with and without SRS, the addition of SRS to TKI therapy resulted in improvement of intracranial tumor control. The lack of effect on survival rate with the addition of SRS may be attributable to extracranial disease progression. The addition of SRS to TKI therapy is recommended for intracranial disease control in NSCLC patients with BMs and EGFR mutations. Potential benefits may include prevention of neurological deficits and seizures. Future prospective studies may help clarify the clinical outcome benefits of SRS in these patients.

AG6-3

VEGFR-TKI treatment for radiation-induced brain injury after gamma knife radiosurgery for brain metastases from renal cell carcinomas

Ryuichi Noda[1), 2)] , Mariko Kawashima[1)] , Atsuya Akabane[1)]

1) Gamma Knife Center, NTT Medical Center Tokyo, Japan
2) Department of Neurosurgery, NTT Medical Center Tokyo, Japan

Introduction Antiangiogenic vascular endothelial growth factor receptor tyrosine kinase inhibitors (VEGFR-TKIs) play an essential role in systemic therapy for renal cell carcinoma (RCC). Given the known anti-edematous effect of bevacizumab, an antiangiogenic antibody targeting VEGF, VEGFR-TKIs should exert therapeutic effects on radiation-induced brain injury after stereotactic radiosurgery. This preliminary study aimed to investigate the therapeutic effect of VEGFR-TKI against radiation-induced brain injury.
Methods Magnetic resonance images (MRIs) for six patients treated with VEGFR-TKIs who had been diagnosed with radiation-induced brain injury following gamma knife radiosurgery (GKRS) were retrospectively reviewed.
Results The median brain edema volume (BEV) and tumor mass volume (TMV) in the pre-TKI period were 57.6 mL (range: 39.4–188.2) and 3.2 mL (range: 1.0–4.6), respectively. Axitinib, pazopanib (followed by cabozantinib), and sunitinib were administered in four, one, and one cases, respectively. The median BEV and TMV in the post-TKI period were 4.8 mL (range: 1.5–27.8) and 1.6 mL (range: 0.4–3.6), respectively, over 2–14 weeks. The median rates of reduction in BEV and TMV were 90.8% (range: 51.9–97.6%) and 57.2% (range: 20.0–68.6%), respectively. Post-TKI values for BEV ($p=0.027$) and TMV ($p=0.008$) were significantly lower than pre-TKI values. Changes in volume were correlated with TKI use.
Conclusions The current study is the first to demonstrate the therapeutic effects of VEGFR-TKIs on radiation-induced brain injury in patients with brain metastases from RCC treated via GKRS.

AG6-4

Effectiveness of immune checkpoint inhibitors in combination with stereotactic radiosurgery for patients with brain metastases from lung cancer: a propensity score-matched analysis

Shoji Yomo

Division of Radiation Oncology, Aizawa Comprehensive Cancer Center, Aizawa Hospital, Japan

Introduction Stereotactic radiosurgery (SRS) is the mainstay for treating brain metastases (BM) from lung cancer (LC). In recent years, immune checkpoint inhibitors (ICI) have been applied to metastatic LC and have contributed to improved outcomes. The authors investigated whether SRS with concurrent ICI for LC BM prolongs overall survival (OS) and improves intracranial disease control, and whether there are any safety concerns.
Methods Patients who underwent SRS for LC BM in our institution between January 2015 and December 2021 were included. Concurrent use of ICI was defined as no more than 3 months between SRS and ICI administration. The two treatment groups which had a similar likelihood of receiving concurrent ICI were generated by a propensity score matching (PSM) (match ratio 1:1) based on 12 potential prognostic covariates. Patient survival and control of intracranial disease were compared between the groups with and without concurrent ICI (ICI+SRS vs. SRS) by time-dependent analyses taking into account competing events.
Results In total, 585 LC BM patients (494 NCSCL and 91 SCLC) were eligible. Of those, 91 patients (16%) received concurrent ICI. Two patient groups of 87 patients (ICI+SRS group and SRS group) were generated by PSM. The 1-year survival rates of the ICI+SRS and SRS groups after the initial SRS were 65% and 46%, the median survival times 16.9 and 10.0 months, respectively (HR: 0.62 95% CI: 0.43–0.90, P=0.012). The 1-year cumulative neurological mortality rates were 9% and 15%, respectively (HR: 0.40 95% CI: 0.18–0.87, P=0.021). The 1-year local failure rates were 10% and 13% (HR: 0.68 95% CI: 0.29–1.6, P=0.38) and the 1-year distant recurrence rates were both 44% (HR: 0.99 95% CI: 0.64–1.5, P=0.95). CTCAE grade 4 toxicity (intratumoral hemorrhage immediately after SRS) occurred in 1 SRS group patient. CTCAE grade 2/3 toxicity was observed in 3 patients in the ICI-SRS group and 5 in the SRS group.
Conclusions The present study found that SRS with concurrent ICI for LC BM patients provided prolonged survival and lower neurological mortality rate. Intracranial disease control was similar between groups, with no apparent increase in treatment-related adverse events.

AG6-5

Gamma Knife radiosurgery for surgical cavity of brain metastases: factor analysis and gene consideration

Huang Yi-Han[1)], Huai-Che Yang[1), 3)], Chi-Lu Chiang[3), 5), 7)], Hsiu-Mei Wu[2), 3)], Yung-Hung Luo[3), 5)], Yong-Sin Hu[2), 3)], Chung-Jung Lin[2), 3)], Wen-Yuh Chung[1), 3)], Cheng-Ying Shiau[3), 4)], Wan-Yuo Guo[2), 3)], Cheng-Chia Lee[1), 3), 6)]

[1)] Department of Neurosurgery, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[2)] Department of Radiology, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[3)] School of Medicine, National Yang-Ming University, Taipei, Taiwan
[4)] Cancer Center, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[5)] Department of Chest Medicine, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[6)] Brain Research Center, National Yang - Ming University, Taipei, Taiwan
[7)] Institute of Clinical Medicine, School of Medicine, National Yang-Ming University, Taipei, Taiwan

Introduction Although surgical resection may remove the brain metastasis gross totally, the viable metastasis may exist in surgical cavity since the nature of malignancy. The presence of these viable tumors may cause marginal recurrence and influence of local tumor control. Stereotactic radiosurgery (SRS) provide a good local control for brain metastasis in the past decades, however, the radiation to the surgical cavity for preventing recurrence is a novel idea and the efficacy and safety are still debatable. This paper presents a retrospective analysis for local tumor control and complications following surgical resection and postoperative stereotactic radiosurgery (SRS) for brain metastases. We also investigated the influence of gene mutations on the efficacy of Gamma Knife radiosurgery (GKRS).
Methods This study included 97 patients (103 brain metastases) who underwent GKRS treatment and for whom surgical type, original tumor, gene mutation status, demographics, performance status, and tumor characteristics were available. Radiological images were obtained at 3 months after GKRS and at 3 month intervals thereafter. Kaplan-Meier plots and Cox regression analysis were used to correlate the clinical features to tumor control and overall survival.
Results The tumor control rates and overall 12-month survival rates were 75.0% and 89.6%, respectively. Tumor control rates in the radiation group versus the non-radiation group were 83.1% vs. 57.7% at 12-months and 66.1% vs. 50.5% at 24-months. During the 2-year follow-up period after SRS, the intracranial response rate in the post craniotomy radiation group was higher than that in the non-radiation group (p=0.027). Cox regression multivariate analysis identified post craniotomy radiation as predictor of tumor control (p =0.035).
Conclusions The current study demonstrated that, SRS for surgical cavity can provide better local tumor control, however, SRS for surgical cavity cannot provide better overall survival.

AG6-6

Gamma knife radiosurgery for metastatic brain tumors from ovarian cancer (JLGK1801)

Shigeo Matsunaga[1), 2)], Takashi Shuto[1), 2)], Toru Serizawa[3)], Kyoko Aoyagi[4)], Toshinori Hasegawa[5)], Jun Kawagishi[6)], Shoji Yomo[7)], Hiroyuki Kenai[8)], Kiyoshi Nakazaki[9)], Akihito Moriki[10)], Yoshiyasu Iwai[11)], Kazuhiro Yamanaka[12)], Tetsuya Yamamoto[13)]

[1)] Department of Neurosurgery and [2)] Stereotactic Radiotherapy Center, Yokohama Rosai Hospital, Japan
[3)] Tokyo Gamma Unit Center, Tsukiji Neurological Clinic, Japan
[4)] Department of Neurosurgery, Gamma Knife House, Chiba Cerebral and Cardiovascular Center, Japan
[5)] Department of Neurosurgery, Gamma Knife Center, Komaki City Hospital, Japan
[6)] Department of Neurosurgery, Jiro Suzuki Memorial Gamma House, Furukawa Seiryo Hospital, Japan
[7)] Division of Radiation Oncology, Aizawa Comprehensive Cancer Center, Aizawa Hospital, Japan
[8)] Department of Neurosurgery, Nagatomi Neurosurgical Hospital, Japan
[9)] Department of Neurosurgery, Brain Attack Center Ota Memorial Hospital, Japan
[10)] Department of Neurosurgery, Mominoki Hospital, Japan
[11)] Department of Neurosurgery, Tominaga Hospital, Japan
[12)] Department of Neurosurgery, Osaka City General Hospital, Japan
[13] Department of Neurosurgery, Yokohama City University Graduate School of Medicine, Japan

Introduction Ovarian cancer (OC) has a low frequency of brain metastasis, and the prognosis for patients with brain metastasis is extremely poor. However, the frequency of brain metastasis is on the increase due to recent improvements in diagnostic imaging techniques and the introduction of molecular-targeted drugs. This study, led by the Japanese Leksell Gamma Knife Society (JLGK), was a retrospective observational study of the outcomes of patients treated with gamma knife radiosurgery (GKRS) for brain metastases from OC (JLGK1801 study).
Methods 118 patients with 566 brain metastases from OC who underwent GKRS at 10 GKRS centers in Japan were retrospectively reviewed.
Results The median overall time (OS) after GKRS was 18.1 months, 78.2% at 6 months, and 65.6% at 12 months. Factors significantly affecting OS were control of the primary tumor and the number of brain metastases. The incidence of neurological death was 3.2% at 6 months and 4.6% at 12 months in 10 patients with meningeal carcinomatosis. The incidence of neurological deterioration was 7.2% at 6 months and 13.5% at 12 months, and the incidence of new intracranial lesions was 20.6% at 6 months and 40.2% at 12 months. The local tumor control (LTC) rates at 6 and 12 months after GKRS were 97.6% and 95.2%. Factors significantly affecting LTC were peritumoral edema at GKRS, tumor volume, and prescribed dose. Comparison of 313 lesions in 69 patients with confirmed histopathological diagnosis of OC in two groups (161 lesions in 37 patients with serous adenocarcinoma and 152 lesions in 32 patients with other histological types) showed that patients with serous adenocarcinoma had significantly longer OS and higher LTC after GKRS.
Conclusions GKRS for brain metastases from OC was relatively safe and showed satisfactory results in terms of OS and LTC after irradiation. Serous adenocarcinoma showed significantly longer survival and higher local control than other histologic types.

AG6-7

Volume prediction for large brain metastases after hypofractionated gamma knife radiosurgery through artificial neural network

Hyeong Cheol Moon[1)], Dongsuk Jang[1)], Young Seok Park[1), 2), 3)]

[1)] Department of Neurosurgery, Gamma Knife Icon Center, Chungbuk National University Hospital, Cheongju, Republic of Korea
[2)] Department of Medical Neuroscience, College of Medicine, Chungbuk National University, Cheongju, Republic of Korea
[3)] Department of Neurosurgery, College of Medicine, Chungbuk National University, Cheongju, Republic of Korea.

The effectiveness of single-session gamma knife radiosurgery (GKRS) for small metastatic brain tumors has been proven, but hypofractionated GKRS (hfGKRS) for large brain metastases (BM) from the linear quadratic (LQ) model is uncertain. The purpose of this study was to investigate volume changes large BM after hfGKRS from the LQ model and predict volume changes using artificial neural network (ANN). We retrospectively investigated the clinical findings of 28 patients who underwent hfGKRS with large BM (diameter >3 cm or volume >10 cc). A total of 44 tumors were extracted from 28 patients with features. We randomly divided 30 large brain tumors as training set and 14 large brain tumors as test set. To predict the volume changes after hfGKRS, we used ANN models (single-layer perceptron (SLP) and multi-layer perceptron (MLP)). The volume reduction was 96% after hfGKRS for large BM from the LQ model. ANN model predicted volume changes with 70% and 80% accuracy for SLP and MLP, respectively. Even in large BM, hfGKRS from the LQ model could be a good treatment option. Additionally, the MLP model could predict volume changes with 80% accuracy after hfGKRS for large BM.

AG7-1

Natural history of lung squamous cell brain metastases in patients treated with radiosurgery: a thirty-year experience at a Tertiary Medical Center

Yu-Chi Chen[1], Huai-Che Yang[1,3], Chi-Lu Chiang[3,5,8], Ching-Jen Chen[9], Chia-I Shen[3,5], Hsiu-Mei Wu[2,3], Yung-Hung Luo[3,5], Yong-Sin Hu[2,3], Chung-Jung Lin[2,3], Wen-Yuh Chung[1,3], Cheng-Ying Shiau[3,4], Wan-Yuo Guo[2,3], David Hung-Chi Pan[1,7], Cheng-Chia Lee[1,3,6]

[1] Department of Neurosurgery, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[2] Department of Radiology, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[3] School of Medicine, National Yang Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan
[4] Cancer Center, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[5] Department of Chest Medicine, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[6] Brain Research Center, National Yang Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan
[7] Department of Neurosurgery, Shuang Ho Hospital, Taipei Medical University, Taipei, Taiwan
[8] Institute of Clinical Medicine, School of Medicine, National Yang Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan
[9] Department of Neurosurgery, The University of Texas Health Science Center, Houston, TX, USA

Introduction In this study we report our 30-year experience in stereotactic radiosurgery (SRS) treatment of lung squamous cell carcinoma (LUSC) brain metastases (BMs). It will serve to provide detailed longitudinal outcomes and predictors of efficacy in treating LUSC-BMs with SRS.
Method We retrospectively reviewed 51 patients and 109 tumors treated with SRS at our center between 1993–2022. Patient demographics, PDL1 genotype, immunotherapy use and mortality cause were recorded. Radiological and clinical outcomes were followed at 1-3-month intervals post-SRS. Cox-regression analysis and Kaplan-Meier survival curves were performed in statistical analysis.
Results We included 37 male and 14 female patients (median age 62.7 years at BM diagnosis). Median overall survival (OS) time was 6.9 months, 6-month OS rate was 62.1%, and Karnofsky performance scale (KPS) was the only independent predictor. Median time for local control maintenance was 7.6 months, 6-month local control rate was 69.1%, with TKI as the only independent predictor. Median time to distant failure was 5.3 months, 6-month distant failure rate was 48.9%, and factors with significant impact included gender($p<0.001$), presence of extracranial metastases ($p<0.001$), use of immunotherapy($p<0.001$), PDL1 genotype ($p=0.034$), and total intracranial metastases number ($p=0.002$). However, no definitive benefits of immunotherapy were identified in patients with higher PDL1 mutational tumors.
Conclusions In this study we defined the natural history of disease progression and outcomes in SRS-treated LUSC-BM patients. We also identified predictors of OS and tumor control among these patients. The findings of this study will serve as a guide when counseling these patients for SRS.

AG7-2

withdrawn

.

AG7-3

Large cystic brain metastases are treatable without drainage by hypofractionated or staged radiosurgery

Takeshi Kondoh, Haruka Enami, Takashi Mizowaki, Hirotomo Tanaka, Yoshiyuki Takaishi, Japan

Department of Neurosurgery, Shinsuma General Hospital, Japan

Introduction Hypofractionated stereotactic radiotherapy and staged-radiosurgery are useful for the treatment of large metastatic brain tumors. If the tumor is cystic, drainage is effective for early symptom relief and reduction of total radiation dose, but the risks of wound infection and meningeal dissemination are not neglectable. In this study, we retrospectively summarized our experiences of large cystic metastases which were treated by Gamma Knife radiosurgery without drainage.
Methods Fourteen patients with cystic metastatic brain tumors with a maximum diameter of 30 mm or more were treated at our institution during the period between 2019 and 2021. Mean age was 71.1 years (42-92 years; median 72 years), KPSs were 60-100%, primary tumors were lung cancer in 8 cases, breast cancer in 4 cases, and others in 2 cases. In 11 cases, drainage was avoided intentionally. Three cases were referral cases in which drainage had been performed, but sufficient cyst reduction was not obtained. The average maximum diameter was 37 mm (30-44 mm), 5-10 hypofractionated irradiation was performed in 3 cases, 2-3 staged-radiosurgery was performed in 11 cases, and the dose was 24-35 Gy.
Results Asymptomatic patients (7 cases) did not deteriorate after treatment, and symptomatic patients (7 cases) improved in motor paralysis and cerebellar ataxia. During the follow-up period (10.6 months on average), there were no local recurrences and the tumor volume decreased to 31.2% on average. There was no exacerbation of brain edema or meningeal dissemination.
Discussion The idea of reducing the size to 3 cm or less by drainage surgery is mostly for early improvement of the symptoms. In cystic tumors, however, there is less risk of post-irradiation edema compared to solid tumors, and the reduction in tumor size after treatment were likely a favorable impression. From the viewpoint of potential risks of bleeding, infection, and meningeal dissemination, avoiding drainage surgery seems to be feasible.
Conclusions Avoiding cyst drainage and performing fractionated or staged treatment seems to result in acceptable outcome in large cystic metastatic brain tumors.

AG7-4

Fractionated Gamma Knife radiosurgery after cyst aspiration for large cystic brain metastases: case series and literature review

Ryuichi Noda[1), 2)], Mariko Kawashima[1)], Atsuya Akabane[1)]

[1)] Gamma Knife Center, NTT Medical Center Tokyo, Japan
[2)] Department of Neurosurgery, NTT Medical Center Tokyo, Japan

Introduction Tumor cyst aspiration followed by Gamma Knife radiosurgery (GKRS) for large cystic brain metastases is a reasonable and effective management strategy. However, even with aspiration, the target lesion tends to exceed the dimensions of an ideal target for stereotactic radiosurgery. In this case, the local tumor control rate and the risk of complication might be a critical challenge. This study is aimed to investigate whether fractionated GKRS (f-GKRS) could solve these problems.
Methods Between May 2018 and April 2021, eight consecutive patients with nine lesions were treated with f-GKRS in five or ten sessions after cyst aspiration. The aspiration was repeated as needed throughout the treatment course to maintain the cyst size and shape. The patient characteristics, radiologic tumor response, and clinical course were reviewed using medical records.
Results The mean follow-up duration was 10.2 (2–28) months. The mean pre-GKRS volume and maximum diameter were 16.7 (5–55.8) mL and 39.0 (31–79) mm, respectively. The mean tumor volume reduction achieved by aspiration was 55.4%. The tumor volume decreased for all lesions, and symptoms were alleviated in all patients. The median overall survival was 10.0 months, and the estimated 1-year survival rate was 41.7% (95% CI: 10.9–70.8%). The local tumor control rate was 100%. No irradiation- related adverse events were observed.
Conclusions f-GKRS for aspirated cystic brain metastasis is a safe, effective, and less invasive management option for large cystic brain metastases.

AG7-5

Usefulness of Gamma Knife stereotactic radiotherapy for repeat brain metastasis in the choroid plexus from renal cell carcinoma: a case report

Kazunori Koyama[1)], Yasuhiro Matsushita[1)], Yoshimasa Mori[2)], Yoshihisa Kida[1)], Atsuo Masago[1)]

[1)] Gamma Knife Center, Okuma Hospital, Japan
[2)] Center for Advanced IGRT, Shin-Yurigaoka General Hospital, Japan

Introduction Metastases to brain choroid plexus are rare but occur in renal cell carcinoma or thyroid carcinoma patients. A case of renal cell carcinoma metastasis to the choroid plexus at Luska foramen is presented.
Case presentation A 74-year-old female developed clear cell carcinoma in the right kidney and right nephrectomy was performed. A half year later multiple brain metastases in the right Luska choroid plexus (5.4 ml) and in the right occipital lobe (0.01 ml) were developed. Both were successfully treated by Gamma Knife stereotactic radiosurgery (26 Gy in 2 fractions and 20 Gy in single fraction respectively). One year later another metastasis to the right lateral ventricle choroid plexus developed. It was also successfully treated Gamma Knife stereotactic radiosurgery again.

AG7-6

Gamma Knife radiosurgery: A safe and effective treatment for brain metastases in pregnancy

Beehong Soon[1)], Ramesh Kumar[1)], Fuad Ismail[2)], Marfu'ah Nik Ezzamudden[2)], Shahizon Azura Mohamed Mukari[3)], Aida-Widure Mustapha Mohd Mustapha[4)], Aida Hani Mohd Kalok[5)], Norlia Abdullah[6)], Ian Paddick[7)], Siti Khadijah Hamsan[2,8)]

[1)] Neurosurgery Unit, Department of Surgery, Faculty of Medicine, National University of Malaysia, Kuala Lumpur, Malaysia
[2)] Department of Oncology and Radiotherapy, Faculty of Medicine, National University of Malaysia, Kuala Lumpur, Malaysia
[3)] Department of Radiology, Faculty of Medicine, National University of Malaysia, Kuala Lumpur, Malaysia
[4)] Radiology Department, Canselor Tuanku Muhriz Hospital, UKM, Kuala Lumpur, Malaysia
[5)] Department of Obstetrics and Gynaecology, Faculty of Medicine, National University of Malaysia, Kuala Lumpur, Malaysia
[6)] Breast Reconstructive Surgery Unit, Department of Surgery, Faculty of Medicine, National University of Malaysia, Kuala Lumpur, Malaysia
[7)] Gamma Knife Centre, National Hospital for Neurology and Neurosurgery, London, United Kingdom
[8)] Diagnostic Imaging and Radiotherapy, Faculty of Allied Health, National University of Malaysia, Kuala Lumpur, Malaysia

Introduction Brain metastases during pregnancy poses complex conundrum in management. Gamma Knife (GK) stereotactic radiosurgery (SRS) offers valuable option to clinicians in this scenario.
Methods We describe the safety and effectiveness of GK SRS in treating solitary cerebellar metastasis in a woman with recurrent breast cancer at third trimester of pregnancy. Dosimetry readings during trial run and actual treatment were recorded and follow-up MRI was performed after one month.
Results A 42-year-old woman presented with dizziness and unsteady gait during her third pregnancy at 28 weeks of gestation. She is a known case of triple negative breast carcinoma with local recurrence in 2021 and had completed second line chemotherapy 10-months ago. Upon presentation, she was fully conscious with neurological examination showing right cerebellar signs. MRI brain showed solitary right cerebellar enhancing mass, 2x2.7x2.1cm with perilesional edema and hemosiderin rim likely represent hemorrhagic metastasis. Chest radiograph depicted multiple cannon ball lesions. Obstetrical assessment revealed singleton fetus with gestation appropriate growth parameters and an estimated fetal weight of 1kg. Following multidisciplinary discussion, she agreed for urgent single session SRS to the brain metastasis with 2 cycles of 3-weekly paclitaxel chemotherapy. This will be followed by planned delivery of the fetus at term before subsequent palliative treatment. During the frame-based GK SRS, a trial run with dosimeters placed on phantom showed radiation exposure way below 100mSv tolerance. Actual treatment was performed at 16Gy of 50% isodose in 24 shots over 39.7 minutes beam on time. The treatment plan showed 98% coverage, 89% selectivity and gradient index 2.98. Dosimeters placed near uterine fundus and suprapubic region (consistent with concomitant ultrasound localization of fetal head) recorded 2.83mSv and 0.27mSv respectively. She successfully completed SRS treatment without complications. A repeat MRI after 4 weeks showed marked reduction of lesion size to 0.8x1x0.8cm. She was reassured for safe vaginal delivery planned at 36 weeks.
Conclusions GK SRS is safe and effective in treating pregnant patients with brain metastases. It allows concurrent chemotherapy, eliminates anesthetic risk while giving time to achieve adequate gestational age and fetal weight before birth. It improves quality of life and fetal outcome with lower perinatal risk and maternal morbidity.

AG8-1

Gamma Knife Surgery for twenty or more brain metastases - a pilot and feasibility study

Jiani Sherry Liu[1)], Bengt Karlsson[1)], Balamurugan A Vellayappan[2)], Andrea Wong[3)], Yvonne Ang[3)], Ai Peng Tan[4)], Tseng Tsai Yeo[1)]

[1)] Department of Surgery, Division of Neurosurgery, National University Hospital, Singapore
[2)] Department of Radiation Oncology, National University Hospital, Singapore
[3)] Medical Oncology, National University Hospital, Singapore
[4)] Medical Radiology, National University Hospital, Singapore

Introduction One of the factors deciding whether Whole Brain Radiation Therapy (WBRT) or Gamma Knife Surgery (GKS) should be recommended for patients with multiple brain metastases (BM) has historically been the number of intracerebral lesions. The generally accepted upper limit for GKS has increased over the years from 3-4 to around ten at present.
Methods Our hypothesis in this prospective feasibility study was that also patients with ≥20 BM may benefit from GKS. The limitations using GKS for patients with numerous metastases are the long treatment times, the integral radiation dose to the brain and the clinical impact of the potential micro-metastases that are left untreated when using GKS instead of WBRT. Furthermore, the survival time must be sufficiently long for a sufficient number of patients to justify GKS.
Results We have now treated 61 patients with ≥20 BM, and we have complete follow up on all but two of them. None of the patients aborted the treatment in spite of the sometimes very long treatment times. A significant, but transient, radiation induced complication developed after one month in one patient. The survival time was more than six months for 2/3, more than one year for 1/2 and more than two years for 1/4 of the patients. The ECOG value was the only parameter predicting survival time ($P<0.01$). Half of the patients developed distal recurrences within six months following GKS, most being managed with repeat GKS or systemic treatment. The likelihood for salvage WBRT within six months following GKS was <10%, suggesting that micro-metastases are of limited clinical importance.
Conclusions GKS is indicated for selected patients in good clinical condition with 20 or more brain metastases.

AG8-2

Multi-session radiosurgery for numerous small brain metastases

Yasuhiro Matsushita[1)], Yoshimasa Mori[2)], Kazunori Koyama[1)], Yoshihisa Kida[1)], Atsuo Masago[1)]

[1)] Gamma Knife Center, Okuma Hospital, Japan
[2)] Center for Advanced IGRT, Shin-Yurigaoka General Hospital, Japan

Introduction Treatment of multiple brain metastases more than 10 is challenging and has been controversial. Whole brain radiotherapy (WBRT) is generally believed to be the first treatment choice. However, this is not always adequate because of the inconsistent effects and combined adverse effects such as dementia which may be resulted afterward. In order to escape from mental deterioration, WBRT has to be replaced by the other treatment methods like radiosurgery. We have performed such a treatment for numerous small brain metastases by Gamma Knife stereotactic radiosurgery (GKS).
Methods Twelve cases of numerous (more than 30) brain metastases were treated by GKS retrospectively during a period from July, 2016 to June, 2021. They were seven males and five females with the mean age of 63.4 years. All of them were with lung cancers. Mean total session number was 5.42 times, ranging 2 to 17. Each tumor was treated with the margin dose between 14 to 20 Gy. The tumor number treated in whole sessions was ranged from 31 to 144 (mean, 70.8).
Results Almost all the irradiated tumors either disappeared or shrank at the patient's death or at the last follow-up, though new metastatic tumors were subsequently developed in some cases which required an additional treatment with GKS. At the last follow-up (3 to 51 months after GKS), nine cases were alive and well and three were dead. As adverse effects, two cases demonstrated seizures by radiation brain injury and another showed a gait disturbance. No apparent mental deterioration was observed during follow-up.
Conclusions Local tumor control without any severe side effects including mental deterioration was achieved, which seemed to be consistent with radiosurgery in cases with 10 or less brain metastases. Radiosurgery for numerous small brain metastases may be preferable rather than WBRT.

AG8-3

Leukoencephalopathy in patients with brain metastases who received radiosurgery with or without whole brain radiotherapy

Chan-Wei Liu[1], Huai-Che Yang[1), 3)], Chi-Lu Chiang[3), 5), 8)], Chia-I Shen[3), 5)], Hsiu-Mei Wu[2), 3)], Yung-Hung Luo[3), 5)], Yong-Sin Hu[2), 3)], Chung-Jung Lin[2), 3)], Wen-Yuh Chung[1), 3)], Cheng-Ying Shiau[3), 4)], Wan-Yuo Guo[2), 3)], David Hung-Chi Pan[1), 7)], Cheng-Chia Lee[1), 3), 6)]

[1)] Department of Neurosurgery, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[2)] Department of Radiology, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[3)] School of Medicine, National Yang Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan
[4)] Cancer Center, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[5)] Department of Chest Medicine, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[6)] Brain Research Center, National Yang Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan
[7)] Department of Neurosurgery, Shuang Ho Hospital, Taipei Medical University, Taipei, Taiwan
[8)] Institute of Clinical Medicine, School of Medicine, National Yang Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan

Introduction Whole brain radiation therapy (WBRT) for brain metastases (BMs) is a common cause of radiation-induced leukoencephalopathy; however the safety of alternative stereotactic radiosurgery (SRS) remains unclear. This study examined the incidence of leukoencephalopathy in patients treated with SRS alone versus WBRT plus SRS for BMs with a focus on the relationship between prognostic factors and leukoencephalopathy.
Methods Analysis was performed between 2002 and 2021. The total enrollment was 993 patients with the distribution: WBRT plus SRS (n=291) and SRS only (n=702). Leukoencephalopathy was graded from 0 to 3 for changes in white matter indicated by the MRI after WBRT or SRS. Patient characteristics and SRS dosimetric parameters were reviewed to identify factors that contributed to the incidence of leukoencephalopathy or overall survival.
Results The incidence of leukoencephalopathy was consistently higher in WBRT plus SRS group than in SRS alone group ($p < 0.001$). Leukoencephalopathy was also associated with a larger total tumor volume ($\geqq 28cm^3$; p=0.028) and age (>77 years; p=0.025). Nonetheless, the SRS integral dose to skull in the subgroup of WBRT plus SRS treatment was not demonstrated significance in development of leukoencephalopathy (p=0.986 for integral dose 1-2J, p=0.776 for integral dose>2J).
Conclusions This study revealed that SRS is safe for oligo-BMs in terms of leukoencephalopathy development. Patient age and total tumor volume were identified as important factors in assessing the development of leukoencephalopathy. The additional of SRS (even at an integral dose>2J) did not increase the incidence of leukoencephalopathy.

AG8-4

Whole-brain radiotherapy vs. Localized radiotherapy after resection of brain metastases in the era of targeted therapy: a retrospective Study

Se-Hyuk Kim[1)] , Jaho Koo[1)], Tae Hoon Roh[1)], Sang Ryul Lee[1)], Young-Taek Oh[2)]

[1)] Gamma Knife Center, Brain Tumor Center, Department of Neurosurgery, Ajou University Medical Center, Suwon, Korea
[2)] Brain Tumor Center, Department of Radiation Oncology, Ajou University Medical Center, Suwon, Korea

Whether targeted therapy (TT) and radiotherapy impact survival after resection of brain metastases (BM) is unknown. The purpose of this study was to analyze the factors affecting overall survival (OS), local control (LC), distant control (DC), and leptomeningeal metastases (LMM) in patients who had undergone resection of BM. We retrospectively analyzed 124 consecutive patients who had undergone resection of BM between 2004 and 2020. Patient information about age, sex, Karnofsky Performance Scale (KPS), origin of cancer, synchronicity, tumor size, status of primary cancer, use of TT, extent of resection, and postoperative radiotherapy was collected. Radiation therapy was categorized into whole-brain radiotherapy (WBRT), localized radiotherapy (local brain radiotherapy or stereotactic radiosurgery (LBRT/SRS)), and no radiation. We identified factors that affect OS, LC, DC, and LMM. In multivariable analysis, significant factors for OS were higher KPS score (≥90) (HR 0.53, $p = 0.011$), use of TT (HR 0.43, $p = 0.001$), controlled primary disease (HR 0.63, $p = 0.047$), and single BM (HR 0.55, $p = 0.016$). Significant factors for LC were gross total resection (HR 0.29, $p = 0.014$) and origin of cancer ($p = 0.041$). Both WBRT and LBRT/SRS showed superior LC than no radiation (HR 0.32, $p = 0.034$ and HR 0.38, $p = 0.018$, respectively). Significant factors for DC were use of TT (HR 0.54, $p = 0.022$) and single BM (HR 0.47, $p = 0.004$). Reduced incidence of LMM was associated with use of TT (HR 0.42, $p = 0.038$), synchronicity (HR 0.25, $p = 0.028$), and controlled primary cancer (HR 0.44, $p = 0.047$). TT was associated with prolonged OS, improved DC, and reduced LMM in resected BM patients. WBRT and LBRT/SRS showed similar benefits on LC. Considering the extended survival of cancer patients and the long-term effect of WBRT on cognitive function, LBRT/SRS appears to be a good option after resection of BM.

AG8-5

Treatment results of post-stereotactic radiosurgical recurrence in patients with brain metastases

Masaaki Yamamoto[1), 2)], Yasuhiro Kikuci[1)], Sonomi Sato[1)]

[1)] Department of Neurosurgery, Southern Tohoku Hospital, Japan
[2)] Katsuta Hospital Mito GammaHouse, Japan

Introduction There is little information on treatment results of post-stereotactic radiosurgical (SRS) recurrence in brain metastasis (BM) patients. We aimed to reappraise this issue.
Methods This IRB-approved retrospective cohort study was based on our prospectively-accumulated database including 3892 consecutive patients undergoing gamma knife (GK) SRS performed for BMs during the 1998-2022 period. We selected 72 BM patients who underwent some treatment (Tx) for local recurrence and in whom MR imaging was performed at least once after Tx for this study (female; 47, male; 25, mean age 66 (range; 30-77) years.
Results As of August, 2022, no further recurrence has occurred during median post-Tx observation period of 15.4 (IQR: 8.9-29.0) months. Post-Tx median survival time (MST, months) which, therefore, was same as further recurrence-free survival time was 23.8 (95% CI; 17.9-51.3). Regarding Tx, SRS was performed in 56 patients, surgical removal in 15 and erlotinib administration in the other one. Post-Tx MSTs did not differ between the two patient groups, i.e., having SRS (21.5, 95% CI; 15.5-51.3) vs surgical removal (37.9, 95% CI; 9.3-na, p=0.58). Among 56 patients with SRS, 11 (19.6%) experienced SRS-related complications (RTOG grade 2 in 53 and grade 3 in the remaining three).
Conclusions Our results suggest that either SRS or surgical removal was very effective for post-SRS local recurrence while incidence of SRS-related complications was slightly higher than reported rates after single course of SRS.

AG8-6

A new tool for assessing risks of systemic and neurologic death in brain metastasis patients undergoing Gamma Knife radiosurgery

Toru Serizawa[1)] , Yoshinori Higuchi[2)], Kouzou Murakami[3)], Kyoko Aoyagi[4)]

[1)] Tokyo Gamma Unit Center, Tsukiji Neurological Clinic, Japan
[2)] Department of Neurological Surgery, Chiba University Graduate School of Medicine, Japan
[3)] Division of Radiation Oncology, Department of Radiology, Showa University of Medicine, Japan
[4)] Gamma Knife House, Chiba Cerebral and Cardiovascular Center, Japan

Introduction To optimize treatment intensity in Gamma Knife radiosurgery (GKS) for brain metastasis (BM) it is essential to independently assess risks for both systemic death (SD) and neurologic death (ND). Herein, we propose a new tool, the "SD-ND risk assessment".
Methods Four extracranial disease (ECD) factors for SD and 2 intracranial disease factors (ICD) for ND were obtained using the Fine and Gray proportional hazard model in 4530 consecutive BM cases treated with GKS during a 24-year period (1998-2021). There were 1853 lung-adenocarcinoma, 686 non-adeno/non-small cell lung, 427 small cell lung, 687 gastrointestinal tract, 568 breast, 127 urogenital and 182 other cancers. We defined the ECD score as followings, KPS score (≤70%=0, 80-100%=1), control of primary tumor (active=0, controlled=1), extra-cranial metastases (yes=0, no=1) and prognostic biomarkers (no/unknown=0, yes=1). We classified SD risk into three groups, i.e., SD high-risk with total ECD score of 0 or 1, intermediate (Im, 2) and low (3 or 4). The ICD score was defined as MRI findings of nodular leptomeningeal dissemination (yes=0, no=1) and maximum BM diameter (>2.5cm=0, ≤2.5cm=1). ND risk was divided into two groups, "ND high-risk" with total ICD score of 0 or 1 and "low" with those of 2. The 2 ND risk groups were incorporated into the 3 SD risk groups, e.g., SD-high & ND-low or SD-Im & ND high, as the "SD-ND risk assessment".
Results The one-year cumulative SD and ND incidences were 16.6% and 3.3% in the SD-low & ND-low (n=567), 20.4% and 8.8% in the SD-low & ND-high (n=382), 53.1% and 5.3% in the SD-Im & ND-low (n=946), 45.4% and 10.6% in the SD-Im & ND-high (n=764), 73.4% and 3.7% in the SD-high & ND-low (n=911), 70.8% and 13.3% in the SD-high &ND-high (n=960), respectively, risk groups. This SD-ND risk assessment was validated in lung, gastrointestinal tract and breast cancers.
Conclusions Our SD-ND risk assessment was found to be a very useful and robust tool for assessing both SD and ND risks and optimization of radiation treatment intensity in GKS-treated BM patients.

AG9-1

Development of expanding hematoma and expanding cysts in AVMs after GKS

Han-Song Tseng[1], Huai-Che Yang[1,3], Chi-Lu Chiang[3,5,8], Ching-Jen Chen[9], Chia-I Shen[3,5], Hsiu-Mei Wu[2,3], Yung-Hung Luo[3,5], Yong-Sin Hu[2,3], Chung-Jung Lin[2,3], Wen-Yuh Chung[1,3], Cheng-Ying Shiau[3,4], Wan-Yuo Guo[2,3], David Hung-Chi Pan[1,7], Cheng-Chia Lee[1,3,6]

[1] Department of Neurosurgery, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[2] Department of Radiology, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[3] School of Medicine, National Yang Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan
[4] Cancer Center, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[5] Department of Chest Medicine, Taipei Veterans General Hospital, Taipei, Taiwan
[6] Brain Research Center, National Yang Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan
[7] Department of Neurosurgery, Shuang Ho Hospital, Taipei Medical University, Taipei, Taiwan
[8] Institute of Clinical Medicine, School of Medicine, National Yang Ming Chiao Tung University, Taipei, Taiwan
[9] Department of Neurosurgery, The University of Texas Health Science Center, Houston, TX, USA

Introduction Expanding cysts and hematomas are the most common late complications after gamma knife surgery (GKS) for arteriovenous malformations (AVMs) and still have debatable mechanism of formation. Therefore, the present study reviews a case series of 18 patients with expanding cysts or hematomas to evaluate the clinical, imaging, and pathologic aspects of the complications and to discuss the possible mechanisms for the formation of the late complications.
Methods Retrospective analysis was conducted on 1072 patients who underwent gamma knife surgery for brain AVM at Taipei Veterans General Hospital between 1993/3-2022/3. Clinical data, images, as well as pathology results were collected from the patients' medical records and analyzed.
Results Of the 989 patients who were followed-up for at least 5 years, 18 patients were found to have late cyst formation and expanding hematoma. 13 of 18 patients received craniotomy due to progression of their complications. Upon histological examinations, organizing hematoma with fresh and dated hemorrhage, fibrinoid necrosis of the vessels, gliosis of normal brain tissue, infiltration of hemosiderin-laden histiocytes, as well as extravascular protein leakage were all observed in either the expanding hematomas or brain tissues intervening AVMs in all specimens.
Discussion We propose that both delayed cysts and expanding hematomas arise from radiation induced vascular damage in brain tissues adjacent to the AVM. Radiation during GKS induced increased permeability of the vessels, chronic inflammation, brain parenchyma atrophy, and extravasation of red blood cells. Expanding hematoma forms from recurrent hemorrhage from the radiated vessels into the adjacent brain parenchyma whereas expanding cysts had recurrent hemorrhage in a cystic space.
Conclusions The current study reports 18 cases of expanding hematomas or cysts developed after GKS for AVM. 13 of them underwent craniotomy and histology examinations showed similar results. Hence, we propose that expanding hematomas and cysts have alike mechanism of recurrent hemorrhage from the radiated vessels.

AG9-2

Long-term results of gamma knife radiosurgery for pediatric arteriovenous malformations

Kazuhiro Yamanaka[1], Yumiko Okada[1], Kenichi Ishibashi[1], Tomoya Ishiguro[2], Noritsugu Kunihiro[3], Yoshiyasu Iwai[4]

[1] Department of Neurosurgery, Osaka City General Hospital, Japan
[2] Department of Neuro-Intervention, Osaka City General Hospital, Japan
[3] Department of Pediatric Neurosurgery, Osaka City general Hospital, Japan
[4] Department of Neurosurgery, Tominaga Hospital, Japan

Objective We investigate the long-term outcome of gamma knife radiosurgery (GKS) for brain arteriovenous malformations (AVMs) in children (=<15 years of age).
Methods Among pediatric AVM patients who underwent GKS from January 1994 to December 2021, we examine 100 lesions in 87 cases with follow-up of at least 6 months. The cases included 44 boys and 43 girls, median age 11 (range 4-15) years, and 53 (61%) had a history of hemorrhage prior to treatment. The regions included 68 (68%) cerebral lobes, 12 (12%) basal ganglia/thalamus, 8 (8%) corpus callosum, 5 (5%) cerebellum, 3 (3%) brainstem, etc. The Spetzler-Martin grade was Ⅱ in 52 (52%), Ⅲ in 25 (25%), and Ⅰ in 15 (15%) patients, etc. The median lesion size was 1.5 ml (0.08-25.4 ml), and the median prescribed dose to the nidus margin was 20 Gy (range 10-25 Gy). The median follow-up period after initial treatment was 48 months (range 6-301 months).
Results The cumulative obliteration rates of nidus at 5, 10, and 15 years after treatment were 66, 70, and 79%, respectively. Hemorrhage after GKS was observed in 6 cases (7%), and the hemorrhage period ranged from 21 to 135 months after treatment. Four patients (4.6%) had enlarged nidus after GKS, and 13 patients (15%) underwent repeat GKS for residual nidus 41-207 months after the initial treatment. As for complications, 7 cases (8%) developed symptomatic radiation injury within 24 months after treatment and they were transient except for 1 case that was operated on. There were 2 cases of asymptomatic cyst formation and 3 cases of chronic encapsulated hematoma appearance between 60-144 months after treatment. No malignant tumors were observed.
Conclusions GKS is effective in pediatric AVMs even after long-term observation. The possibility of complications during long-term follow-up should be kept in mind.

AG9-3

Effect of treatment of cerebral arteriovenous malformations (AVMs) on AVM-associated epilepsy

Etsuko Yamamoto Hattori, Hisae Mori, Taichi Ikedo, Koji Iihara, Hiroharu Kataoka

Department of Neurosurgery, National Cerebral and Cardiovascular Center, Japan

Background About half of patients with arteriovenous malformations (AVMs) develop epilepsy. Although AVM-associated epilepsy is reported to improve with treatment of AVMs, treatment can induce seizures in some cases.
Methods 545 patients with AVM who underwent treatment decisions or interventions at our hospital between February 2002 and August 2022. Patients were classified into 3 groups: surgical resection, stereotactic radiotherapy, and conservative treatment, and the Engel classification and cumulative seizure rate were retrospectively evaluated.
Results 153 patients developed epilepsy during the course of the study (excluding patients who received only prophylaxis or had an unknown history of epilepsy treatment). The mean age was 32 years, 87 (56.9%) were male. Surgical resection was performed in 53 patients, stereotactic radiotherapy in 82 patients, and conservative treatment in 24 patients (some overlap). 42 patients (27.5%) had their first seizure after AVM treatment. 50 patients (32.7%) had Engel classification IVC; 23 patients by surgical resection, 29 patients by stereotactic radiotherapy (some overlap), with no difference by treatment ($p = 0.322$). The 3-year seizure rate for supratentorial lesions was 30.8% for surgical resection, 17.1% for stereotactic radiotherapy, and 29.7% for conservative treatment ($p = 0.002$, Kaplan-Meier method).
Discussion About 33% of the patients had worsening seizure control after AVM treatment, possibly due to perioperative edema after surgical resection or transient edema after stereotactic radiotherapy. Stereotactic radiotherapy had the lowest cumulative seizure rate, which was thought to be due to the slower edema compared to surgical resection.
Conclusions AVM-associated epilepsy can be exacerbated by AVM treatment and requires attention to perioperative seizures.

AG9-4

Two cases of response to gamma knife radiosurgery for arteriovenous malformation complicated by Moyamoya disease

Junji Fukumori, Eika Hamano, Hisae Mori, Akihiro Niwa, Yuji Kushi, Koji Shimonaga, Taichi Ikedo, Kiyofumi Yamada, Hirotoshi Imamura, Koji Iihara, Hiroharu Kataoka

Department of Neurosurgery, National Cerebral and Cardiovascular Center Hospital, Japan

Introduction Moyamoya disease (MMD) and cerebral arteriovenous malformation (AVM) rarely coexist.
We report two coexisting MMD and AVM cases that were effectively treated with gamma knife radiosurgery (GKRS).
Case 1 A 46-year-old woman. MMD was diagnosed following intraventricular hemorrhage. She also had a cerebellar AVM (Spetzler-Martin grade 2) with the right superior cerebellar artery (SCA) as a feeder. We performed the right STA-MCA bypass for MMD. GKRS for AVM was performed one year after bypass surgery, and complete nidus occlusion was confirmed four years after GKRS.
Case 2 A 22-year-old man. He was diagnosed with MMD, caused by ischemic infarction of the right occipital lobe. He underwent the right STA-MCA bypass; five years later, the progression of the contralateral lesion required the left STA-MCA bypass and encephalo-myo-synangiosis (EMS).
MRA fifteen years after showed an aberrant vascular signal in the right frontal lobe, diagnosed the AVM, and GKRS was performed. Three years following the GKRS, the nidus is disappearing.
Discussion Taking measures to prevent AVM rupture in patients with MMD is critical because a ruptured AVM can result in death due to cerebral ischemia associated with elevated cerebral pressure.
In addition, treatment for MMD might involve further revascularization procedures.
Craniotomy of the AVM may result in graft injury and unanticipated indirect anastomosis; GKRS may be advantageous in minimizing these complications in AVMs in both disorders.
Conclusions GKRS successfully treated both of the highly unusual cases of AVM associated with MMD.

第20回 一般社団法人 日本ガンマナイフ学会学術総会
第 8 回 アジア・レクセル・ガンマナイフ学会
プログラム・抄録集

2023年 1 月18日　発行

発　行　人：第20回 一般社団法人 日本ガンマナイフ学会学術総会
会長：森木　章人
（医療法人治久会 もみのき病院）
第 8 回 アジア・レクセル・ガンマナイフ学会
会長：周藤　高
（独立行政法人労働者健康安全機構 横浜労災病院）

学会事務局：医療法人治久会 もみのき病院
〒780-0952
高知県高知市塚ノ原 6 － 1

運営事務局：株式会社 歳時記屋
〒780-0072
高知県高知市杉井流19番 2 号

協賛企業一覧・Sponsorship

エレクタ株式会社（Elekta K.K.）

アミン株式会社（AMIN Co.,Ltd.）
一般社団法人 日本血液製剤機構（Japan Blood Products Organization）
イドルシアファーマシューティカルズジャパン株式会社（Idorsia Pharmaceuticals Japan Ltd.）
Integra Japan株式会社（Integra Japan K.K.）
エーザイ株式会社（Eisai Co., Ltd.）
エス・アンド・ブレイン株式会社（S&Brain Corporation）
エム・シー・メディカル株式会社（MC Medical, Inc.）
欧和通商株式会社（OHWA TSUSHO CO., LTD.）
大塚製薬株式会社（Otsuka Pharmaceutical）
株式会社パイオラックスメディカルデバイス（PIOLAX MEDICAL DEVICES, INC.）
株式会社メディカ・ライン（MEDICALINE CO.,LTD.）
グンゼメディカル株式会社（GUNZE MEDICAL LIMITED）
シーメンスヘルスケア株式会社（Siemens Healthcare K.K.）
ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社（Johnson & Johnson K.K.）
第一三共株式会社（DAIICHI SANKYO COMPANY, LIMITED）
千代田テクノル株式会社（Chiyoda Technol Corporation）
日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社（Nippon Boehringer Ingelheim Co., Ltd.）
日本ストライカー株式会社（Stryker Japan K.K.）
日本電子応用株式会社（NIHON DENSHI OHYO CO., LTD.）
日本メドトロニック株式会社（Medtronic Japan Co., Ltd.）
ノバルティスファーマ株式会社（Novartis Pharma K.K.）
ブレインラボ株式会社（Brainlab K.K.）
Ubie株式会社（Ubie, Inc.）
横浜市立大学医学会（Yokohama City University Medical Association）

2023年１月18日現在

第20回一般社団法人日本ガンマナイフ学会学術総会およびThe 8th Meeting of the Asian Leksell Gamma Knife Societyを開催するにあたり、上記企業・団体様よりご支援を賜りました。
この場をお借りして感謝申し上げます。ご支援誠にありがとうございました。

第20回一般社団法人日本ガンマナイフ学会学術総会
会長　**森木　章人**

The 8th Meeting of the Asian Leksell Gamma Knife Society
President Takashi Shuto

Medtronic

Robotic precision. Powered by you.

Stealth Autoguide™ Cranial Robotic Guidance Platform

Stealth Station™ + Robotics

日本メドトロニック株式会社
クラニアル&スパイナルテクノロジーズ
イネイブリングテクノロジー

medtronic.co.jp

販売名：ステルス　Autoguide	医療機器承認番号：30200BZX00298000
販売名：ステルスステーション S8	医療機器承認番号：23000BZX00285000
販売名：ステルスステーション　ナビゲーションシステム	医療機器承認番号：22600BZX00110000
販売名：Navインスツルメント	医療機器届出番号：13B1X00261S00001
販売名：マイダスレックス　Depth Stopアタッチメント	医療機器届出番号：13B1X00261T00013
販売名：マイダスレックス　Depth Stopツール	医療機器認証番号：302ADBZX00088000
販売名：マイダスレックス　レジェンド　EHSシステム	医療機器承認番号：21900BZX00492000

使用目的、警告・禁忌を含む使用上の注意等の情報につきましては製品の電子添文をご参照ください。

ET.10122020.A-a/SHO-AD

ユビーAI問診

AI問診で外来業務を効率化しませんか？

事例

高知市病院様_AI問診事例

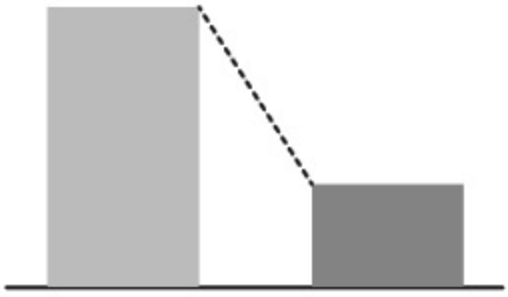
高知県　60床

> ユビーAI問診の導入で医師や看護師の
> 負担軽減・人件費削減を達成

ユビーAI問診導入後の変化

受診から診察終了まで

約14分短縮



外来看護師

13人→11人

2名は病棟などの
別業務へ回れるように

ご興味お持ちいただけましたら
右側のQRコードよりお問い合わせください！

磁気共鳴診断装置

MAGNETOM Lumina with BioMatrix

Confidence to deliver

www.siemens-healthineers.com/jp

今、医療現場に求められる高い生産性と再現性、そして高い診断画品質を実現するために設計された
3Tオープンボア MRI 装置、それが MAGNETOM Lumina です。
MR 検査を変化させる「BioMatrix」が全ての患者に高品質な MR 画像を提供。
高速撮像パッケージ「Turbo Suite」が MR 検査の生産性を高め、確実な診断性を実現します。

SIEMENS Healthineers

血漿分画製剤　　薬価基準収載

ボルヒール®組織接着用

生体組織接着剤　BOLHEAL®　献血

特定生物由来製品　処方箋医薬品　注意-医師等の処方箋により使用すること

※効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については、
添付文書をご参照ください。

製造販売元
KMバイオロジクス株式会社
熊本市北区大窪一丁目6番1号

販売元
一般社団法人
日本血液製剤機構
東京都港区芝浦3-1-1

BOL-202207

［文献請求先及び問い合わせ先］
一般社団法人 日本血液製剤機構　くすり相談室
〒108-0023 東京都港区芝浦3-1-1　医療関係者向け製品情報サイト　https://www.jbpo.or.jp/med/dl/

stryker

Sonopet iQ

Ultrasonic Aspirator System

A new wave of **brilliance**

Introducing Sonopet iQ®
with Pulse Control
Custom waveforms for resection
control by tissue type

医療機器承認/認証番号	販売名	
30100BZX00221000	ソノペット iQ	
30100BZX00222000	ソノペット iQ	単回使用チップセット
30LAFBZX00066000	ソノペット iQ	イリゲーションサクションカセット

※本製品に関するお問い合わせは弊社営業までお願いいたします。

製造販売業者
日本ストライカー株式会社
112-0004 東京都文京区後楽2-6-1 飯田橋ファーストタワー
P 03 6894 0000
www.stryker.com/jp

Value through Innovation

人々のより良い健康のために

ベーリンガーインゲルハイムは、
株式を公開しない企業形態の特色を生かし、
長期的な視点で、医薬品の研究開発、製造、販売を中心に
事業を世界に展開している製薬企業です。

Value through Innovation をビジョンに掲げ、
革新的な医薬品の開発を通じて、人類に奉仕することが、
我々が自らに課した使命です。

日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社
本社／〒141-6017 東京都品川区大崎2-1-1 ThinkPark Tower
https://www.boehringer-ingelheim.jp

Boehringer Ingelheim

INTEGRA ONLINE
NEUROSURGERY

脳神経外科医の知りたい情報が詰まったウェブサイト
Integra Online オリジナルコンテンツを随時更新！

- ✓エキスパート達が語る
  自身のキャリアとプライベート
- ✓卓越した手技とナレッジ
- ✓文献サマリーやトレンド情報

↑詳細はこちら

INTEGRA®
LIMIT UNCERTAINTY

Integra Japan 株式会社
〒107-0052　東京都港区赤坂１丁目７番１号 赤坂榎坂ビル
Email: info@integraonline.jp

ZAP

NO VAULT

NO COBALT

NO COMPROMISES

ZAP-X® Gyroscopic Radiosurgery® Platform

販売元

エム・シー・メディカル株式会社

〒108-0075 東京都港区港南2-16-1 品川イーストワンタワー12階
TEL 03-5715-2813

選任製造販売業者

株式会社千代田テクノル
TEL 03-3252-1691

製造元

ZAP

承認番号：30200BZI00012000　販売名：ZAP-X ラジオサージェリーシステム

* http://www.prweb.com/releases/zap_surgical_announces_u_s_patent_and_trademark_office_rules_elekta_patent_claims_invalid/prweb17844481.htm

Elekta

Elekta Esprit

a Leksell Gamma Knife

Protect the mind
Protect the person

Elekta Esprit* is designed to do more than just preserve life, it's designed to preserve a whole lifetime.

By targeting even the smallest, most challenging intracranial targets while protecting essential healthy tissue, you can effectively treat the patient while keeping their self, safe.

elekta.com/elekta-esprit

エレクタ株式会社　www.elekta.co.jp
〒108-0023　東京都港区芝浦3-9-1 芝浦ルネサイトタワー7F
TEL：03-6722-3808　FAX：03-6436-4231

製造販売承認番号：22000BZX00768000
販売名：レクセル ガンマナイフ パーフェクション（CBCT オプション付システム構成）